609-434
1200501534061
609
F

33.12.15

2954

漱石襍記

小宮豐隆著

小山書店刊

昭和一〇・五・一 受入

609-434

序

漱石先生が亡くなつた當座、私は、方方の新聞・雜誌から、頻に先生に就いて書く事を求められた。然し當時私は、先生に就いて、纒まつたものを書きたい希望を持つてゐたので、一一それを斷つた。そのうち先生を記念する爲めの、先生遺作の書畫の展覽會が催され、その紹介めいたものを、新聞に書いたのがきつかけとなつて、その後私は、不本意ながら、ぽつりぽつり、先生の事を書くやうになつてしまつた。今集めてみると、それがもう、是だけの分量になつてゐるのである。

當初希望してゐた通りに、先生に就いて纒まつたものを書きもしないで、こんな切れ切れのものを、一纒めにして公けにするといふ事は、當初の希望の手前、甚だきまりの悪い

事である。然し何等かの方法で、是まで書いたものに、一往の段落をつけて置くといふ事は、この先尙かうした切れ切れのものを書き續ける癖を矯める上にも、また當初の希望のやうに、先生に就いて纏まつたものを書く事を促進する上にも、必要な事である。その意味で私は、敢て是を公けにする氣になつたのであるが、然し私は、このばらばらなものに、せめてもの體裁を與へる目的で、最後に『「明暗」の構成』を書き綴つた。先生の處女作『木屑錄』の解說から始まつて、『猫』以前、『猫』、『坊つちやん』、『草枕』、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『道草』と、それそれ、假令精疎の別はあつても、ともかくこの集中の文章の何所かで、多少でも觸れてゐるのに、先生最後の大作『明暗』に少しでも觸れてゐるものがないといふ事は、何か物足りない氣がしたからである。

殊に『明暗』は、未完結の作品であるせゐか何か、是まで先生を論じた人人で、未だ嘗てまともに、是に觸れた人は、殆んどないと言つて可いのである。然も『明暗』は、進展して已まなかつた先生の、最後の作品として、假令未完結ではあつても、苟も漱石を論じようとするほどの人の、是が非でも觸れなければならない、重要な作品なのである。私の『「明暗」の構成』は、元より『明暗』の藝術的價値や、『明暗』の漱石の生活に於ける意義を明らめる目的の下に、執筆されたものではなかつたが、然し少くとも『明暗』研究の、一つの基礎工事のやうなものであるとは、或は言つて差支ないものではないかと思ふ。私は是まで度度、『明暗』はあの先きどうなるのかと、人人から質問された。あの先きどうなるかは、作者自身といへども、精到には答へられなかつたのかも知れない。作者がかうしたいとは思つてゐても、事件が自然にさう發展して行くのでない限り、作者は無理に、自分の注文通り、事件を發展させる事は出來ないからである。無理にそんな事をすれば、小說はあざとい拵へ物にしかならない。然るに『明暗』の世界では、事件全體が、既に自然に、一つの方向に向かつて動きつつあるのである。その動向が私に示唆するものを、『明暗』それ自身の內部から材料を拾ひ集める事によつて、その最後の到達點を揣摩して見ようとしたものが、この『「明暗」の構成』であつた。是は、一方から言へば、人人の質問に對する、私の返事であるのに外ならない。

元來日本の作家の內で、先生ほど一般的に、讀書階級を動かした作家は、まづないと言

つて可いだらうと思ふ。その人氣が、二十年後の今日までも尙續いてゐる事は、岩波文庫本の、先生の小說の賣れ高を見ても分かる。それにも拘はらず先生ほど一般に、ほんとの値うちが理會されないでゐる作家も、亦少ないのではないかと思はれる。人人によれば、先生は、いつでも餘裕派であり、低徊派であり、俳諧的であり、遊戯的であり、理論家であり、抽象家である。是は、先生に就いて何かを書き、先生に就いて何かを語る人が、凡て、自分の眼で先生の作品を見るのでなしに、他人の書いたもの、殊に狹隘な、さまざまなイデオロギーに囚はれた人の書いたものに導かれる爲であるのに相違なかつたが、然しそれらの人人といへども、先生の作品そのものを通して先生の內面に、鋭利に且つ深切に觸れる道を知るならば、假令同じ言葉を用ひて先生の特質を道破しようとするとしても、その言葉は、必ず是までとは可也違つた光の下に照らし出された、從つてそれは、輕蔑の意味ではなく、反對に尊敬の意味を持つた、特別な言葉になつた筈であると思はれる。

あらゆる先入見から離れ、ぢかに自分の眼で先生を眺め、ぢかに自分の生活と先生の生活とを對應させ、それによつて、比較的安泰らしく見える外貌の奥に渦卷いてゐる、先生の血の出るやうな、生活の苦鬪の跡を跡づける事に、この集がいくらかでも手傳ふ事が出來るならば、私のこの集を公けにする公的意味は成就し、私の幸ひ是に過ぎたるはない事になるのである。私は、せめて一人でも、さういふ人がある事を冀ひつつ、かういふ「襍記」を公けにするうしろめたさを、强ひて押へる事にしたいと思ふ。

昭和十年四月二十日

小宮豐隆

漱石襍記目次

『木屑錄』解說……一
『猫』が出現するまで……一七
『吾輩は猫である』に就いて……五九
『夏目漱石集』の初に……八九
『夏目漱石集』の終に……九三
『こゝろ』解說……一〇五
『明暗』の構成……一一三

漱石先生……一五七
漱石先生の畫……一七三
カーライル博物館……一七七
小説とそのモデル……一八七
漱石先生の『オセロ』……二〇一
漱石先生のてれ隠し……二六七
夏目先生のこと……二七三
日記の中から……二八三

195249
9.20. M

『木屑錄』解說

『木屑錄』は、漱石自身その表紙に書いてゐるやうに、明治二十二年九月九日に書き上げられたものである。明治二十二年の九月といへば、漱石が二十三の年、さうして漱石が第一高等中學校の本科第二部の一年から二年になつたばかりの時であつた。漱石はこの年七月二十三日、季兄とともに興津に赴き、八月二日に東京に歸つて來てゐる。同じく八月の七日には同窓の友四人と一緒に房總地方に出かけ、三十日に東京に歸つて來てゐる。その房總地方の旅の事を書いたものが、この『木屑錄』である。

『木屑錄』の跋を見ても分かるやうに、漱石は是を、書き放しに書いて行つて、出來上がつてから、一字も改める事がなかつた。勿論筆をとりあげるまでには、多少の時間が費

されてゐるには違ひなかつたが、然し筆をとつてからは、割に早い速度で滔滔と書きおろされ、從つて是が書きあげられるまでには、僅かな時間しかかからなかつたもののやうに見える。漱石が旅から歸つて來たのは、八月三十日の事である。さうして是が脫稿されたのは、九月九日の事である。その間には十日の日子が挾まつてゐるが、然し漱石がこの『木屑錄』を書く爲に潰した時日は、恐らくその半分よりも、もつと少ないものではなかつたかと想像される。後年作家になつてからの漱石の、原稿を書く速度は早かつた。その晩年こそ漱石は、例へば『明暗』の場合のやうに、午前中を潰して新聞の一回分を書き、そのあとは詩を作つたり畫をかいたりして暮すといふやうな習慣を持つてゐたが、一般に漱石の、殊に小說を書き出した時分の漱石の、原稿の書き方は、筆をおろすまでの間は、手間がとれても、一旦筆をおろすと、書き放しででもあれば、滔滔として速くもあつた。『幻影の盾』や『薤露行』のやうな、文章に鏤骨雕心の痕を止めてゐるものは例外であるとしても、例へば『草枕』などでも、凡そ一週間くらゐで出來あがつたものだと言はれてゐる。『猫』の第七回と第八回と、合せて凡そ百五十枚の原稿は、通して、六日くらゐの間に書き上げられた。さういふ原稿の書き方は、既にこの『木屑錄』の時分から、漱石によつて實行されてゐるのである。

『木屑錄』は漱石が、自發的に他人に見せる事を目的として書いた、纏まつた作品の、恐らくは最初のものであつた。然も是は、正岡子規に見せる事を目的として書かれ、また正岡子規から刺激されて書かれたものであるやうに見える。

『木屑錄』の卷尾に添へた子規の批評の一節によれば、漱石と子規とが知り合ひになつたのは、明治二十二年の一月の事であつた。さうして二人は直ちに會心の友となつた。然も子規はこの時分から既に文壇に立つ野心があつて、漢詩を作り、和歌を作り、發句を作り、小說を作り、文藝のあらゆる形式に自分の手腕を練りつつ、驥足を伸ばす準備に怠りがなかつたやうに見える。子規が馬琴を愛讀し、春水を愛讀し、近松を愛讀し、西鶴を愛讀し、一方では、龍溪を愛讀し、逍遙を愛讀し、二葉亭を愛讀し、篁村を愛讀し、露伴を愛讀してゐたのも、凡そこの時分の事である。その子規が『七草集』を完成したのが、明治二十二年の五月一日であつた。それは直ちに子規の友人の間に廻覽され、友人はその卷

末の餘白に、各讀後の感想を書き入れた。

『七草集』は「蘭之卷」・「萩之卷」・「女郎花の卷」・「芒のまき」・「葛のまき」・「瞿麥の卷」の七卷から成り立ち、漢文・漢詩・和歌・發句・謠曲・論文・小說と、それぞれの卷でそれぞれ違つた形式を用ひて、主として子規が前年の夏を過ごした向島、及びその向島から引き出されたさまざまの空想を、描き出さうと試みたものであつた。是は、藝術的な價値から言へば、無論問題とするに足りないものである。然し漱石はその卷尾に五月二十五日の日附で、漢文で批評を書いて、「不知吾兄校課之餘。何暇綽々能如此。僕天資陋劣。加疎懶爲風。齷齪沒于紅塵裡。風流韻事蕩然一掃。愧于吾兄者多矣。」などと言ひ、續いて、卷中に取り扱はれた事實や、それを取り扱ふ作者の風懷などを詠じた、九首の七言絕句を附け加へた（この時漱石は、初めて自分の雅號として、漱石なる語を用ひる。然も子規が、子規といふ雅號を用ひ始めたのも、明治二十二年の五月九日に咯血して以來の事であつた。親しかつた二人が、同じ年の同じ月に、然も僅に半月を隔てて、一生の雅號を名のり始めたといふ事は、勿論偶然であるには相違なかつたが、何か不思議な

因緣ででもあるといふ氣がする）。

「漱石は當時、和歌も發句も、況んや謠曲や小說など、少しも試みてはゐなかつた。ただ漱石は是より先、漢文が好きで、漢詩には自信はなかつたが、然し漢文には多少の恃む所もあつたらしく、文章をもつて身を立てる事を希望し、漢文で色んなものを書いて、その方面の修業に專念した時期を持つてゐた。」是は『木屑錄』の序に詳しく書かれてゐる所である。「然も漱石は高等中學に這入り、英語を學び、英文學を修める氣になつてからは、寧ろ英文で何かを著述する大望を懷き、その爲め好きな漢文を捨て、その方面の修業にも全然志を斷つてしまつてゐたのである。然し、子規と交際し、子規の『七草集』を讀むに至つて、一度志を斷つた漱石の漢詩文の世界は、假令英語と英文學との修業を壓倒するほどの勢力を持つて蘇りはしなかつたとしても、再び漱石の頭の中で、可也力强く動き出して來たもののやうに見える。」それを證明するものは、先づ『七草集』の卷尾に附記された、漢文の批評である。次いでその批評の後に添へられた、九首の七言絕句である。『七草集』に於ける子規の漢文は、漱石の中の漢文を呼び出し、『七草集』に於ける子規の漢詩は、漱

石の中の漢詩を呼び出したに外ならないのである。

その後學年試驗が濟んで、夏休みが來た。一度子規によつて點火された、漱石の頭の中の漢詩文の世界は、夏休みの閑散を機會として、頻に自分自身を外に押し出さうとし始める。漱石が季兄と興津に遊んで滯在する事十餘日、東京に歸つてから、當時松山に歸省してゐた子規にあてて書いた手紙の中の、「都城之西、六十餘里、山勢隆然、拔地面起……」と書き出してゐる、漢文を以つてする興津の描寫は、その衝迫の一つの現はれであつた。

然しこの興津の描寫は、手紙の中に書かれたものであり、又極めて短い斷片であるに止まつて、一つの全體として、纒まり上つたものではなかつた。是は漱石が興津に落ついてゐられなかつた爲でもあるに違ひないし、また歸京してから、東京にゐる事僅に五日、すぐ房總地方に向つて出發するといふやうに、此所でも亦落ついてゐられなかつた爲でもあるに違ひなかつたが、事實は漱石の頭の中の漢詩文の世界が、纒まつたものとして自分自身を押し出して來るほど、それほど熟し切らなかつた爲であると言つて可いと思ふ。

それが房總地方の旅では、心持の餘裕もあり、子規との漢詩の應酬もあり、次第に漱石の頭の中で熟しつつ、八月三十日再び東京に歸つて來て、再び落ついた心持になると、次第に纒まつた形をとつて、愈表現を迫るものとして、漱石をつつき始めるのである。漱石は筆をとつた。さうして九月九日に『木屑錄』が出來あがつた。

然もその際漱石の頭の中にあつた讀者は、子規一人であつたやうである。是は子規が、當時の隨筆『筆まかせ』の中で、この『木屑錄』讀後の感想を書いた末に、「獨り漱石は長ぜざる所なく達せざる所なし。然れども其英學に長ずるは人皆之を知る。而して其漢文漢詩に巧なるは人恐らく知らざるべし。故にこゝに附記するのみ。」と言つてゐるので見ても、凡その想像はつく。然もこの事は、漱石が、當時子規以外、同窓に、その方面では語るに足りるものがないと考へてゐたせゐもあつたには違ひなかつたが、然しそれよりも、寧ろ、愼み深い內氣な漱石は、相許した子規以外の人達に、それを見せようとするほど、それほど大膽にはなれなかつたせゐであるに違ひないと思はれる。その上、積極的に慫慂したのではないまでも、いろんな意味で漱石を刺激した者が子規であるとすれば、漱石が子規のみを讀者として是を書いた事も、極めて當然の事だつた筈である。

子規は漱石を、友人として、畏敬してゐたやうである。その事は子規が、當時の漱石の手紙を、多く『筆まかせ』の中に書き寫してゐるのみならず、死ぬまで漱石の手紙の大部分を、丁寧に保存してゐたのでも知れる。又その事は、この『木屑錄』の卷尾に書き入れた、子規自身の批評に就いて見ても、明白である。それのみではない。子規は『筆まかせ』の中で、手紙の書き拔き以外、所所に漱石の事を書いてゐるが、子規は漱石の事を書きさへすれば、殆んど必ず漱石を畏敬する意味の事を書いてゐるのである。「近頃我高等中學校に道德會ともいふべきものを起す人あり。余にもすゝめたれど、余は之に應ぜざりき。漱石も亦異說を唱へたり。「余は今、道德の標準なる者を有せず、故に事物に就て善惡を定むること能はず。然るに今道德會を立て道德を矯正せんといふは、果して何を標準として是非を知るや。余が今日の擧動は其瞬間の感情によつて起る者なり。擧動の善惡も其瞬間の感情によつて定むる者なり。されば昨日の標準は今日の標準にあらず」と。余の說も略々これに同じ」といふやうなのもそれである。「余さき頃夏目漱石と共に醫師に往きて診察を待つこと二時間、漱石余に對つて曰く、君はかく爲すこともなくて過ぐす時間を惜しきとは思はざるやと。余答へて〔中略〕といへば、漱石うなづきて「余も同感なり。余此夏駿州や總州邊へ行きし時も、時々讀書の事を思ひ出でて、時間の浪費の惜しきよしいひしに、つれの者は皆笑ひゐたり。俗人とは話もできず」云々と語りたりき。是等の人を談心の友ともいふべきにや」といふやうなのもそれである。子規はまた自分の友人を、愛友・良友・好友・敬友・益友・舊友・酒友・文友・鄕友・亡友・直友・少友などと、凡そ十九種に分類して、一一その下に名前を書き込んでゐるが、その分類によれば漱石は「畏友　夏目金氏」であつた。

然し子規は、漱石の人物や學問に對しては、畏敬の念を懷いてゐても、文筆の才に於いては、自ら一日の長を以つて任じてゐたもののやうである。殊に愼しみ深い內氣な、然も自分の中には燦爛たる寶庫が藏されてゐるといふ事さへ知らずにゐるほど、謙虛ででもあつた漱石は、さういふ點では、多く子規の言ひなりになつて、子規に對して少しもその鋒鋩を示す事がなかつた爲に、子規は一層その感を深くしてゐたものに違ひないと想像される。勿論漱石と子規とは、極めて頻繁に手紙のやりとりをしてゐた。名文の手紙を書いた

漱石は、當時といへども、可也立派な手紙を書いてゐるのである。然し二十二三の年頃では、手紙の文章に注目するより前に、其所にかかれてゐる内容に――寧ろ多くの場合は、其所に漂ふてゐる感情に注目するのが普通である。『七草集』の批評も、批評の後に添へられた七言絶句も、或は手紙の中の興津の描寫も、文章として讀むよりも、手紙として讀む態度が勝つ爲に、子規にとつてそれは、漱石の文才を尊敬するといふやうな、特別な機緣にはならなかつたものであるに相違ない。從つて子規は、『木屑錄』を讀むまでは、漱石に對して、一方では、到底敵はないといふ氣はあつても、一方では、私かに恃む所を持つ事が出來てゐたのである。

其所へ卒然として、『木屑錄』が現はれた。子規は、漱石にさういふ事を豫期してゐなかつただけに、それだけ驚ろきも大きかつた。子規は批評の中で「然而曩者接吾兄時。使余一驚。而今復讀此詩文。使余再驚。不知後來。欲揮何等奇才。而使余幾驚耶。」と言つてゐるが、是は恐らく子規が、本當にさう感じた事を、正直に告白したものであらう。

元來子規は、一面なかなか人に許さない所を持つてゐながら、一面また人に惚れ込み易く、驚ろかされ易い所を持つてゐた。是は勿論子規の感受性の豐富を示すもので、子規の弱點であるよりも、寧ろ子規の長所をなすものである。然し子規の『木屑錄』に對する驚ろきは、『木屑錄』そのものに對する驚ろきとともに、殆んどさういふものを豫期しなかつた漱石が、最も豫期しなかつた漢詩文の世界で、思ひがけもなく立破なものを書いたといふ事、その事に對する驚ろきも加はつて、その驚ろきは可也深刻なものであつたやうに想像される。「如吾兄者。千萬年一人焉耳」といふ批評には、無論白髮三千丈流の誇張があるには違ひないが、然し事實は子規は、さういふ言葉でしか表現する事の出來ない程の、劇しい驚ろきを經驗したものであらう。子規がいかに驚ろいたかは、この『木屑錄』に最大級を用ひて長い批評を書いてゐるのみならず、その『筆まかせ』の中に『木屑錄』中の佳所を抜き書して、或は「距岸數町。有一大危礁當舟。……」の一節に對しては、「濤勢云々の數句は英語に所謂 personification にて波を人の如くいひなし、怒といひ攫といひ躍といふ、是の如くつゞけて是等の語を用ゐしは恐らく漢文に未だなかるべく、漱石も恐らく氣がつかざりしならん。されど漱石固より英語に長ずるを以て知らず〳〵こゝに至りし

のみ。實に一見波濤激礁の狀を思はしむ。又後節鳥を敍する處、精にして雅、航海中數々目擊すること、而も前人未だ道破せず、而して其文支那の古文を讀むが如し」と評し、或は「鋸山如鋸碧崔嵬」を以つて始まる詩に對しては、「其曲調極めて高し。漱石素と詩に習はず、而して口を衝けば則ち此の如し。豈畏れざるを得んや」と言ひ、或は「客中憶家」の詩に對しては、「此詩の如き眞個の唐調にて天衣無縫ともいはんか。殊に第二句の如き我輩等の思慮し得る句にあらず」と斷じ、總評して「余の經驗によるに英學に長ずる者は漢學に短なり。和學に長ずる者は數學に短なりといふが如く、必ず一短一長あるものなり。獨り漱石は長ぜざる所なく達せざる所なし」と激稱してゐるのを見ても、明白である。

然し子規も亦一箇の英雄たる事を失はなかつた。子規の藝術感覺の的確と雋敏とは、子規が『木屑錄』の到る所に、朱をもつて誌した、寸評に於いても現はれる。それは、今日の眼を以つてしても、大抵は首肯し得られる批評であるに止まらず、その批評の多くは、賞美するにしても非難するにしても、悉く漱石の急所に觸れてゐるのである。子規が此所で感じとつたものは、多少違つた言葉で言ひ現はしさへすれば、そのまま後年の漱石の小說の描寫の、大部分に適用する事が出來さうにさへ思はれるものを持つてゐる。例へば子規が口を極めて推稱した所謂 personification による自然描寫と、その岩礁の上にとまる「赤冠蒼脛」の鳥の描寫とは、自然を動的なものとして見、潰壓的な自然の動を一層潰壓的な一層動的な表現を以つて描寫する事を得意とした、特に小說作家としての初期の漱石の、描寫の特徵をなすものであるに外ならなかつた。然もその際、一面では大きな世界を大きく攫むとともに、一面ではその世界の中の小さな美しい一部分を精到に捕捉し、それと他の部分とを對照反襯させる事によつて、大きな世界をも小さな世界をも同時に活かしつつ、二つのものの調和から特別な趣きを導いて來る事も亦、小說作家として漱石の描寫の特徵をなすものであるに外ならなかつた。また例へば子規は、「倒竿而測其深則至沒竿水觸手而不能達也」の寫生を褒めたあとで、それに續く「蓋潮水澄淸日光透下而屈曲故水底之物浮々焉如在近而其實數尋之下矣」の理窟を非難する。この種の寫生も亦漱石得意の寫生であり、この種の理窟も亦漱石に長い間付いてまはつた理窟であつた。殊にこの理窟は、小說作家としての初期の漱石の描寫に頻出し、當時屢非難され、然も漱石はそれを容易に

首肯しようとしなかつた所のものだつたのである。

事實この『木屑錄』は、精到に研究すればするほど、後年の漱石の諸ろの特徴を、その中に縮圖として貯へてゐる作品であつた。漱石のものの見方や感じ方、見たものを感じたものを表現する表現のし方、漱石のロマンティシズムとリアリズムとの限度とその交錯のし方、もしくは漱石の感情と理知との限度とその交錯のし方、漱石の自然と人生とに對する態度、その他それに似た問題を提げてこの『木屑錄』に對するならば、人は此所から、後年の漱石を構成するあらゆる要素を、それも可也鮮やかな萌芽の形に於いて捕捉する事に、さしたる困難を感じないに違ひない。――無論その事は、この『木屑錄』が、堂堂たる傑作であるといふ事を意味しない。假令當時の子規が、當時の驚嘆から、「千萬年一人焉耳」と叫んだとしても、是がより多く歷史的意義をしか持たない作品であるといふ事は、言を費すまでもない事である。然も、その歷史的意義から言へば――夏目漱石なる作家の生成過程を跡づける材料としての意義から言へば――この『木屑錄』が重大である事は、是亦言ふを要しない事である。なぜなら我我は此所で、啻に後年の漱石のあらゆる要素の縮圖を發見する事が出來るのみならず、また當時の子規を知り、當時の子規を通して後年の子規を知り、且つ漱石と子規との關係を、普通に考へられてゐるよりも、更に深切に知る事が出來るからである。

「漱石は後に子規に勸められて、發句を作り始めた。更に後に漱石は子規にせがまれて、『ホトトギス』に『倫敦消息』を書いた。漱石がロンドンから歸つて來た時には、子規は既に死んでゐたが、當時子規の後繼者として『ホトトギス』を經營してゐた高濱虛子は、漱石にせがんで、漱石に『自轉車日記』を書かせ、『猫』を書かせ、『幻影の盾』を書かせ、『坊つちやん』を書かせた。さうして漱石は、竟に敎壇を去つて、純粹な作家になつた。然も當時、英語と英文學とに專心してゐた、學生漱石を刺激して『木屑錄』を書かせた者も、さうしてその『木屑錄』を激稱して、漱石の創作的方面を鼓舞した者も、亦子規であつたとすれば、子規は作家漱石を作り上げる上に、なくてはならない重要な人物であつたと言つても、決して過言ではなかつたのである。」――勿論子規がなくても、漱石の內なる寶庫は、何等かの機緣に觸發されて、その全貌を示し得たには違ひなかつた。然し若し子

規がなかつたなら、漱石は或は、學者としてのみ、その一生を過ごしてゐたのかも知れなかつた。その意味では、漱石と子規との交際は、作家漱石にとつては、殆んど運命的なものであつたと言つて可いのである。

その運命的であるとも言はば言はるべき子規との交際に於いて、漱石に對する子規の、運命的な働らきかけの第一歩を示すものが、この『木屑錄』なのである。（岩波版『木屑錄』――七・一一・二六）

『猫』が出現するまで

一

漱石はその『草枕』の中で、「子供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて、筆架をこしらへた事がある。それへ二錢五厘の水筆を立てかけ、白い穗が花と葉の間から、隱見するのを机へ載せて樂しんだ。其日は木瓜の筆架ばかり氣にして寐た。あくる日、眼が覺めるや否や、飛び起きて机の前へ行つて見ると、花は萎え葉は枯れて、白い穗丈が元の如く光つて居る。あんなに綺麗なものが、どうして、かう一晩のうちに、枯れるだらうと、其時は不審の念に堪えなかつた。」と書いてゐる。漱石は子供の時分から、自然に對する特別な愛情を持つてゐたのである。

然も明治二十二年九月、漱石が二十三の時に書かれた『木屑錄』の末には、「自嘲書木屑錄後」と題して、「白眼甘期與世疎。狂愚亦懶買嘉譽。爲譏時輩背時勢。欲罵古人對古書。才似老駘駑且駑。識如秋蛻薄兼虛。唯贏一片烟霞癖。品水評山臥草廬」と詠じた詩が添へてある。「世」と疎く「嘉譽」を買ふに懶く、「時輩」に譏られ「時勢」に背き、然も自分には才もなく識もないと信じてゐる漱石は、然し自分には一片の「烟霞癖」がある、是あるが爲に自分は、假令「世」の中の事がどうであらうと、「草廬」に臥し、水を品し山を評して、生きて行く事が出來るのだと言ふのである。此所では自然は、自然そのものとして愛せられるといふよりも、寧ろ人間との對照に於いて愛せられる。漱石の人間への嫌惡が、漱石の自然への愛情を、一層濃厚なものにするのである。

然しこの事は漱石が、若くして既に人間を愛しなくなつたのだといふ事を意味しない。反對にこの事は漱石が、いかに眞摯に、いかに熱烈に、人間を愛してゐたかといふ事を意味する。——

漱石は、子供の時分から、家庭的には、不幸であつた。漱石は、兩親の年とつてから生

れた末つ子として、生れ落ちるとからすぐ里子に出され、姉の同情によつて其所から取り戻されはしたものの、亦すぐ養子に遣られ、小さい時から、春日のやうな雙親の愛情に浴する事が出來なかつた。然もその養父と養母との、全然教養のない、私の多い人となりや、第三の女を挾んでの彼等の不和や、その不和から釀し出されるヒステリ的な家庭内の空氣や、さういふものは幼い漱石の頭を刺激して、新しい雙親の愛情を素直に受け容れる事を不可能にしたのみではなく、漱石をして彼等を輕蔑せしめ、また漱石の心を頑なに反抗的なものにしてしまつた。この事は漱石自身が、既にその『道草』に於いて、具に描寫してゐる所である。然もさういふ特殊な狀態に置かれた漱石が、一方では、いかに愛情に餓ゑてゐたかは、『硝子戸の中』の第二十九を讀んでも知れる。漱石は其所で、自分が子供の時分、養家先から取り戻されて、實家に寐起きするやうになつた時、或晩女中から「貴君が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先刻ね、大方その所爲であんなに此方の宅が好なんだらう、妙なものだな、と云つて二人で話してゐらつしやつたのを私が聞いたから、そつと貴君に教へて上げるんです

よ。誰にも話しちや不可せんよ。よどざんすか」と教へられて、非常に嬉しく思つた事を書いてゐるのである。漱石はそれに附け加へて、「私は其時たゞ「誰にも云はないよ」と云つたぎりだつたが、心の中では大變嬉しかつた。さうして其嬉しさは事實を教へて呉れたからの嬉しさではなくつて、單に下女が私に親切だつたからの嬉しさであつた。不思議にも私は、それ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覺えてゐるのはたゞ其人の親切丈である」と言つてゐる。幼い漱石は、「淺草から牛込へ遷され」て、「生れた家へ歸つたとは氣が付かずに、自分の兩親をもと通り祖父母とのみ思つてゐ」ながら、それでも尙「其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現れ」るほど、喜んだ。下女から見たら、恐らくそれがひどくいぢらしく思はれたのであらう。さうして下女は、そのいぢらしさに促がされて、たつた今自分が聽き知つた眞實を、漱石に告げ知らせる氣になつたのであらう。漱石には、その眞心が通じたのである。換言すれば漱石は、その眞心を有難い眞心としてのみ受け入れようとするほど、言はば本能的に、眞心に餓ゑてゐたのである。

然し漱石の周圍は、かういふ幾つかの例外を除いて、漱石のこの要求を十分に充たす事が出來るほど、立派な周圍ではなかつた。――「或日一人の客と相對して坐つてゐたお常は、其席で話題に上つた甲といふ女を、傍で聽いてゐても聽きづらい程罵つた。所が其客が歸つたあとで、甲が又偶然彼女を訪ねて來た。するとお常は甲に向つて、そらぞらしい御世辭を使ひ始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞めてゐた所だといふやうな不必要な嘘迄吐いた。健三は腹を立てた。／「あんな嘘を吐いてらあ」／彼は一徹な子供の正直を其儘甲の前に披瀝した。甲の歸つたあとでお常は大變に怒つた。／「御前と一所にゐると顔から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない」／健三はお常の顔から早く火が出れば好い位に感じた。」（『道草』第四十二）。――外に女を拵らへてゐるといふ事で、夫と絶えず口論し、夫の事女の事を絶えず口汚なく罵つて、健三―漱石の反感を買つてゐる養母のお常は、かういふ空空しい嘘のお世辭を他人に振り撒く事によつて、徹底的に漱石から離れられてしまふのである。かういふ醜體を暴露して見せる以上、漱石は、いくら愛情に餓ゑてゐるからと言つて、それを此所から期待する事は出來ない筈であつた。――

「……彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生から自分の持つてゐる兩

蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、「是を今にお前に遣らう」と殆ど口癖のやうに云つてゐた。時計を所有した經驗のない若い健三は、欲しくて堪まらない其裝飾品が、何時になつたら自分の帶に卷き付けられるのだらうかと想像して、暗に未來の得意を豫算に組み込みながら、一二箇月を暮した。／病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念とも見るべき此品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉から所有權丈を讓り渡されたと同樣で、肝心の時計には手も觸れる事が出來ずに幾日かを過ごした。／或日皆が一つ所に落合つた。すると其席で比田が問題の時計を懷中から出した。時計は見違へる樣に磨かれて光つてゐた。新しい紐に珊瑚樹の珠が裝飾として付け加へられた。彼はそれを勿體らしく兄の前に置いた。／「それでは是は貴方に上げる事にしますから」／傍にゐた姉も殆ど比田と同じやうな口上を述べた。／「どうも色々御手數を掛けまして、有難う。ぢや頂戴します」／兄は禮を云つてそれを受取つた。／健三は默つて三人の樣子を見てゐた。三人は殆ど彼の其處にゐる事さへ眼中に置いてゐなかつた。仕舞迄一言も發しなかつた彼は、腹の中で甚しい侮辱を受けたやうな心持がした。然し彼等は平氣であつた。彼等の仕打を仇敵の知く憎んだ健三も、何故彼等がそんな面中てがましい事をしたのか、何うしても考へ出せなかつた。／彼は自分の權利も主張しなかつた。又說明も求めなかつた。たゞ無言のうちに愛想を盡かした。さうして親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事が、彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判斷した。」（『道草』第百）―

―漱石の二番目の兄の亡くなつたのは、明治二十年、漱石二十一の年の事である。八つか九つかの時分實家に歸つて來た漱石を取り卷いてゐた者の殆んど凡ては、高い意味での理想も道德も見識も持たず、唯江戸末期傳來の生活と習慣とに從つて、出鱈目に、然し滑らかに、その日その日を送つてゐるやうな人達であるに過ぎなかつた。勿論その人達は、故意に漱石を傷ける目的を以つて振舞つたのでない事には疑ひがなかつたが、然し嘘の嫌ひな、出鱈目な事の許せない、眞面目で、一本氣で、自然な眞實な愛情に餓ゑてゐる漱石を、それらの人達が滿足させるといふ事は、到底考へられない事であつた。のみならずそれらの人達の、無意識な出鱈目と、無批評な世間智とは、屢漱石を傷け、漱石を反抗的にし、

漱石をして彼等に愛想をつかさなければ措かないやうにしてしまふのである。

漱石は『木屑錄』の詩の中で、自分の事を「白眼」と言ひ「狂愚」と言つてゐる。さうして「時輩」に譏られ「時勢」に背くと言つてゐる。然し漱石は本當に自分を「狂愚」だと思つてゐるのでもなれけば、また自分の態度を「白眼」の態度だと思つてゐるものでもないのである。從つて「時輩」に譏られ「時勢」に背く事が、人間として恥づべき事であるともなんとも思つてはゐないのである。然し漱石から言へば、自分を取り卷いて、自分を變人と言ひ、世間知らずと言ひ、若しくは自分をあれどもなきが如くに取り扱つて、自分達の考へてゐるやうに諸事萬般を取り仕切つて行く、周圍の人達は、「時輩」や「時勢」の代表者であつたに外ならなかつた。さうしてそれらの人達に取り卷かれて自分は、ぽつんと除け者にされて、たつた一人で孤獨の道を踏んで行かなければならない者であつた。假令「時輩」や「時勢」が間違つてゐて、自分の方が遙に正しいものであつたとしても、自分が一人である限りに於いては、「時輩」や「時勢」から言へば、自分は「狂愚」であり、自分の態度は「白眼」の態度でなければならない。從つて漱石は此所で、自分が要求するものを、「時輩」や「時勢」が與へてくれないのみならず、「時輩」や「時勢」は自分を呼んで、「狂愚」といひ「白眼」といつてゐる、然し自分にはそれを改心させる才もなければ識もない、唯自分には一片の烟霞の癖がある、自分は「草廬」に臥して、水を品し山を評するより仕方がない、といふのである。

二

然し事實は漱石は、「草廬」に臥して、水を品し山を評してだけはゐられなかつた。漱石は、自分を取り卷く周圍の者の、箇箇に對しては愛想をつかしても、人間全體に對しては愛想をつかす事は出來なかつた。二十になつたかならないかで、既に深切に厭世的になつてゐた漱石は、從つて、畢竟の意味に於いては、前途にある希望を持たない譯には行かなかつた。それは、漱石を取り卷いてゐる世界が、假令落寞たる砂漠のやうなものとしてしか漱石には映らなかつたとしても、その砂漠の中にも、例へば『硝子戸の中』の女中のや

うに、燦として輝くオアシスのやうなものがあつて、漱石の頭の中に、暖かさと賴もしさと美しさとを吹き込んでくれるからでもあつた。

例へば、明治二十四年八月三日、正岡子規に宛てた手紙の中で、漱石は自分の嫂の死に就いて、「わが一族を賞揚するは何となく大人氣なき儀には候得共、彼程の人物は男にも中々得易からず、況て婦人中には恐らく有之間じくと存居候。そは夫に對する妻として完全無缺と申す義には無之候へ共、社會の一分子たる人間としてはまことに敬服すべき婦人に候ひし。先づ節操の毅然たるは申すに不及、性情の公平正直なる、胸懷の洒々落々として細事に頓著せざる抔、生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候位、鬚髯鬱々たる生悟りのえせ居士はとても及ばぬ事、小生自ら慚愧仕候事幾回なるを知らず。かゝる聖人も長生きは勝手に出來ぬ者と見えて、遂に魂歸冥漠魄歸泉只住人間廿五年と申す場合に相成候。さはれ平生佛けを念じ不申候へば極樂にまかり越す事も叶ふ間じく、耶蘇の子弟にも無之候へば天堂に再生せん事も覺束なく、一片の精魂もし宇宙に存するものならば、二世と契りし夫の傍か、平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと、夢中に幻影を描き、ここかかしこかと浮世の羈絆につながるゝ死靈を憐み、うたゝ不便の涙にむせび候。母を失ひ伯仲二兄を失ひし身の、かゝる事には馴れ易き道理なるに、一段毎に一層の悼惜を加へ候は、小子感情の發達未だ其頂點に達せざる故にや。心事御推察被下たく候」と言つてゐる。是は當時の漱石としても、可也センティメンタルな表現であると言ひ得られるかも知れない。然しそれほど漱石が嫂を、人間として敬愛してゐたのだとすれば、その調子がもつとセンティメンタルであつたとしても、それは少しも不思議な事ではないのである。

漱石は此所で、「節操の毅然たる」と言つてゐる。「性情の公平正直なる」と言つてゐる。「胸懷の洒々落々」たると言つてゐる。「悟道の老僧の如き見識」を持つたと言つてゐる。かういふ人間でありさへすれば、漱石はそれがどんな種類の人間であらうと、必ず敬愛しなければゐられなかつたのである。その點に於ては漱石は、人間の中の自然を愛したのだと言つて可いかも知れない。――然もさういふ自然は、人間に於いて、多く見出す事の難い自然であるに外ならなかつた。殊に江戸末期の市井の傳統がまだ濃厚に生きてゐる世界

に於いて、この意味の自然を求める事は、木に緣つて魚を求むる類ひであるとも言はれ得る。從つてさういふ世界に育つた漱石は、箇箇の人間に對しては、當然失望せざるを得なかつたのである。それにも拘はらず漱石にとつて、人間の美しさを信じないで生きるといふ事は、到底堪へられない事であつた。その上、假令その數は少なかつたとしても、かうして人間の美しさが、はつきりと漱石の心の中に刻み込まれた事も、慥に幾度かは儼存してゐるのである。漱石は、自分の經驗した人間の美しさを足場として、人間の美しさを以つて滿たされた世界を組み立て、それを是迄自分が深切に經驗した、人間の醜さに對抗させようとする。

「明治二十四年十一月十日、正岡子規に宛てた漱石の手紙は、漱石のこの方向を示唆するものである。――「僕前年も厭世主義、今年もまだ厭世主義なり。嘗て思ふ樣、世に立つには、世を容るゝの量あるか、世に容れられるの才なかるべからず。御存の如く、僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれど、どうかこうか食ふ位の才はあるなり。どうかこうか食ふの才を賴んで此浮世にあるは、說明すべからざる一道の愛氣隱々として、或人と我とを結び付るが爲なり。此或人の數に定限なく、又此愛氣に定限なく、雙方共に增加するの見込あり。此增加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす。然し大體より差引勘定を立つれば、矢張厭世主義なり。唯極端ならざるのみ。」――この「愛氣」とは、言ふまでもなく、人間の美しさを信じ、人間の美しさを愛しようとする、漱石にとつて言はば本能的な、人間愛であるに外ならかつた。それは誰に對する愛とも言ふ事は出來ない。それは箇人に向けられる愛ではなくて、全體に向けられる愛だからである。假令箇人に向けられる事があるとしても、それは箇人そのものにのみ向けられずに、その箇人を通して、全體に向けられる愛だからである。それだから漱石は、それを「或人」と名づける。漱石は過去の經驗から、是から先きの自分の人生の行手で、自分が眞實に愛するに値ひすると する箇人に、もつと澤山出會ふ事が出來さうに思ふ。從つて又この「愛氣」は次第に深まつて行きさうに思ふ。是は漱石が家庭の世界から離れて、學校生活の世界に、特に高等學校や大學の學生生活の世界に這入り、其所で比較的自由な學生生活に觸れるとともに、次第に西洋の作家の世界がその全貌を示し始めたからの事であるに相違ないが、その

理由はともかく、かうして漱石の世界が、段段反省的に、人間愛の世界を、前景に押し出して來てゐる事は注目に値ひする。――『心』の中の先生は、「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懷に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出來ない人」として、私と稱する主人公から觀察されてゐる。勿論この最後の一節は『心』が書かれた大正三年前後の漱石の生活氣分を豫想させるものであるとしても、「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人」とは、單に大正三年前後のみに止まらず、子供の時分から死ぬまで、一生を貫く漱石の特徴を、最も端的に道破した言葉であるに外ならなかつたのである。

然し漱石が人間を愛しようとすればするほど、漱石は亦一方で、人間を憎まなければならなかつたやうに見える。たまたま漱石の人生の行手に出現するオアシスは、漱石をしてその「愛氣」を增加せしめるに役立つたには違ひなかつたが、然しそれとともに一方では、それが漱石をして、自分を包む茫茫たる砂漠の落寞を、更に深刻に意識させる、最も適切な方便ともなり得るといふ事も亦、否む譯には行かなかつた。漱石は人間を愛する。人間を愛するが故に漱石は、人間が自分の欲する如くにある事を要求する。同時に漱石は、人間が自分の欲する如くにある事は、人間として正しい事であり、善い事であり、美しい事であるといふ事を確信する。然し漱石の眼の前の人間は、決して漱石が欲するが如くには、申し分なく動く事がないのである。ある者は「節操の毅然たる」ものがないかと思へば、ある者は「性情の公平正直なる」ものがない。ある者は「胸懷の洒々落々」たるものがないかと思へば、ある者は敦厚摯實なるものがない。正しい事、善い事、美しい事に對する情熱を人一倍豐富に賦與されて來た漱石は、自分の要求が十分に充たされる事がない事を經驗して、再び人間に愛想がつかしたくなるやうな、苦痛を經驗する。その時漱石は、再び「唯贏一片烟霞癖」と言つて、人間から自然へ眼を移さうとする。

「然し事實は漱石は、人間を離れて、自然だけを相手にするには、餘りに人間を愛した。從つて漱石は、人間に愛想をつかしては自然に向ふが、自然に向へば、又人間に歸らなくてはゐられなくなるのである。然も漱石は人間に歸るや否や、又自然が慕はしくなるのである。その點で漱石の一生は、漱石を奪ひ合ふ自然と人間との戰であつたと言つても可か

つた。漱石が晩年そのモットーとした「則天去私」の境地は、漱石が自分の中のこの自然と人間との對立を、もう一つ高い立場から、一つのものに止揚しようとした境地であつたに外ならない。

三

漱石は明治二十五年に『文壇に於ける平等主義の代表者ウォルト・ホイットマンの詩に就いて』を『哲學雜誌』に發表した。明治二十六年には『英國詩人の天地山川に對する觀念』を同じ雜誌に發表した。創作活動に身を委ねようなどとは、恐らく夢にも思つてゐなかつた當時の漱石は、自分の中に言ひたい事が一杯溜つてゐるにも拘はらず、それを西洋の詩人の研究を借りてしか、表現する方法を知らなかつた。然しそれだけに是等の研究は、無論研究として立破な研究であるには違ひなかつたが、それとともに、夏目漱石を知る上に、貴重な材料を提供するものである事は爭はれない。漱石は此所で、自分自身に直接の問題を投影して、是等の詩人の世界を明らめ、それによつて自分の主張や自分の懷抱を、是認し、匡正し、高め若しくは深めようとしてゐるからである。

漱石は、ホイットマンを、その題名が既に指示してゐるやうに、「平等主義の代表者」として描いた。然も漱石がホイットマンを「平等主義の代表者」と見做す所以のものは、「ホイットマンが獨立不羈の精神の上に立ち、「天上天下我を束縛する者は只一の良心あるのみ」として、自分の良いと信ずる事を、誰にも氣兼なしに赤裸裸に言つてのけ、無暗に古人を崇拜せず無上に前代を有難がらざる意味に於いて「時間的に平等」に、場所に因つて好惡を異にせざる意味に於いて「空間的に平等」に、族籍を問題にせず、貧富に拘泥せず、唯の人間としての人間の價値に重きを置いて、物を言つてゐる點にあつた。同時に漱石は、さういふ不羈獨立の、裸一貫の人間に價値を置いて物を言ふホイットマンが、それらの人間を繫げるものとして「男づくの友愛」(manly love of comrades)を高唱してゐるといふ事に注目する。同時に又漱石は、ホイットマンがこの愛情を高唱する點に於いて、ホイットマンが決して「形質上の開化を喜んで精神上の發達に無頓着なるものにあらず肉體のみを知つて

恣に劣情を寫す者にあらず」、一箇の偉大な理想主義者であつたといふ事に注目する。――一箇箇の場合に於いて、漱石がホイットマンの考へ方に同じ得ないといふ事は、寧ろ當然の事であつた。漱石は文中多少その點に觸れてもゐる。「然し大體から言つてこのホイットマンの考へ方は、また當時の漱石の考へ方であるに外ならなかつた。」この事は、その凡その見當に於いて、當時の漱石の手紙が、或は當時の漱石の作品（例へば『木屑錄』のやうなもの）や當時の漱石に關する記述（例へば正岡子規の『筆まかせ』のやうなもの、若しくは漱石の『道草』のやうなもの）が、證明する。人間が自然で自由で公平で正直である事を要求し、また自然で自由で公平で正直な愛情を欲した漱石は、恐らくホイットマンに於いて、最も鮮明にして最も徹底的な、自分の代辯者を發見したに違ひない。

同じやうな事が『英國詩人の天地山川に對する觀念』に就いても言はれ得る。此所で漱石は、十八世紀の末から十九世紀の初へかけて、英國文學史上に自然主義と名づけられた一派の詩人、トムソン・ゴールドスミス・クーパー・バーンス・ウォーヅウォースなどの「天地山川に對する觀念」に就いて述べる。さうして自然がそれらの人人によつてどういふ風に感じられて來たかを發展的に觀察する。然し漱石にとつて重要な事は、普通の文學史家の態度を以つて彼等の自然觀を檢討するといふ事よりも、寧ろ自分自身の自然に對する愛情を、諸家の作品の上に投影して、それとの比較の上に、躬を以つて諸家の異同を辨ずるといふ事であつた。もしくは諸家の自然觀を自分の心中に投影して、それとの比較の上に、自分の自然觀を檢討するといふ事であつた。從つて此所では、「自然の爲に自然を愛せしにあらざる」ゴールドスミスやクーパーや、「單に客觀的にして、間々殺風景の元素を含む」トムソンの自然主義よりも、一は「情より」他は「智より」「共に自然を活動力に見立て」て、それを熱烈に愛した、バーンスやウォーヅウォースの自然主義の方が、遙に熱情を以つて取り扱はれる。從つて其所に用ひられた言葉が又、數段の光彩を加へる。

「元來俗眼を以て天地を見渡すときは、自然程冷淡なる者はあらず。……自然は寸毫も情を解せず、如何程此方より愛情を與ふるも、彼より之に酬ゆる抔といふ事は一切なし。……夫れ愛は相對なり。一脈の靈氣、甲を去つて乙に入り、乙に入るもの又返つて甲に入る。我起動者たれば、彼は反動者なり。與ふる處あれば、必ず受くる處あり。動と反動と

互に應じて、戀愛の念始めて深し。人は此動と反動とを解する者なり。故に俗物は只人を愛するを知るのみ。自然は動を受くる事を知る。去れど之を反す事を知らず。之を愛するは石を水に投じて手應へなきが如し。故に世人は自然を樂しむ能はず。今バーンス此手應へなきの自然を愛し、寤寐忘るゝ能はざるは何の故ぞ。是れ自然を以て人間に擬したればなり。人間に擬したるにあらず。人間としか思はれざればなり。草木、泉石、花卉、翎毛、彼が瞳子に入る者は、一として喜怒哀樂の情を具せざるはあらず。既に此情を具ふる以上は、我之を愛すれば、彼亦我を愛せん。我彼を愍まば、彼亦我を慕はん。所謂動と反動の大則彼我の間に行はれて、而も普通の人間の如く、我を戕ひ我を傷くるの憂なし。觀じて茲に至れば、自然界は猶人間界の如し。但觀じて茲に至ると、茲に至る能はざるが詩人と常人の差なり。感情鋭く想像深き事、バーンスの如くにして、始めて此境界に入るを得なり」――「……ウォーヅウォースの自然を愛するは山峙ち雲飛ぶが爲にあらず、水鳴り石響くが爲にあらずして、其内部に一種命名すべからざる高尚純潔の靈氣が、磅礴塡充して、人間自然兩者の底に潛むが爲のみ。バーンスは自然界裏に活氣を認め得たりと雖も、之を貫くに "a spirit" "a force" を以てする事能はず。山は固より山なり。水は固より水なり。峥嶸たる者を以て、潺湲たる者と混同する意なく、又之を以て人間と氣を同じうすると考へざるなり。此一點が兩詩人の異なる處にて、一は感情的直覺より、一は哲學的直覺より、共に自然を活動せしめたるなり。蓋し活動法（spiritualization）は自然主義の尤も發達せるものながら、前二者の間にて自ら深淺の區別なきにあらず。夫れ世に不平あつて山林に逃るゝものは、不平の消する時が山を出づるの時なり。過去の行き掛り（association）にて自然の有り難きは、行き掛りの滅したる時が有り難味のなくなるときなり。（スコットの如し）第三に來るものは、自然の爲に自然を愛す。自然の爲に自然を愛する者は、是非共之を活動せしめざるべからず。之を活動せしむるに二方あり。一はバーンスの如く外界の死物を個々別々に活動せしめ、一は凡百の死物と活物を貫くに無形の靈氣を以てす。後者は玄の玄なるもの、萬化と冥合し宇宙を包含して餘りあり。ウォーヅウォースの自然主義是なり」――「今一つバーンスとウォーヅウォースの異なる點を擧ぐれば、此兩人が自然に對する消極と積極の差なり。消極とは、胸裏不平の情、ひいて自然の悽楚

たる所に及び、積極とは、心中愉快の念發して天地の瑰麗なる點と結合せるを謂ふなり。故にバーンスを讀めば、跌宕沈鬱にして、悲慘の音多く、ウォーヅウォースを讀めば、高遠の中、自ら和氣の藹然たる者あり。是れ固より兩詩人性質の差に根するに相違なきも、其境遇も亦預かつて大に力ありといふべし。夫れバーンスは曠世の才なり。而して天下之を知らず。天下之を知つて、遇するに天才を以てする能はず。身分は百姓なり。金はなし。空しく無限の感慨を抱いて、野店村盧の間に酣醉するのみ。去れば其胸裏には、己れ世に敗せられたりしといふ感情、常に往來したるが如し。かゝる感情を有して、自然を眺めば、天地の麗しき現象は、眼中に宿らで、眸中に聚まる者は、悉く可憐の狀況のみならん。假令韶光忽來冲融の氣自ら瞳底に映ずるも、從らに此を吾身の上に較べて、轉た不幸の念を增さしむるに過ぎず。ウォーヅウォースは全く之に異なり。其主義とする所は"plain living and high thinking"にありて、固より俗界を眼下に見降したれば、彼の虚榮を鬪はす輩を觀て、氣に障るの何のと云ふ事なし。加之富めるといふものにあらねども、衣食に事缺く程の貧乏にてもなく、山林に逍遙して自由に自然を樂しむ位の資産を有せし故

に、其外界に對する觀念も從つて和風麗日に接するが如き心地のせらるゝなり」――是がバーンスやウォーヅウォースに對する、客觀的に正しい批評であるかどうかは、此所で私の問題としようとする所ではない。私の問題としようとするのは、バーンスを讀みウォーヅウォースを讀んで、漱石が何を感じてゐるかである。もしくは、バーンスやウォーヅウォースを通して、漱石が何を語つてゐるかである。

然も此所で我我は、漱石の自然に對する愛情が、自然を人格化して受とる事が出來るほどに濃厚で、その點でバーンスの如きものがあつたといふ事を認める（例へば『木屑錄』の中の自然の描寫のやうな）事が出來るけれども、然しそれがウォーヅウォースの場合のやうに、「其内部に一種命名すべからざる高尚純潔の靈氣が、磅礴塡充して、人間自然兩者の底に潛むが爲」に自然を愛するといふやうな、さういふ境地に達してゐたとは考へる事が出來ないのである。少くとも我我には、それを證としてこの事を認める、材料を持つてゐないのである。然し、一方から言ふと、漱石にとつて受けとられた自然は、單に『木屑錄』の中の自然の描寫のみに止まらず、後の自然の描寫をも籠めて、「跌宕沈鬱にして、悲慘の

音多く」と言はれてゐるバーンスの自然よりも、「高遠の中、自ら和氣の藹然たる者あり」と言はれてゐるウォーヅウォースの自然の方に、より近いものを持つてゐる。人間の世界に於いて惹き起された不平不滿を懷いて、自然に對する際でさへも、漱石によつて受けられた自然は、必ず「和風麗日」の自然であつて、決して「悽楚」「悲慘」の自然ではなかつた。その意味から言へば、漱石は、ウォーヅウォースと同じやうに、人間と自然とを貫いて「一種命名すべからざる高尚純潔の靈氣」が動いてゐるといふ事を、假令はつきり會得する事は出來なかつたとしても、當時、少くとも豫感はしてゐたには違ひないと思はれる。また事實自分の裏にさういふ豫感が動いてゐればこそ、漱石はウォーヅウォースの世界を說いて、是ほど立ち入つた事を言ふことが出來た筈でもあつたのである。然し當時の漱石には、ある程度の“plain living and high thinking”は出來ても、從つて當時の漱石には、ある程度「俗界を眼下に見降し」て「彼の虛榮を鬪はす輩を觀て、氣に障るの何のと云ふ事」のない境地に住む事は出來ても、それをいつまでも默つて「見降し」て計りゐる事は出來なかつた。それが出來るためには、當時の漱石は、あまりに人間に、——自然とは違つた人間に、興味を持つてゐたのである。換言すれば、當時の漱石は、自分が愛する人間に直接に働らきかけて、「彼の虛榮を鬪はす輩」など、粉碎してしまはなければ氣がすまない所を、十分に持つてゐたのである。

漱石は、その『ウォルト・ホイットマンに就いて』に於いて、人間の中の自然を最も鮮明に又最も徹底的に、世間に對して鼓吹したホイットマンを論じた。『英國詩人の天地山川に對する觀念』に於いて、自然を人間として見る詩人として、バーンスとウォーヅウォースとを、特に自然と人間とを貫いて「一種命名すべからざる高尚純潔の靈氣」が動いてゐる事を感じたウォーヅウォースを論じた。然もホイットマンとウォーヅウォースとは、自然を尊敬する點では同一でも、その他の點では、兩極ほどにも飛び離れてゐる詩人である。ホイットマンが飽くまで人間を離れないのに反して、ウォーヅウォースは寧ろ自然に沒入してゐる。ホイットマンは「男づくの友愛」を鼓吹するのに反して、ウォーヅウォースは寧ろ「童心」を唱道する。ホイットマンが社會にましぐらに働らきかけやうとしてゐるのに反して、ウォーヅウォースは寧ろ樂みつつ歌つてゐる。——是は、ある意味から言へば、矛盾と言

つて可いほどの對照である。然も漱石は、それを格別矛盾とも考へずに、年を隔てて論じてゐるのである。是は畢竟漱石の中に、この二つの態度があつて、時を隔ててそれが交互に漱石の心を支配するが爲に外ならなかつた。然もこの二つの態度は亦、後年の、作家としての漱石の、二つの態度ででもあつたのである。

四

「只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教へてもらつて決して損のない事である。

「僕は小供のうちから青年になる迄世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な著物がきられると思つてゐた。詩的に生活が出來てうつくしい細君がもてゝ、うつくしい家庭が出來ると思つてゐた。

「もし出來なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反對を出來る丈避け樣としてゐた。然る所世の中に居るうちはどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反對の現象でうづまつてゐる。

「そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イヤなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出來ぬといふ事である。

「只きれいにうつくしく暮らす卽ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の樣な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。

「此點からいふと單に美的な文字は昔の學者が冷評した如く閑文字に歸著する。俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に寐ころんで居る樣では到底動かせない。然も大に動かさゞるべからざる敵が前後左右にある。苟も文學を以て生命とするものならば單に美といふ丈では滿足が來出ない。丁度維新の當時勤王家が困苦をなめた樣な了見にならなくは駄目だらうと思ふ。間違つたら神經衰弱でも氣違でも入牢でも何でもする了見でなくては文學者になれまいと思ふ。文學者はノンキに、超

然と、ウツクシがつて世間と相遠かる様な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る爲めだ抔とは云ふて居られぬ進んで苦痛を求める爲めでなくてはなるまいと思ふ。

「君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文學者だと澄まして居る樣になりはせぬかと思ふ。現實世界はさうはゆかぬ。文學世界も亦さう許りではゆくまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此點に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文學家ではつまらない。といふて普通の小説家はあの通りである。僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする樣な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文學者の樣な氣がしてならん。

「破戒にとるべき所はないが只此點に於テ他をぬく事數等であると思ふ。然し破戒ハ未ダシ。三重吉先生破戒以上の作ヲドシ〳〵出シ玉ヘ　以上」

是は明治三十九年十月二十六日、漱石が鈴木三重吉に與へた手紙である。勿論是は漱石が自分の弟子に與へた「教訓」の手紙であつた。從つてこの手紙の内容は、その弟子の持つてゐる傾向にはつきりしたアンティテーゼを置いたといふ意味で、多少强すぎるアクセントがあると、言へない事もないかも知れない。然し漱石は此所で決して、嘘は言つてゐないのである。反對に漱石は、自分の内心の要求を、この機會に、はつきり言明してゐるのである。さうして漱石は、「僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする樣な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい」と言つてゐる。この二つの態度は、換言すれば、詩人としての文學者の態度と社會批評家としての文學者の態度とであつた。――さうして、明治三十九年の十月といへば、『草枕』が書かれた凡そ二ケ月後、『野分』が書かれる凡そ二ケ月前の時期なのである。

五

漱石が純粹に俳句生活に這入つたのは、明治二十八年、漱石が松山に行つてからの事で

あつた。然もそれは、須磨に病を養つてゐた子規が、病漸く癒えて郷里の松山に歸り、漱石の下宿に陣取つて、門下を集めて熱心に俳句を作つて見せてからの事である。子規が漱石の下宿に移つて行つたのは、凡そ八月二十七日の見當であつた。從つて九月中には、漱石は既にその渦卷の中に捲き込まれて、一緒に句作してゐたと想像しても可いであらう。さうして子規が、東京に向かつて、松山を出發したのは、十月十九日の事であつた。當時の事を回顧して、後に漱石は、「御承知の通り僕は上野の裏座敷を借りて居たので、二階と下、合せて四間あつた。……僕は二階にゐる。大將は下にゐる。其うち松山中の俳句を遣る門下生が集まつて來る。僕が學校から歸つて見ると、毎日のやうに大勢來てゐる。僕は本を讀む事もどうすることも出來ん。尤も當時はあまり本を讀む方でもなかつたが、兎に角自分の時間といふものがないのだから、止むを得ず俳句を作つた」（談話『正岡子規』）と言つてゐるが、その句作の動機は兎も角、かうして二ヶ月近く子規と一緒にゐて、かき鳴らされた漱石の俳句の絃は、一度鳴り出すや否や、子規がゐなくなつても、ひとりでに、力強く高鳴り始めるのである。是は漱石の中の詩人が、俳句に於いて、自分自身を表現する、最も適切な器ものを發見し得たと、信じた爲に外ならないであらう。さうして漱石は、明治二十八年の九月以降、明治二十九年、明治三十年と、可也熱心に俳句を作つた。

然し漱石は明治二十九年の四月には、松山から熊本へ轉任した。六月には結婚した。身邊の變化は、漱石の句作に影響して、熱心に句作したとは言つても、明治二十九年の句作は、その量に於いて、纔に明治二十八年の九月以降に匹敵し得るのみである。明治三十年の句作は、明治二十九年の半ばにしか達しない。明治三十一年の句作は、亦明治三十年の半ばにも達しない。勿論質に於いては、明治二十八年のそれよりも明治二十九年のそれがよく、明治二十九年のそれよりも明治三十年のそれがよく、凡そ明治三十年比の見當を絶頂として、段段向上を示してゐるのではあるが、然し量に於いては、一年は一年と、著しい低下を示してゐるのである。明治三十二年に至つて、量は俄然として增加し、殆んど明治二十九年の壘を摩するものがあるが、然し明治三十三年になると、再び俄然として低下し、句作を續けてゐるといふ名に値ひしない位、僅かばかりの量をしか示さない。さうしてこの年九月、漱石は、官命によつて、ロンドンに留學するのである。留學とともに、漱

石の俳句生活は、中斷される。

漱石は、俳句を愛した。是は言ふまでもない。然し漱石は、その愛する俳句に、何故に遠ざかつて行つたか。漱石は嘗て「俳句をやめてから『猫』を書き出すまでの間は、暗い穴の中に這入つてゐるやうな氣がした。先きが暗くてなんにも見えない。然し『猫』を書き出して、やつと先きが明るくなつたやうな心持になつた」と言つたが、なぜさういふ俳句をやめなければならなかつたか。

是に解答を與へるものは、漱石の三重吉に與へた手紙ではないかと思ふ。「只きれいにうつくしく暮らす卽ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の樣な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。」「此點からいふと單に美的な文字は昔の學者が冷評した如く閑文字に歸著する。俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に寐ころんで居る樣では到底動かせない。然も大に動かさゞるべからざる敵が前後左右にある。苟も

文學を以て生命とするものならば單に美といふ丈では滿足が出來ない。丁度維新の當時勤王家が困苦をなめた樣な了見にならなくては駄目だらうと思ふ。」——勿論當時イブセンは漱石には知られてゐなかつた。また知られてゐる筈もない。然し當時の漱石には、維新の志士の仕事は知られてゐた。また少くとも、直接社會に働らきかける、ホイットマンの詩は知られてゐた。然も漱石が一面に於いて、人間を愛し、その人間を自分の欲するが如くにあらしめようとする要求を、自分自身の中に十分持つてゐたとすれば、漱石がその立場から、自分の今してゐる仕事（俳句を作る事）の意義及び價値を檢討して見るといふ事は、極めて當り前の事であつたやうに思はれる。さうして漱石が、その立場から、自分の俳句を「閑文字」だと考へ、「俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る」と考へた事があるに違ひない事も、亦想像に難くない所である。勿論さう考へてすぐ俳句がやめてしまへるほど、俳句に對する漱石の愛情は根柢の淺いものでもなく、またそれほど漱石の俳句は漱石の生活から游離し切つたものでもなかつたが、然しさう考へる事によつて漱石が、少くとも俳句に專念する事を妨げられたに違ひない事には、疑を容れない。

その上俳句の世界は、僅に十七字の世界であつた。古人はその十七字の世界の中に、自分の全生命を託したが、今日の我我から言へば、十七字の世界は餘りに狹すぎて、我我の生活の中のほんの一部しか、それによつて表現され得ない憾みがある。是は一面から言へば、我我に我我の生活を俳句的に集中する修業に不足する所があり、またそれを俳句的に表現する鍛錬に缺ける所がある爲に、その一部を通して全部を想像させる事が出來ないせゐでもあるには違ひなかつたが、然し一般に俳句では、全湧する感情を直接に揮灑する事は許されない。然も我我には、寧ろそれを自由に氣兼なしにぶちまけてしまひたい要求がある。殊に感情と理知とが絡み合つて、思辨的に深まつた心持を活活した儘に表現しようとする場合、我我は俳句の形式そのものに、可也の窮屈を感じない譯に行かない。

それが漱石を驅つて俳句から遠ざからしめたものであるかどうかは、必ずしも斷言する事は出來ない。然しその點で漱石が、かなりさまざまな試みを試みてゐる事だけは、爭はれない。漱石に所謂主觀的な俳句の多いのもその爲である。また例へば「菫程な小さき人に生れたし」や、「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」や、「其愚には及ぶべからず木瓜花」や、「正月の男といはれ拙に處す」や、漱石は其所に可也理知的な要素を含んだ、自分自身の人生觀を、ある意味では露骨に盛り込まうとしてゐる。特に「愚かなれば獨りすゞしくおはします」や「無人島の天子とならば涼しかろ」や「能もなき教師とならんあら涼し」などに至つては、普通俳句と言はれ得るものの內容を遙かに超えて、到底俳句には盛り込める筈のものでない內容を、無理に俳句に盛り込んでゐるやうな感じである。――もつとも後の三句は三句とも、明治三十六年六月、漱石がロンドンから歸つて來て、然もまだ『猫』を書き出さない前の、漱石の言葉を借りれば、「暗い穴の中に這入つてゐるやうな氣がして」ゐた時分の、俳句であつた。

然し詩形としての俳句の短小に對する漱石の不滿は、一方では漱石が既に熊本時代に於いて、五言の古詩や律や絕句や七言律を試みて居り、一方では歸朝以後、連句や俳體詩などを頻に試みて居る點からも、十分想像する事が出來るであらう。然し、さういふ種類の韻文は、いくら長大な詩形を持つてゐたとしても、漱石にとつては畢竟詩であつて、從つて閑文字であつて、今自分の腹の中にもだもだしてゐるものを、纔にまぎらす事は出來て

も、竟に落つかせる事の出來るものではなかつた。「愚かなれば獨りすゞしくおはします」と言つてみても、もしくは「能もなき教師とならんあら涼し」と言つてみても、當時の漱石の世界は、少しも涼しくはならなかつたのである。人間が自分の周圍にうようよ動いてゐる限り、さうしてその人間がさまざまに自分に働らきかけて來る限り、漱石は少しも涼しく感じる事は出來ないのである。從つて漱石は「無人島の天子とならば涼しかろ」と想像する。然し事實は漱石にとつて、「無人島の天子」となる事は、不可能の事であつた。漱石は、人間を愛する事なしには、人間とともにある事なしには、生きて行く事は出來ないのである。然も漱石にとつて、人間とともにある事は、暑苦しい事であつた。

人間とともにあつて、然も漱石が涼しくあり得る爲めには、漱石はどうすれば可いか。

――それは、言ふまでもなく、人間に働らきかけて、人間をより良くする事――もしくは、自分は人間をより良くし得ると信じて、人間に働らきかける事であつた。然し當時の漱石には、少くとも明治三十六年の夏の比の漱石には、自分は人間としてより良い人間であるといふ信念はあつても、自分は人間をより良くし得ると信じて、人間に働らきかける事が出來なかつた。然も自分は人間としてより良き人間であるといふ信念を持つてゐたとしても、その自分が人間をより良くし得る事を信じる事が出來なかつたとすれば、勢ひ人は、自分自身に對しても亦懷疑的にならざるを得ないであらう。然も自分自身に對して懷疑的になるといふ事は、自分は人間をより良くし得ると信じて人間に働らきかける事を、一層不可能にする事であるに外ならなかつた。殊に「小生不相變碌々別段國家の爲にこれと申す御奉公を出來かねる樣で實に申譯がない」「今から十年もしたら何か出來想に思ふが此十年が昔からの事だから頗るあてにならない」（明治三十四年十一月二十日寺田寅彦宛の手紙）と言ひ、或は「近來何となく氣分鬱陶敷書見も碌々出來ず心外に候生を天地の間に享けて此一生をなす事もなく送り候樣の腦になりはせぬかと自ら疑懼致居候然しわが事は案じるに及ばず御身及び二女を大切に御加養可被成候」（明治三十五年九月十二日夏目鏡宛の手紙）と言ひ、眞面目に日本の爲になる仕事をするのでなければ「實に申譯がない」と考へ、その爲に自分は全精力を擧げて「仕事」に打ち込んで行かなければならないと思つてゐた漱石にとつて、この懷疑は、殆んど致命的なものであると言つて可かつた。漱石

は自ら、「愚かなれば獨り涼しくおはします」と言ひ「能もなき教師とならんあら涼し」と言つて、自分自らを罵倒する。然し罵倒しても鞭撻しても、懷疑の重壓は、益重く漱石の上にのしかかつて來るばかりなのである。

明治三十六年六月十四日、漱石は菅虎雄に宛てて書いてゐる。「學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ骨董商ノ方ガイイヨ僕ハ高等學校ヘ行ツテ駄辯ヲ弄シテ月給ヲモラツテ居ル夫デモ中々良教師ダト獨リデ思ツテル大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウだ、アンナ講義ヲツヾケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク樣ナコトハ教エルノガイヤダ」――「近來晝寐病再發グー〳〵寐ルヨ博士ニモ教授ニモナリ度ナイ人間ハ食ツテ居レバソレデヨロシイノサ大著述モ時ト金ノ問題ダカラ出來ナケレバ出來ナイデモ構ハナイ天勾踐ヲ空フスルト云フ譯カネ」――「僕ハ切角調ベカケタヿヲ丸デ忘レテ仕舞ツタ愚ナ話シダ（ノート）ナンカ焚テ仕舞フト思フ」。――同じく七月三日の手紙には、「大學モ高等學校モ試驗ハスンダ昨日ハ點數會議デ朝カラ晩迄引張ラレル只默ツテ名說ヲ謹聽スル許リダガ中々草臥ルモンダナー明日カラハ入學試驗トクルカラ厄介ダドーモ人間ハ生キタイ爲ニ生キテ居ツテソーシテ生キタイ爲ニ苦勞スルイクラ骨ガ折レテモ生キテ居ル方ガ善イノト見エル夫ガ高ジルトイクラ骨ガ折レテモ名譽ガトリタクナル學問ガ出來タガル金ガ欲シクナル實ニ變ナ奴サネ」――「發句ナンカ下火極マルマルデ作ル氣ニナラン然シ退屈凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ」――「僕大學ヲヤメル積デ學長ノ所ヘ行ツテ一應卑見ヲ開陳シタガ學長大氣焰ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメタソコデ僕唯々諾々トシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シデヤナイカ」――「普通ノ人ハ大概氣狂ダ自分デ氣狂デナイト自信シテ居ル許リサ何ノ事ハナイ世ノ中ト云フ者ハ氣狂ノ共進會ト云フ樣ナ物サ……御前サンダノ吾輩ノ如キハ小氣狂ダカラ駄目サ鳥渡泥棒ノ樣ナモノデ大泥棒ハ人カラ崇拜セラレ小泥棒ハ牢屋ヘ入ル」――「支那ヘ行カナクツテモ豚ト同化スル位ノ決心ガナケレバ世ノ中ハ渡ツテ行カレヤシナイ幸ニ南京迄出張シタノダカラ可成豚ヲ觀察シテ歸ルトキニハ立派ナ豚ニナツテキ給ヘ御前サンノ樣ナ潔癖家ニハイヽ訓練ダ是カラ禪學ナンドヲやメテ豚學ヲヤルベシダ吾輩ハ唯ゴロ〳〵シテ居ル所丈ハ豚ヲ學ビ得テ其骨髓ヲ得テ居ルト自ラ信ジテ居ル其他モ追々稽古ヲシクラ遼東ノ豚位ニハナレルダラウト

思フ」などともある。

かういふ氣持は、勿論俳句とは兩立しない。假令漱石がそれを「一時ノ鬱散トイフ資格」で取り扱つたとしても、漱石のこの氣分が濃厚である限りは、俳句は到底漱石の心の中に昔占めてゐた位置を、占め得るものではない。從つて漱石は、この方面からも、再び熱心に俳句を取り上げる氣にはなれなかつた。さうして漱石は、世の中を罵倒しつつ、自分の周圍を罵倒しつつ、自分自身を罵倒しつつ、「暗い穴の中」に閉ぢ込められる。（この間の消息を最も具體的に洩らしてゐるものは、『道草』である。）さうして此所に、『我輩は猫である』が生れて來る、十分な素地が作られるのである。――『猫』は、言はば、「愚かなれば獨り涼しくおはします」や「能もなき教師とならんあら涼し」や「無人島の天子とならば涼しかろ」などの句の、敷衍であり補充であり展開である。俳句で言へなかつた事を、俳句で言ひたくても言へなかつた事を、漱石は此所で、思ひ切り言つてしまはうとするのである。その意味でまた漱石の菅虎雄宛ての手紙は、『猫』と關聯する。漱石は此所で、俳句で言へなかつた事を、俳句で言ひたくても言へなかつた事を、勝手氣儘に言つてのけてゐるからである。（岩波講座『日本文學』所載『夏目漱石』改題――七・一二・五）

『吾輩は猫である』に就いて

『猫』は、明治三十八年の一月から明治三十九年の八月までのうち、十一回に亘つて、雑誌『ホトトギス』に掲載された。さうして、言はば一回一回讀み切りのやうなものとして、書かれた。從つて『猫』は、所謂小說らしい構成的な所を――筋らしい筋といふものを持つてゐない。もつとも作者は、先きを書き續けるに當つて、前の部分と辻褄を合はせる爲に、前の部分に自然と浮き出てゐる筋らしいものをとり上げ、それを幾らか發展させてみたり、或はそれにある纏まりを與へてみたり、さういふ方面にも多少の注意を拂つてはゐる。然しその實作者にとつては、寒月君が富子孃と結婚しようがしまいが、苦沙彌先生の家に這入つた泥棒が、警察の手で捕まらうが捕まるまいが、そんな事はどうでも可い

問題であつた。作者には、言ひたい事、言はなければならない事、言はずにゐられない事が、腹の中に一杯あつた。それを排泄するといふ事が、作者にとつては、第一義の問題であつた。筋は單に、その言ひたくて堪らない事を、委曲を悉し、もしくは單調を避けて言ふ爲の、若しくは今書かれてゐる世界が、今まで書かれた世界と全然脈絡のないものではないといふ事を示す爲の、方便として、もしくは申譯として、假に設けられたやうなものであるに過ぎない。その點では、『猫』は、少しく誇張を施して言へば、まつたく出たとこ勝負の、甚だだらしのない作品である。もし何等かの意味で纒まつた筋を持つてゐないものは小説ではないとするならば、『猫』は正に小説とは名づけ得られない、寧ろ雜錄とか隨筆とか日記とか、さういふ名前の下に分類されて然るべき性質の作品であるに外ならなかつた。事實またさういふ名前を『猫』に冠して『猫』を批評した批評家も、いつだつたか確にあつたやうである。

然しこの分類そのものが、直ちに『猫』の價値的等級を意味するものであり得ない事は、無論の事である。小説といひ雜錄といひ隨筆といふのは、畢竟、作者ではない他人が、便宜の爲めに、作者によつて表現されたさまざまな藝術形式に、それぞれに與へた名前であるに過ぎなかつた。然も凡ての藝術形式は、それが內容から抽象された形式である限りに於いては、必ず中性である。小説なるが故に隨筆よりも格式が一段高く、從つて藝術としてのその値うちも幾倍する筈のものだと考へるのは、華族なるが故に平民よりも格式が一段高く、從つて人間としてのその値うちも幾倍する筈のものだと考へると一般の、迂愚と幼稚とを示すものであるに外ならない。『猫』の作者から言へば、『猫』が小説になつてゐるか、隨筆になつてゐるか、それとも論文になつてゐるかは、問題ではなかつた。『猫』がそのいづれでもないと宣言されたとしても、恐らく『猫』の作者は少しも痛痒を感じなかつたに違ひない。作者の腹の中には、表現を要求して止まないものが磅礴してゐた。それをどうすれば最も適切に表現する事が出來るか。それを例へば、咽喉に詰つた痰をかつと吐き出して了ふやうに、綺麗さつぱりと吐き出して了ふ事が出來さへすれば、それが詩になつてゐやうが、戯曲になつてゐやうが、將又小説になつてゐやうが、乃至はそれらの

うちのどれでもないものになつてゐやうが、ただその存分に吐き出したといふ事それ自身丈で、作者は十分な滿足を經驗するのである。

ニイチエは『ツアラツストラ』を書いた。『ツアラツストラ』は元より論文ではない。それかと言つて詩でもない。戯曲でもなければ、又小説であるとも言ひ切れない。然しそのためにニイチエの『ツアラツストラ』は、價値がないとは言へない。反對に、ニイチエの『ツアラツストラ』は、そのためにより多くの價値を發揮したと言へない事もないやうである。それは、さういふ種類のどれでもない『ツアラツストラ』には、さういふ種類のどれにも見出す事の出來ない直接性があつて、ニイチエの惱める魂が、ぢかに我我の魂に話しかけるからである。『猫』を『ツアラツストラ』に比べるのは、色んな點で不都合な事もあり得る。然し、少くとも衷に表現を迫つて止まない心に、最も適切な表現を與へる爲めに、今までに殆んど類のない形式を創造したといふ點では、兩者は全然同じ道をあるいたものと言つて可いと思ふ。

『猫』が初めて世の中に出た時には、人人はその形式の異樣であるのに、先づ驚異の眼を見張つた。それにも拘はらず人人は、かういふ形式を選み上げて來て、それを自己の內面に最も適切な表現の器としたといふ、作者の獨創力に對しては、何の注意をも、また何の敬意をも拂はなかつた。人人は、コロムブスの卵のやうに、さういふ事は疾うの昔から知つてゐる事で、別に珍らしい事でも、骨の折れる事でも、なんでもない事のやうに思つたからである。其所に、一方から言へば、作者の驚嘆すべき藝術的手腕があつたと言へるのかも知れない。人人に何の不思議も感じさせない程に、作者は、その異樣な形式を、親しい、身についた形式として、驅使する事が出來てゐるのだからである。然し『猫』の藝術的價値を論じようとするほどの者は、何よりも先に、まづこの點を問題にしなければならないもののやうに、私には思はれる。『猫』は小説でもあれば、論文でもあり、戯曲でもあれば、詩でもある。また雜錄でもあれば、隨筆でもある。日記でもあれば書簡でもある。さうして又そのいづれでもない。言はば、なんでも這入れば又なんでも入れる事の出來る、乞食袋のやうなものである。なんでも入れられ、又なんでも這入

つてゐるから、其所には、一つのものしか入れられないもののやうな、束縛がない。氣苦勞を必要としない。自由自在である。此所では、あらゆる心が、その動くがままに、殆んど自然に、何の强制もなく、ぞろぞろ盛り込む事が許される。換言すれば、作者から言つても、讀者から言つても、此所でなら、手紙でも書くやうな心持で、若しくは胡座をかいて座談でもするやうな心持で、どんな種類の事でも、勝手氣儘に、遠慮も氣兼もなく、言つたり聽いたりする事が出來るのである。實際作者は此所で、自分の言ひたい事を、思ふさま、自由自在に言ひまくつた。その意味では『猫』は、作者の日記であるといふのが、一番適切な名前であるかも知れない。

『吾輩は猫である』といふ題名は、作者自身ではなく、外の人が選んだ名前だといふ事になつてゐる。是はその通りである。然し是は、作者が題名を『吾輩は猫である』にしようか、それとも單に『猫傳』としようか、といふ事に迷つてゐた際に、外の人が決定を與へたといふのみで、『吾輩は猫である』といふ題名が、最初作者の頭には存在してゐなかつ

たといふ事を意味しない。『猫』はその第一の冒頭から既に、「吾輩は猫である」といふ言葉をもつて破題されてさへもゐるのである。

吾輩といふ一人稱には、それ自身の中に、既に或滑稽が含まつてゐるやうに、私には思はれる。使つてゐる當人は、それが得意であるには違ひなかつたが、その得意な所が——尊大ぶつてゐる所が——同時に何となくさもしく見え又寂しくも感じられ、それが我我に妙に擽つたい感情を惹き出すのである。「吾輩は猫である」の吾輩といふ言葉を選み上げた時にも、作者は、既にそれと同じ感じが讀者に喚び起される事を意識して、まづ是を置く事にしたものに相違ないと想像される。然も此所で、その吾輩、吾輩を繰り返す者は、例へば選擧區民を前に置いた代議士かなぞではなく、獸（けだもの）であり、獸の内でも强い方ではありその存在を認められさうもない、一匹の猫でしかなかつたのである。さうしてその猫が、先づ最初に「吾輩は猫である」と堂堂と名乘を上げるのである。さうしてまた更に得意さうに、「名前はまだ無い」と二の句を繼ぐのである。吾輩、吾輩と稱へる人間に、滑稽を、或は威壓を、或は不快を、或は憧憬を感じるに論なく、此所ではその吾輩が、人間で

はなく、一匹の猫によつて、いかにも偉らさうに用ひられるのだから、それを聽く人は、誰でもすぐに吹き出したくなる程の、突梯滑稽を感じるに違ひない。『猫』は、さういふ「吾輩は猫である」といふ言葉を題名とし、又同じ言葉を一篇の破題とする作品である。作者が此所で目ざしたものは、既にそれだけで十分説明し悉くされてゐると言つて可い。

この事は『猫』の笑ひの性質をきめる上に、最も重要な示唆を與へる。

「吾輩は猫である」といふ言葉そのものの中に、既に滑稽がある。當人は非常にえらい積りか何かで、頻に吾輩は、吾輩はを繰り返してゐるが、さういふ事を言つてゐる奴はと見ると、高が一匹の猫に過ぎない、從つて他人から見れば、それがひどく滑稽に見える。——それは既に分かつてゐる。第二に問題となるのは、さういふ事を言つてゐる猫と作者との關係が、此所はどうなつてゐるかといふ事である。

一般に『猫』の中の苦沙彌先生は、作者自身を描いたものだと信じられてゐる。或はさう言つても可いのかも知れない。苦沙彌先生の中には可也濃厚に作者自身の影がさしてゐるからである。然もその苦沙彌先生は、吾輩は、吾輩はを繰り返す猫から、どうかすると褒められないでもないが、寧ろ頻にやつつけられてゐる。猫は、單に苦沙彌先生をやつつけるのみならず、金田夫婦をやつつけ、鈴木藤十郎をやつつけ、東風をやつつけ、寒月をやつつけ、『猫』の中では一番ふざけたりからかつたりひやかしたり縱横無盡にあばれ廻つてゐる迷亭をも、さんざんにやつつける。それのみではない。この猫は、その潑剌たる才氣にまかせて、或は人間一般を論じ、神を論じ、藝術を論じ、文化を論じ、天馬空を行くの概をもつて、あらゆる機會に、あらゆる氣焰を揚げてゐるのである。——すると作者は、此所では、一方苦沙彌にもなつてはゐるが、然もその苦沙彌を自分から突き放して、その上に立つ猫にもなつて、——もつと適切に言へば、作者は猫の假面の下に、自分の言ひたい事を言つてゐるのだと見るより外はない事になるのである。

事實またその通りに違ひない。自分の分身として苦沙彌先生を描いた作者は、同時に猫ともなつて、丁度自分で自分自身を批評するやうに、その苦沙彌先生の色んな言動を、色色に批評してゐるのである。

然し作者は猫になつてゐるとは言つても、苦沙彌先生を自分から突き放したと同じやうに、猫をも亦自分から突き放して書いてゐる。例へば作者は猫に雜煮を喰はせて踊りを踊らせ、或は三毛猫に對して失戀させ、泥棒を見ては辣み上がらせる。猫が鼠をとるのに、自分を東郷大將に比較した所まではよかつたが、然し鼠に飛びつかれると、この猫は、無殘にも棚からどたりと落つこちるのである。あまつさへ最後にはこの猫は、ビールを飲んで、醉拂つて、水甕の中に踏み込んで、非業の死をさへも遂げる。作者は猫になつてゐるのかも知れなかつたが、然しその猫をさへ作者は、上から見下ろして書いてゐるのである。自分の分身として苦沙彌先生を描いた作者が、同時に猫となつてその苦沙彌先生を見下してゐる如く、自分の分身として猫を描いた作者は、同時に又猫以上の存在として、又その猫を見下ろして書いてゐるのである。

自分自身であると同時に他人でもあり得るといふ事が、詩人の無敵な特權だといふ意味の事を、嘗てボードレールが言つた事がある。『猫』に出て來るあらゆる人物は、いふまでもなく、すべて作者の分身である。然も作者は、その分身を、他人として眺める事の出來る、無敵な特權を賦與されてゐる。從つて作者は、『猫』の中に出て來るあらゆる人間にもなれるとともに、他人として、それらの人間の言動の正邪善惡美醜を判斷する猫にもなれ、又その猫の言動の正邪善惡美醜を他人として判斷する、猫以上の存在にもなれるのである。——勿論『猫』には、その猫の言動の正邪善惡美醜を他人として判斷する、猫以上の存在の意見は、少しも書かれてゐなかつた。然し、其所に猫以上の存在として、作者が立つてゐるといふ事を認識させるものは、『猫』の題名と『猫』の破題との「吾輩は猫である」といふ言葉である。若しくは篇中到る所に現はれる一人稱の、吾輩は、吾輩はといふ言葉である。假令猫自身は一所懸命に、眞面目に、眞つ赤になつて、何かを得意氣に辯じ立ててゐるとしても、それをもう一段高い所から見てゐると、結局「屁の樣な氣焰をふき出」してゐるものであつたに過ぎない。さういふ嘲侮の笑ひが、これらの言葉によつて、『猫』全體の上に浴びせかけられる事になるからである。作者は猫になつて、天下の人間のみならず、自分自身の影を濃厚に宿してゐる苦沙彌先生を笑つた。然も同じ作者は猫以

上の存在となつて、その猫をも笑つてゐる。その意味で『猫』の笑ひは、その根柢に於いて、自嘲の笑ひであるに外ならなかつた。

もつとも猫の氣焰を、結局は勝手な熱を吹いてゐるに過ぎないといふ風に、すつかり見下ろして了へるほど高い所に、もし作者が身を置いてゐたとしたら、恐らく『猫』は出來あがらなかつたに違ひなかつた。一方ではそれを見下ろすやうな心持を持つてゐながら、一方では尙且それを見下ろし切つて了ふ事が出來ない所に、『猫』が生れる所以の根柢があつた。作者は、ある意味では、そんな事に拘泥したり、そんな事を言つたりする事は、馬鹿馬鹿しい、大人氣ない事だと考へてゐるのである。然も作者は、どうしてもそれに拘泥し、どうしてもそれを言はなければゐられないのである。その意味で『猫』を生む氣分の底を貫くものは、多くの純正喜劇と同じやうに、正に悲劇的な心であつた。

元來この作者は、一途な一國な、火のやうに燃える感情を胸に貯へてゐた人であつた。

それがなければ、例へば『幻影の盾』のやうな、若くは『坊つちやん』のやうな作品が、この作者に、書ける筈がない。然も同時にこの作者は、火のやうな感情と並んで、是を支配し調節する筈の、條理に明らかな、理性を鍛え上げてゐる人ででもあつた。然しこの火のやうな感情は、どうかすると、理性の支配力や調節力を絶して、猛烈に爆發する事があつた。作者はそれを恐れた。從つて作者は、それを未然に防ぐために、いろんな形で、安全瓣のやうなものを用意して置かなければならなかつた。さうしても尙その火のやうな感情は、猛然としてその頭を擡げる事もあるのである。その點では、この作者の生涯の大部分は、纔に平衡を保たれた天秤皿であつたやうにも思はれる。さうして、その纔に平衡を保つ爲めの安全瓣の一つとして、この『猫』は存在してゐたのである。

「發句をやめてから『猫』を書き出すまでの間は、眞暗な穴の中をあるいてゐるやうな氣がしてゐた。『猫』を書き出して初めて、先きが明るくなつたやうに思はれた」——私が直接作者から聽いたこの言葉も、また、一面から、この間の消息を物語るものであるに外ならない。

この作者は、事物を必ず兩面から考へなければならない、物の見方は決して一面的であつてはならない、と考へ且つ實行しようと努めた人であつた。然しこの衷に燃えてゐる火のやうな感情は、直接に、一途に、一國に、物を見、物を感じ、物を考へたがつた。それが理性とともにあるき、若くは理性から調節され制御されてゐる内はよかつたが、然しどうかした機會に、理性の力ではどうする事も出來ないほど、力强く動き出す場合は、作者は必然に、一面的に物を見、物を感じ、物を考へるべく餘儀なくされざるを得なかつた。それが作者を、作者らしからず、我が强くも我儘にも頑固にもした。然もそれは、あとでは必ず、作者の心を暗くした。

是は主として頭の中での問題である。勿論是は實行上の問題にも當て篏り得るには違ひなかつたが、然し實行では、實行に移るまでのうちに、可也の反省や意志が加はり得る。反省の鋭い、意志の鞏固なこの作者にあつては、從つて、よくせきな場合でない限り、それは實行にまで移されないうちに、中途で喰ひ止められた。然し内省的な人間にとつて、その事が實行に移されると移されないとに論なく、ある事を感じ、若しくはある事を考へたといふ事は、既に動かす事の出來ない一箇の事實である。作者は、頭の中でこの事實に出會ふ毎に、あとでは必ずその心を暗くした。然も作者の心をその都度暗くしたといふ事は、必ずしもその都度、作者の火のやうな感情の威力が、滅殺されて行つたといふ事を意味しない。反對に、ある時はその火のやうな感情は、自分の見、感じ、若しくは考へた所のものを、已むを得ない事とし、若しくは正當な事として、反つてそれに支配や制御を加へようとする理性を憎み、其所から全然解放されて了ふ事を、猛然として要求するやうな事も亦、屢あり得たのである。作者の頭の中では、ある時期の間は、理性の悲哀と感情の叛逆と——換言すれば、兩面的に見ようとする心と、一面的にしか見られない心と、一面的にしか見られなかつた事を悲しむ心と、一面的に見て構はないと主張しようとする心と、さういふ心が幾重にも入り亂れて、少しも安住を與へる事がなかつたもののやうに、私には想像される。

かういふ幾つもの心が入り亂れて、歸一する所を知らない頭の狀態を持つてゐる者にと

つて、『猫』のやうな形式の作品は、最も適切な表現の器となり得るものではなかつたか。

――不正を憎み、惡を指彈し、醜を擯斥し、誠實と單純とを愛した作者は、その憎み指彈し擯斥するものをも、一往は兩面から觀察した上でなければ、自分の意見として是を公表する事を欲しなかつた。然し當時の作者の中に燃えてゐた火のやうな感情は、もつと直接に、さうして一國に、さういふものを憎み指彈し擯斥しなければゐられなかつた。他人の立場に立つて再往それを檢覈した上で、二つの立場が互に働き掛ける所を眺め、其所から正當な結論を導き出して來るといふやうな、そんなまだるつこい手續は踏んでゐられないほど、その要求は作者を刺激した。その刺激を直ちにとりあげて、そのまま紙に、吐き出すやうに書いて了ふものとして、『猫』は最も都合の可い形式ではなかつたか。なぜなら『猫』は、作者夏目漱石が夏目漱石としての意見を述べるのではなく、猫が、――作者が猫になつてはゐるが、然し猫は必ずしも作者の全部ではない事は初めから知れてゐる、その猫が、氣儘勝手に、自分の意見を述べるのだからである。意見を述べるものが猫である以上、その意見は、假令一面的ではあつても、それは作者夏目漱石の全部の責任ではなく、作者夏目漱石の一部の責任であるに過ぎないからである。その點で『猫』は、作者の心を樂なものにする。腹が立つても、その腹立ちをすぐそのまま其所に書く事が出來る。喧嘩をしても、その喧嘩を又すぐそのまま其所に書く事が出來る。一往も再往も兩面から觀察して、その結果、不正はどつちにあると、斷案を下す必要は、此所では少しもないからである。

――かういふと、或は作者を卑怯な人間のやうに考へる人がないとも限られない。然し『猫』の形式が作者夏目漱石の一部にしか責任を持たせないやうに出來てゐるといふ事は、主として創作心理の上の問題であつた。それは、『猫』一篇が讀者に與へ得る藝術的若くは倫理的影響に對して、作者夏目漱石がその一部しか責任を負はないのだといふ事を意味しない。作者は『猫』で、誠實に、自分の見た事、感じた事、考へた事を記錄してゐるのである。その點では恐らく作者は、誰の前にも恥ぢる所がない。ただ然しそれは、錬りに錬り鍛へに鍛へられた結果の發表ではなくて、言はば反射的に孕まれた意見の表現であつた。その反射的であるといふ點に作者は引け目を感じるのである。それが、かういふ風な形式をとつて發表せられるとすれば、作者はさして強くその引け目を感じなくても濟む。從つ

てこの引け目は、寧ろ作者が作者自身に對して感じる引け目であつて、他人に對して感じる引け目ではなかつた。その意味で作者は、自分に對しては卑怯であつたかも知れなかつたが、然し決して他人に對して卑怯なのではなかつた。然もこの際自分に對して卑怯であるといふ事は、天に對して謙遜であるといふ事だつたのである。

作者は『猫』で、自分の感じた事を、言はば反射的に表現してゐる、と私は言つた。然しこの事は注釋を必要とする。なぜなら『猫』は、表面的には、決してさういふ尖尖しい感じを持つてはゐないからである。これは、第一にこの作者には、物の姿を刻み出す活動そのものに寄せる、多大の興味があつた。第二にこの作者には、生の感情を生生しく寫し出す事に對する、本能的な嫌惡があつた。第三にこの作者には、いくら憎んでも結局までは憎み徹せない、人類に對する暖い愛があつた。第一のものから『猫』は、作者の當時の感情とは緣の薄い、場所や場面や人物の、いろんな巧妙な描寫を得た。それが方方に鏤められて、『猫』の空氣は可也ゆとりのあるものになる。第二のものから『猫』は、輕蔑と誇張とに彩どられた、作者自身の癇癪を得た。從つてその癇癪は、癇癪としてでなく、滑稽として我我に訴へる。第三のものから『猫』が受けとつたものは、どんなに作者が不愉快な心持をもつて對してゐるものでも、結局作者は心の奥の方ではそれと握手しようとしてゐでもするやうな、全體の上に覆はれた、和やかな暖かな空氣である。――かういふ要素が集つて、『猫』の味を、一色でなく、可也複雜なものにする。さうして『猫』に、『猫』を生み出した根本の氣分とは正反對な、外貌を與へさへもする。『猫』を、陽氣な賑やかな、落語かなぞのやうなものに見る人は、畢竟この外貌のみを取り上げて論らつてゐる人なのである。

『猫』を批評するのに、同じ作者の『文學評論』の中の、スキフトに關する批評が、よく持ち出される。諷刺と滑稽とに對する作者の意見は、『猫』の笑ひの性質を理解する上に必要な手引である事は、言を俟たない。然しこの作者とスキフトとは、人生に對する態度の上に根本的な相違があつた。勿論『猫』の作者も亦、スキフトのやうに、懷疑的な氣持

になつてゐた事は、爭はれなかつた。然し『猫』の作者は、いかに懷疑的になつてゐても、人類への愛丈は捨る事が出來ないのである。それは常に作者を牽いて、作者を人間に近づける。スキフトも亦、感情過多の爲めに惱みぬいた人であつたやうに見える。また倫理的に潔癖であつた人のやうにも見える。さうしてスキフトは、その爲めに、人間一般を憎んだと言はれる。然し『猫』の作者は、箇箇の人間を憎みはしたけれども、その箇箇の人間そのものを、若しくはその奥を流れてゐる人間一般を憎む事は出來なかつた。假令人間一般を憎み得る事はあつても、またその奥の人類を憎む事は出來なかつた。憎みに徹して生き得るには、『猫』の作者は、あまりに淋しい人だつたのである。この作者が、人が誠實を缺き技巧を用ひ策略を施す事を極端に憎んだのも、そのため天眞の愛の流露が遏まれて、單純に魂の肌と肌とを觸れ合せる事が不可能にされる、その意味で自分の淋しさが容易に充たされる事がない事を、憤つたものであるに外ならない。

『猫』では人生の惡がいろいろ笑はれてゐる。然し『猫』で笑はれてゐる惡は、多く抽象化され類型化された惡であつて、割合に具體的なものが少ない。是は何故であるか。

是は一つは、作者の實人生に觸れる程度が、當時まだ僅少であつたせゐもあつたかも知れない。然し、それよりももつと重大な理由は、作者に十分具體的なものはあつても、それは餘りに身邊すぎ眼前すぎ生生しすぎるために、特にそれを類型的なものにし抽象的なものにするのでなければ、表現するに堪えなかつた、といふ點にあるやうに思はれる。例へば同じ作者の『道草』である。『道草』の題材を形づくつてゐるものは、『猫』が書き出される少し前の、然し生活氣分から言へば殆んど同時代と言つて可い時分の、作者自身の生活であつた。その『道草』では、作者は、勿論作中のどの人物よりも遙に高い所に立つてはゐるが、いかにも具體的に、一一の事件を描いてゐる。もし作者が『猫』で、當時、惡と感じて憎んでゐた所のものを、具體的に書かうと欲したならば、少くとも『道草』の範圍丈でなら、十分具體的に書き得た筈であつた。然し作者は、それを書かなかつた。假令書いても、それを抽象的に、類型的に、をかしい事としてしか書かなかつた。不愉快な事、腹の立つ事、寂しい事、情ない事、さういふ種類の凡ての事は、何所かで抽象的なも

のにし、類型的なものにし、從つてをかしい事として表現するのでなければ、少くとも『猫』を書く時の作者は、それを表現する氣にはなれなかつたのである。

然し、抽象的なものにされ、類型的なものにされ、をかしい事にされて表現されたのでもなんでも、ともかく此所では、一切腹の中に溜つてゐるものが、すつかり吐き出して了へるのである。殊に『猫』のやうな自由な形式を持つてゐる作品では、例へば落雲館事件のやうに、一方ではそれを笑つて敍述してゐても、一方ではその笑はれる事の中に可也打ち込んで行く事も、十分可能であつた。作者は、自分の上に常に或拘束を加へてゐるとは言つても、『猫』のやうな形式では、尙その拘束を超えて、自在に存分に、自分の感情を直灑する事も亦、可能だつたのである。作者は『猫』を書く事が出來た爲めに、どの位心持を爽やかにし得たか分らない。

『猫』の中で殊に興味を惹かれるのは、苦沙彌先生を中心とした、迷亭や寒月や東風や獨仙や、さういふ人達によつて作られてゐる、特別な社會の空氣であつた。勿論この社會には、特に人情がかつたものは動いてはゐない。それでも何かしら底の方から暖かなものが滲み出て來る。さうして其所には、遠慮も氣兼も、禮儀も作法も、猜疑も嫉妬も、權謀も術數も、我執も偏見も、狹量も固陋も、さういふ實生活に於て人を息苦しくするやうなものは何もなくて、あるのは直截と自由と平和と品位とだけである。『猫』の中の猫は、是を「太平の逸民」と評したが、まことに是等の人達は「太平の逸民」であり、是等の人達によつて形づくられてゐる社會は、二十世紀の武陵桃源であつたに違ひなかつた。然も鈴木藤十郎君や金田夫人や多多良三平君や、或は直截を知らず、品位を缺き、自由を持たない人人といへども、他のいろんな人物からさまざまにやつつけられる事によつて、――換言すれば、相當の税金を拂ふ事によつて、またこの武陵桃源の世界の中に、登場する事を許されるのである。

かういふ社會を創造し、かういふ社會の空氣に浸るといふ事は、息苦しい、いらいらし

た生活を續けてゐた當時の作者にとつて、どれほどの慰安であり得たか、想像するに難くない氣がする。この點ででも『猫』は、作者にとつて、たしかに救拔（エルレーズング）だつたのである。この作者は、『猫』の最後の回である第十一回と殆んど相接して書かれた『草枕』で、主人公の畫工をして、非人情を說き、二十世紀に於ける非人情の功德を說かしめた。『草枕』の畫工がその非人情の旅から受ける苦の功德は、やがて『猫』の作者が『猫』から――少くともこの苦沙彌先生を中心とする一つの社會の空氣から受ける苦の功德である。『猫』はその意味に於いて、著しく相違した外貌を持つてゐるにも拘らず、その奥の方では、『草枕』と重要な點で握手する作品であつたと言つて可い。

かういふ態度は然し、一般には、回避的な消極的な態度だと言はれるやうである。息苦しい人生に於いて、その息苦しさを突き拔ける事なしに、その息苦しさから救拔（エルレーゼン）してくれる世界を創造し、その中に立て籠つて休息するといふ事が、回避的にも亦消極的にも見えるのであらう。然しその反對の、直行的な若しくは積極的な態度とは、如何なる態度を指すのであるか。車夫や車力のやうに、日が暮れても夜があけても、のろのろと車を曳き續けてゐる事が、直行的な積極的な態度であるか。藝術にこの意味の救拔（エルレーズング）を求めて、其所でいら立つた頭を靜め、苦しい息をつくといふ事が、何故にいつまでも安臥し休息する事を意味するのであるか。その世界の空氣に頭を浸す事によつて、更に勇氣を回復し、改めて實人生とまともに取つ組み合ふといふ事が、さういふ救拔（エルレーズング）を求める作品が在存してゐる事によつて、何故否定されなければならないのか。

『草枕』の中で作者は、「二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である」と言つた。『草枕』が作者の精神生活にとつて必要な睡眠であつた如く、『猫』も亦、一面、作者の精神生活にとつて必要な睡眠ででもあつた。我我の生活に於いては、睡眠も亦、回避的であり、消極的であるか。

『猫』の作者は、慶應の末に生れた、日本人であつた。その意味に於いて作者が、近世日本の精神文化史の一面を最も濃厚に彩どる、禪文化の傳統の上に立つてゐるといふ事は、少しも不思議な事ではなかつた。又假令さういふ傳統を繼承しなかつたとしても、この作

者ほど實證的であつて、然も感情の過多に苦しんだ人が、自力でその感情を超越して自然そのものと一つになることを、その修業の根本とする禪に、十分の共鳴を感じるといふ事は、少しも不思議な事ではなかつた。

『猫』に於いて、作者のその方面の修業が、既に成就されてゐるとは、無論私は思はない。然しその方向に於いて、『猫』が、正しくその方向を指してゐるものである事は、明白である。作者が此所で、他人の惡を笑つてゐるのも、又自分の惡を笑つてゐるのも、又比較的さういふ惡に染まる事の少ない一つの小さな社會を創造して喜んでゐるのも、又それら凡ての上に立つて、それら凡てを大きく笑はうとしてゐるのも、凡て作者の態度が、この方向を指してゐるものである事を證明する。一方から言へば、『猫』の作者の態度がこの方向を指してゐるものであると見る事によつてのみ、それが初めて統一された態度として理會され、又それが後の作品を俟つて徐徐に完成されて行く態度と脈絡する所以のものを理解する事が出來るのである。――手短に言へば、かういふ『猫』のやうな過程を繰り返し繰り返ししながら、作者は、『道草』を書き得るやうな心境に、大正四年には到達し得たのである。

作者の態度を消極的と言ひ回避的と名づける人が、若し作者のこの態度をその證としようとするものであるならば、それは、唯その人の眼が、單に表面に眩惑されて、奥に火花を散らしてゐるものに眼を放つ事が出來ないといふ事を、自ら證明するに過ぎない。

作者は、禪坊主が寺に立て籠ると同じやうに、書齋に立て籠つてその一生を過した。その點では或は作者は消極的であり、回避的であつたと、言はれ得るかも知れない。然しそれは唯、肉體を方方に持ち廻らない丈の話である。さうして、此所では問題が內面の問題である以上、肉體を持ち廻るか廻らないかといふ事は、いかなる契機をも形づくる權利を持つてはゐない筈である。

元來作者の態度が回避的であるといふ事は、究明を必要とする一大事に逢著しながら、それとまともに取つ組み合つて格闘する勇氣がなく、かはせる丈は身をかはして、あはよくばその究明を有耶無耶の裡に葬り去らうとする態度をこそさす筈である。又作者の態度

が消極的であるといふ事は、究明を必要とする一大事に逢着しながら、それとまともに取つ組み合つて格闘する勇氣がなく、究明しない事は氣懸りではあるが、いつまでも煮え切らずに愚圖ついてゐる態度をこそさす筈である。然しこの作者ほど眞面目に眞劍にまともに、究明を必要とする一大事と取つ組み合つた人はなかつた。殊に正義と愛との對立と調和とは、殆んどこの作者の一生を苦しめ——換言すれば、この問題は、この作者が、一生の間かかつて、最も眞面目に最も眞劍に最もまともに、取つ組み合つた問題であつた。この態度が若し消極的であり回避的であるとするならば、トルストイの態度も亦、消極的であり回避的でなければならない。ストリンドベリの態度も亦、消極的であり回避的でなければならない。

『猫』に就いても同じ事が言はれ得る。『猫』では凡てのものが滑稽化されて、笑ひの衣裳の下に、現はされる。是が恐らく『猫』の全體を不眞面目なものに見せ、作者の態度を消極的にも回避的にも見せる、主なる理由をなすに違ひなかつた。然し、當時は最も眞面目に行動したものが、後でその行動の目的物を形づくつてゐたものは一瞥をすら値しない無價値なものであつたと氣がついた時、自分が當時それにも拘らず最も眞面目に行動した事を嘲笑したくなるのは、極めて自然な事である筈である。然もこの際、當時の行動を馬鹿馬鹿しく醜く感じる心は、さうして當時の行動を嘲笑したくなる心は、決して不眞面目な心ではない。又消極的な回避的な心でもない。寧ろ人は、眞面目であればあるほど、積極的であればあるほど、それを、馬鹿馬鹿しく、醜く、嘲笑したく感じる筈である。然もこの事は、時日を隔てて過去の自分の行動を省みた時にのみ、起り得るものとは限らない。他人の行動を現在眼前に見ても起り得る。自分の行動を現在眼前に見ても起り得る。啻に行動のみならず、言ふ事、感じる事、考へる事に就いても、同様に起り得る事實である。さうして『猫』の笑ひの根柢は、この種の嘲笑に根ざしてゐるものであつた。其所に、何の、不眞面目といひ消極的とひ回避的といふ、さういふ批評が這入り込んで來る、餘地もあり得ないのである。

唯、例へば過去の自分の行動が徒勞に過ぎなかつたといふ事に氣がついて、それを非常

に不愉快な事に考へ、或は憤慨し或は悲歎する者、換言すれば、それを嘲笑する事の出來ない者もあり得る事は爭はれない。然し是は氣質の相違であつて、其所から眞面目不眞面目の區別が生れて來るべき筈のものではなかつたのである。さうして『猫』の作者は、それを嘲笑したくなる種類の、男性的の作者であつた。同時に『猫』の作者は、それを嘲笑し得る丈の、高みに身を置く事の出來る作者であつた。

所詮、この高みに身を置いて自分自身を眺める――眞面目に眞劍に愛し憎み喜び悲しんでゐる自分を、そのままで高い所から眺め得る――さういふ二重の心の活らきを理會するといふ事が、『猫』を理會する上の、最も貴重な鍵となるのである。（『中央公論』――三・一二・一）

『夏目漱石集』の初に

先生は慶應三年正月五日牛込の馬場下で生れ、大正五年十二月九月年五十で、早稲田南町七番地で亡くなつた。その亡くなつた所と生れ且つ育つた所とは、僅か四五町の一筋道で繋がつてゐる、同じ牛込區内であつた。明治四十年の秋、先生が本郷の西片町から早稲田へ越して來た時にも、思ひなしか、先生にはある特別な感情が動いてゐるらしく見えた。亡くなる前年に、先生は『硝子戸の中』の中や『道草』の中で、自分の子供の時分の思ひ出を色色に書いたが、是も先生がその牛込の、然も生れた場所に近く住んでゐるといふ事實の意識が、さういふ事を思ひ出させる力強い機緣の一つになつてゐたに違ひない。

然し先生の幼年時代は、決して幸福だとは言はれなかつた。二女三男の後に生れて、先

生は親からの愛情を人並に享受する事が出來なかつた。先生はすぐ里子に出された。また間もなく養子にやられた。是がどういふ印象を先生の心に與へ、またその後先生にどういふ因緣をつくつたかは、事細かに『道草』が我我に物語つてくれる。先生が生家に歸つて來たのは七つの年である。さうして籍がちやんと復つて來たのは、先生の二十二の年である。さうしてこの年の七月に先生は、第一高等中學校の豫科を卒へて、本科第一年に進む筈になつてゐた。

正岡子規は作家夏目漱石を作り上げる上に必要缺くべからざる存在であつた。春秋流に言へば正岡子規がなかつたら作家夏目漱石は存在しなかつたかも知れない。先生がその正岡さんと知り合ひになつたのは、明治二十二年、先生二十三の年の事である。

先生は大學を卒業してから松山に行つた。それから熊本へ行つた。熊本からロンドンへ行つた。ロンドンから歸つて東京に住むやうになつてから、正岡さんの弟子の高濱さんと正岡さんの殘して行つた雜誌『ホトトギス』とが、先生洋行中に亡くなつた正岡さんの代理を勤めて、先生に小說を書かせ出した。それが『吾輩は猫である』である。後に先生が、俺は何でも自分で進んでやつた事がない、發句を作るのも文章をかくのも小說を作るのも、みんな人から勸められてやり出した事だ、と言つてゐたが、まつたくそれに違ひない。その點で先生ほど內氣な人はなかつた。さう言へば畫をかくのも、元はといふと、或は橋口さんなどから勸められて始めたものかも知れない。

先生が大學を止めて『朝日新聞』に這入つてからの事は、到る所で書かれ、誰でも知つてゐる事であるから、別に書かない。唯修善寺での大吐血は、先生の內生活に大轉回を與へた意味で、非常に重大な事件であつたといふ事丈を、此所では注意するに止めて置きたいと思ふ。先生はその後殆んど每年のやうに胃潰瘍に見舞はれた。さうして最後にはその爲めに命をとられた。先生はその繼起を、天からの音づれのやうにも感じてゐたのではないかとも想像される。先生は、人を責めるより前に先づ自分を責めようとするやうに、人を憎むよりも前に先づ人を宥さうとするやうに、さうして、ひつくるめて人間を離れて自然に卽かうとするやうに、心持が段段に變つて行つた。その心持の光を最初に感じさせるものは、先生の修善寺の日記である。また『思ひ出す事など』である。（改造社版『現代日

「夏目漱石集」の初に

本文學全集』第十九卷――二・五・）

『夏目漱石集』の終に

何故にかういふ編輯の仕方をしたかに就いて、此所に簡單に私の考へを書いて置くのは、私の義務ででもあると思ふ。一般の讀者にとつて此事は、漱石先生を理解する上に、或は何等かの參考になるかも知れない。

『吾輩は猫である』は初めて先生を世間的に有名にした作品である。然もこの作品が先生の一面を最も顯著に代表してゐるものである以上、是はまづ第一に集中に加へられなければならない作品である。然し『猫』の全部を此所に置くといふ事は、限られたる頁數では、他の重要な作品を除外しなければならなくなるといふ意味で、到底不可能の事であつた。その上『猫』は元來最初のもの一つで、讀み切りにする積りで書かれたものである。

それが世評もよく編輯者の勸め方も熱心を極めた爲に、第二を書き、第三を書き、到頭第十一まで書き續けられた。從つて是は、章は十一まであるとは言つても、先生自身が『猫』上篇の序で「此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるから、たとひ此一卷で消えてなくなつた所で一向差し支へない。」と言つてゐるやうに、章の途中で切りさへしなければ、章と章とでは、何所で切つても構はない筈のものである。それで私はその第一から第三までを選み上げた。

『猫』の第一を書く時には、無論先生は第二を書く事を豫想しなかつた。第二を書く時にも先生は、恐らく第三を書く事をはつきりとは豫想しなかつた。然し第三を書く時には、書く事が出來たら、先きを書き續けても可い位には考へてゐたに違ひない。——是は無論私の想像である。然しこの想像は、形式の整へ方が、第一と第二とでは、それ〳〵一つの纒まつた文章となつてゐるに反して、第三になると、殊にその結末の一節が、何かしら後に來るものを待つてゐて、それ自身では十分に終結してゐない感じを與へる所から、主として引き出されたものである。然も『猫』の文章が持つ味の方から見ても、第一には割に愼ましやかな、言はば何所かにおどおどした所があり、第二にも晴れやかな心持も交つてはゐるが、尙何となく遠慮げに丁寧に書いてゐる所があるのに、それが第三になると、先生の心持は思ひ切つて自由になり、書きたい事は思ふ存分書きまくると言つた感じに變つて來てゐる。さうして『猫』は、最後まで、この第三の調子を持ち續けて進んで行つてゐるのである。この意味から言つて、『猫』の第三は、丁度三代將軍家光のやうに、『猫』十一章の基礎を確立したものだと見る事も出來るであらう。それ故私は、ある意味からは『猫』の全部を代表させ得るとも考へて、その第一から第三までを選み上げたのである。

先生は『猫』を書いて有名になつた。然し『猫』を書いて有名になつた事で、先生は隨分損をした。なぜなら、當時の世間の多くは、『猫』の笑ひを笑ひ丈として歡迎して、その奥に藏されてゐる先生の血と涙とを、少しも讀みとる事がなかつたからである。さうして先生を、眞面目な問題をも不眞面に受とつて了ふ、滑稽作家として、先づ折紙をつけて了つたからである。然しその實先生ほどの眞面目な眞劍な作家は、當時何所にも存在してゐなかつた。今日といへどもその點で先生に匹敵し得る作家が、それほど數多くあるとも思

はれない。

然し若し今日の讀者の内で、『猫』を讀んで、先生の不眞目な心に觸れるやうに感じる讀者があるならば、その人は、同時に『道草』を併せ讀んで見るが可いと思ふ。勿論『道草』は獨立して立派な藝術的價値を持つてゐる作品である。私は『猫』の辯護の爲に、是を集中に加へたのではなかつた。然し『道草』に取り扱はれてゐる先生自身の生活上の時期は、凡そ『猫』が書かれてゐる時期と、殆んど重なり合ふ位な時期である。『道草』を通してその時期の先生の生活氣分を感じる人は、『猫』が先生のどういふ生活氣分の下に生れたものであるかを知る事によつて、『猫』の中の眞面目な分子と『猫』の奥に潛んだ悲痛な心持とを、より具體的に感じる事が出來るに違ひないと思ふ。

もつとも先生の『道草』が書かれたのは、大正四年四月中旬以後の事である。從つて其所に取り扱はれてゐる生活氣分そのものは、丁度『猫』が書かれてゐる前後の生活氣分ではあつても、それを取り扱ふ取り扱ひ方は、明治三十七八年の取り扱ひ方ではなくて、正に大正四年の取り扱ひ方である。先生が當時の氣分をかういふ風に取り扱ひ得る爲めには、

先生はその間に凡そ十年の間隔を置かなければならなかつたのだとも言へる。然もそれだけにまた『道草』は、初期の作品に見る事の出來ない、特別な美しさを持つ作品となつてゐるのである。

『道草』の主人公は、遁れ難き過去を持ち、遁れ難き肉の絆を持ち、遁れ難き社會的義務を持ち、また遁れ難き自己完成の衝迫を持ち、振り棄てたくても振り棄てる事が出來ず、愛し徹したくても愛し徹す事が出來ず、どつちにも片づかない心持で、惱み憤り悲しみ苦しんでゐる人間である。然も作者はその主人公の惱みや憤りやを、同情はするが、然し一段高い所から見下ろして描いてゐる。從つて主人公が憎みを感じる相手に對しても、假令主人公のその心持は認めはしても、主人公と一緒になつて、それを憎まうとはしてゐない。それどころか、主人公に對すると同じ程度の寛容を持つて、主人公の相手の感情や動作を眺め、ある時は主人公の相手に對する過誤を、過誤として穩やかに譴めて遣つてさへもゐるのである。從つて此所に取り扱はれてゐる材料そのものは、息苦しいやうな材料ではあつても、その材料の取り扱ひ方の奥から洩れ出て來る光は、可也朗らかな靜かな柔らかな

美しさを持つた光であつた。――私は是を、先生のあらゆる長篇小説の内で、最も完成した作品であると思つてゐる。殊に過去から現在へかけて、四十年に亙る主人公の歴史の殆んど全部をその中に盛り込んで、然も現在眼前の事件を著著と進行させ、それに反應して動く主人公の氣分を巨細に描寫し悉す藝術的手腕に至つては、恐らく何所にもその比を求め得まいと思はれる程に、驚嘆に値ひするものである。

元來先生には美しい夢を愛する方面と醜い現實を憎む方面と二つの方面があつた。それが『道草』では、一つの心の中に止揚されて現はれる。然し先生の初期の作品では、この二つの方面が、交互に一つづつ、特に高調されて現はれる事を常とした。明治三十八年に殆んど同時に出た『猫』と『倫敦塔』と『カーライル博物館』とに就いて見ても、『猫』にはその醜い現實を憎む心がより多く活らいて居り、『倫敦塔』にはその美しい夢を愛する心がより多く活らいて居り、『カーライル博物館』にはそれら二つの心が割に等分に活らいてゐる事が、誰にでもすぐに眼につくだらうと思ふ。同じ事が『薤露行』と『坊つちやん』に就いても言へる。殊に『坊つちやん』は、先生の道義的肝癪を最も直截な形式によつて、紙の上にぶちまけたものである。

『草枕』は先生自身も言つてゐるやうに、まつたく開闢以來の珍らしい小説であつた。さうして此所では、醜い現實を憎むが故に美しい夢を愛するといふ事が、最初から堂堂と論じられる。此所では女がどうするとか坊さんがどうするとか髪結床の亭主がどうするとか、中に出て來る事件そのものはさのみ問題にはならない。問題になるのは、その事件を美しく受けとる、その受けとり方である。此所で主人公は、その受けとり方を説明するとともに、自分が受けとつたものを我我に列べて見せてくれる。然し惜しい事に、主人公の夢は、現實の一角を磨り減して得られた夢であつて、現實そのままを美しい夢と見得たのではなかつた爲に、一旦山を下りると、それは破られなければならない運命を持たされた夢であつたにすぎなかつた。この事は、一面に於て、當時の先生の心の中の夢と現實との性質、並にその二つのものの調和の仕方を示唆する。然も此所に現はされた先生の人生觀は、後年の則天去私の人生觀と、十年を隔てて遙に相呼應するものでもあつた。

然しかういふ人生觀が後年の則天去私になる爲には、外の言葉で言へば、醜い現實を憎

む心と美しい夢を愛する心とが、より大きな一つの調和の中に止揚される爲には、先生の内生活は一度激しい力で急回轉しなければならなかつた。さうして、その急回轉を興へたものは、先生の胃潰瘍である。明治四十三年八月修善寺菊屋本店に於ける大吐血である。是を機として先生の人と藝術とは、より良く、より東洋的に、急劇に變化する。

先生の日記の中から抜き出して、假に『修善寺日記』と命名した日記と、『思ひ出す事など』の中から抄出した大吐血直後から數日間の回想とは、この重大な時機に於ける先生の心持の描寫として、我我に無比に貴重な材料を提供する。先生の晩年の心境の開展を問題にする者は、誰でも凡て此所から出立しなくてはならない程、是は先生の研究者にとつて貴重な材料を提供するものである。

それのみではない。『日記』には多くの發句と漢詩とが挾まれてゐる。先生の發句と漢詩とを愛する私は、この『日記』を集中に加へる事によつて、特に私が一番可い句が澤山あると信じてゐる、先生の修善寺病中の句を、同時に公にし得る事を、非常に嬉しく思ふ。先生の句は、修善寺病中以後に於て、先生の誠を吐露する句となつた。私は修善寺病中以後のには、先生の一番美しいサイドが、或は一番純粋に現はれてゐるのではないかとさへ思つてゐるのである。

この事を私は同時に、先生の小品に就いても考へる。詩人としての素質を最も饒に惠まれてゐた先生は、詩に於て、さうして詩に最も近い形式の散文に於いて、その素質を最も純粹に表現する事が出來たのではないか。少くとも小品を除外した先生の集は、私にとつては、先生の集としては到底考へられない。從つて私は小品を前期と中期と後期とに分けて、『カーライル博物館』や『文鳥』や『永日小品』抄を前期の代表に、『ケーベル先生』を中期の代表に、『硝子戸の中』抄を後期の代表に選んで見た。同じ小品でも、前期の小品には、何所かに尖尖しい所がある。私はなるべくさういふ味の少ない、圓味の多いものを選ばうとした。『ケーベル先生』は修善寺大患後、凡そ一年を經て書かれたものである。是は中期の代表と言はず、先生のあらゆる小品の中で最も美しい小品である。是と『永日小品』の中の『クレイグ先生』とを比べて見る時、前期の小品と中期の小品との間にどういふ差があるかを、人は可也具體的に攫む事が出來るだらうと思ふ。勿論二人に對する先

生の感情の動き方の相違が、二つの小品の與へる感じの相違をなすものである事には疑ひがなかつたが、然しそれよりももつと根本的なものは、それを書く當時の先生の心の相違である。前期の小品には、氣を負つたやうな感じの心が往往にして現はれる。中期の小品にはそれが殆んど消えて、あるのは、玲瓏玉のやうな――然も脈脈として暖か味の通つてゐる玉のやうな感じの――心のみである。その點で中期のものは後期のものと一緒になつて、前期のものと對照する。私が特に小品を後期まで三つに分けたのは、中期に對しては大した意味をなさない。唯『硝子戸の中』から抄出したものは、年代が大正四年であるといふ事と、纒つて一つの空氣を――全體に亙つて沁やかな潤ひを多分に帶びてゐるといふ事とから、便宜上獨立させたまでの事である。さうしてその潤ひを多分に帶びてゐるといふ事は、是が、懷し味を持つて回顧せられた先生の遠い過去であるといふ事に起因する。これ等の小品の持つ味と『道草』の中に點綴された先生の遠い過去の回想とが、どういふ所で合ひどういふ所で離れるかを點檢して見る事も、ある種の讀者には興味のある事かも知れない。

最後に斷つて置きたい事は、この集が、先生の前期と後期とに精しい割に中期に疎かであるやうに見えるといふ事である。是は然しこの集のやうに、限られた頁數の集では、已むを得ない事であつた。なぜなら中期の作品は凡て長篇小說計りで、短篇小說は殆んどない、然も『道草』が動かせない以上、長篇小說二つをとるといふ事は、外のものを犧牲にしなければならない事になるからである。然も私は、『日記』と『思ひ出す事など』の抄と『ケーベル先生』と丈あれば、十分に中期を代表し得る筈だとも考へてゐるのである。といふ事は、それほど私はこの三つのものに、重きを置いてゐるといふ事を意味するものであるに外ならないのである。（改造社版『現代日本文學全集』第十九卷――二・五・）

『こゝろ』解説

『こゝろ』は先生の死に先だつこと二年、大正三年の四月二十日から八月十一日に亙つて、東西の『朝日新聞』に連載され、同じ年の十月岩波書店から菊版の單行本として出版された小説である。その單行本の表紙・見返し・扉・奥附・箱などの裝飾は、凡て先生自身の考案にかかるものであつた。

『こゝろ』を書き出す前には先生は、今度、それぞれに獨立した短篇を幾つか書いて見たいといふ、希望を持つてゐた。さうしてその短篇の幾つかを綜括するものとして、『こゝろ』といふ名前が選まれた。然し段段書き込んで行くうちに、きまつて豫定よりも遙に長いものになり勝な先生の小説は、此所でも同じやうな經過をとつて、その幾つかの短篇の

内の一つとして受胎された先生の遺書が、それだけで優に百十回の新聞小說に廣がつて了つた。先生はそれで筆を擱いた。さうしてそれを元通りの『こゝろ』の名前で、單行本として出版した。

勿論今日我我の所有する『こゝろ』は、先生の遺書のみから出來上がつてはゐない。其所にはそれぞれ獨立の形式を具へた、「先生と私」と「兩親と私」と「先生と遺書」との、三つの短篇が含まつてゐる。然しこれらのものは、形式の上でこそそれぞれ或纏まりが與へられてはゐるものの、實質の上では互に密接に關連し合つてゐる短篇である。强ひて言へば、初めの二つは、最後の「先生と遺書」の爲めにのみ存在してゐるのだとさへも言へる。從つて今日の『こゝろ』に纏まり上がつてゐる二つの短篇は、『こゝろ』執筆以前の先生の頭の中にあつたそれとは、丸で違つた三つの短篇である。是は、執筆以前の先生の頭の中にあつた幾つかの短篇の內の一つの、先生の遺書の三つの分身であるに外ならない。執筆以前の先生の頭の中にあつた他の短篇がどういふものであつたかは然し、それを探り知るに必要な材料が些しも殘されてゐない以上、今日の我我には分からない。

違つた名前の短篇の幾つかを繫げ合せてそれを一つの長篇に纏め上げるといふ形式を、先生は『彼岸過迄』から（ずつと以前に同じ形式を持つたものに『薤露行』がある、然し是は長篇ではなくて短篇であり、小說といふよりは寧ろ詩である）用ひ始め、それが『行人』を經て『こゝろ』に及んでゐる。自分の體驗を特定の相手の前に披瀝し悉す目的を持つた手紙が一篇の眼目をなすといふ形式を、先生は『行人』で先づ用ひて亦是を『こゝろ』にまで及ぼした。——第一の形式は、さもなければひた押しに押して行かなくてはならない描寫の息を拔き、精力を要所要所に集中する事によつて、重要なものに委曲を悉す便宜を持つてゐる。一面から言へばまた其所には、題材を色んな立場から眺める事によつて、作品全體の上に寬ろぎと幅とを與へる利益もある。手紙の形式は、第三者ではなく第二者を相手に物言ふ形式である丈に、自分の腹の中にある事を一向きに思ひ切つてぶちまける事によつて、直接性を持つて讀者の心に肉薄する便宜を持つてゐる。先生の作品の中で最初にこの二つの形式を併せ用ひたものは、『こゝろ』の一年前に出來上がつた『行人』である。その意味では『こゝろ』は『行人』の形式を蹈襲したものであると言つて可い。

然も『こゝろ』と『行人』とは、啻に形式のみならず、內容の上から言つても、互に密接に關連するものを持つてゐる。二つのものは、外見上の鋭い對照にも拘はらず、此所では寧ろその外見上の鋭い對照の故に、一つのものは他のものの自然の（或意味では必然の）繼續としての關係に於いて立つてゐる。『行人』なしに『こゝろ』は考へられないと迄は言はないとしても、『こゝろ』は『行人』の後に來る事によつて、先生の心の開展の跡を示す曲線を、一層なだらかなものにし、又一層リアルなものにする。もつと具體的に言へば、『行人』と『こゝろ』とを便りとして我我は、先生の「則天去私」の人生觀の胎生學的發展を、可也はつきりと覗いて見る事が出來るのである。

『行人』の主人公は、誠を求めて誠に逢はず、愛を求めて愛に逢はず、然もそれらのものを確と握つてゐると意識するのでなければ、落ついてゐられない、人間として描き出される。自分は是程誠實であるのに、相手は自分に對して少しも誠實でない。自分は是程愛してゐるのに、相手は自分に對して少しもその愛を返さない。其所に『行人』の主人公の惱みと不安との源があり、さうしてその惱みと不安とは、この主人公を驅り立てて狂氣にまでも導かうとする。然も全篇を通じて、最後までこの主人公を支配するものは、高貴な誠實な愛情に充ちた自己を、何所までも肯定し切る心である。如何なる意味に於ても自分は惡くない、凡て他人が惡いとする心である。是と正反對に、『こゝろ』の主人公は、自分の醜惡を徹骨徹髓に嘗め悉した人間として描かれる。この主人公は先づ世の中に愛想をつかした。次で自分の周圍に愛想をつかした。さうして最後に自分自身に愛想をつかした。『こゝろ』の主人公の孤獨は『行人』の主人公の場合と違つて、いくら外から暖めてもらへても、その心の奧に張つてゐる氷の塊は竟に溶ける事がないやうな、虛無的な絕望的な孤獨である。『行人』の主人公は狂氣になるかも知れない。然し何所までも自己を肯定する心が活いて行く限り、この主人公は決して、自ら自らの命を斷たうといふ氣にはならないに違ひない。然し『こゝろ』の主人公は、いくら誠實にその奧さんを愛してゐようとも、自分の心の上に自分の誠實をさへ信じる事が出來ない程の深手を負つてゐる以上、所詮生きんとする意志を奮ひ起す事の出來ないのは當り前である。『こゝろ』の主人公は自殺した。是程自己の醜惡を嘗め悉す者は、假令肉體的には死なないまでも、少くとも精神的に

は、一度死ななければならない運命を脊負つてゐるのである。

比喩的に物言ふ事が許されるならば、『行人』を書いて先生は一度狂氣になり、『こゝろ』を書いて先生は一度死んだのであつた。『行人』に於て先生は、自分の中にある自己肯定の心を、ぎりぎりの所まで押し詰めた。さうして先生は、自分を待つてゐる死か狂氣か宗教かの選擇の前に、その最後の「私」を乘り越した。『こゝろ』に於て先生は、逆に、自分の中にある自己否定の心を、ぎりぎりの所まで押し詰めた。さうして先生は、自分を待つてゐる死か宗教かの選擇の前に、「天」に歸する事によつて、自分の孤獨を救はうとした。再び比喩的に物言ふならば、『行人』と『こゝろ』とは、先生内面の大震災の、悲痛な報告書である。『行人』は先生が今迄に辛苦して建て上げた殿堂が、將に崩壞しようとする刹那の光景を報告するものであり、『こゝろ』はその崩壞直後の廢墟の光景を報告するものである（先生がこの廢墟の眞ん中に立つて、礎を置き柱を建て、更に新しい家を築いて行つた經路の記錄は、『道草』以後の作品を通して我我に提供される）。この意味に於て『こゝろ』は、一人の人間の心の記錄としても、また先生の内面生活の或殊相の記錄としても、『行人』と並んで、極めて貴重な文獻を形づくつてゐるものである事は爭はれない。（岩波文庫本『こゝろ』――二・九・一五）

『明暗』の構成

『明暗』の初めに、主人公の津田が、自分の病氣を診察してくれた醫者と、話をする所がある。――

「たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄經つても肉の上がりつこはないから、今度は治療法を變へて根本的の手術を一思ひに遣るより仕方がありませんね」

「根本的の治療と云ふと」

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんです。すると天然自然割かれた面の兩側が癒著して來ますから、まあ本式に癒るやうになるんです」

……

「もし結核性のものだとすると、假令今仰しやつた樣な根本的な手術をして、細い溝を全部腸の方へ切り開いて仕舞つても癒らないんでせう」

「結核性なら駄目です。夫から夫へと穴を掘つて奥の方へ進んで行くんだから、口元丈癒したつて役にや立ちません」

……

「私のは結核性ぢやないんですか」

「いえ、結核性ぢやありません」（普及版『漱石全集』第十卷四頁）

――是は、説明するまでもなく、津田の肉體上の病氣の處置に關する、醫者の忠告であつた。「今迄のやうに穴の掃除ばかりしてゐては駄目」である、「一思ひに」「根本的の手術」をするより仕方がない、然し津田の病氣は「結核性ぢや」ないんだから、「一思ひに」「根本的の手術」をしてしまひさへすれば、必ず「本式に癒る」筈だといふのが、その醫者の意見なのである。それに聽いて、津田は入院し、その醫者から「根本的の手術」を受

ける事にする。

この一節は、そのまま讀み流してまへば、實になんでもない、ごくありふれた、日常生活の一片を描き出した、一節であるに過ぎなかつた。然し、書き殘された『明暗』の全部を讀んで、深切に『明暗』の構成を考へて見たあとで、更に飜へつてこの一節を讀み直すならば、この一節は、勿論それ自身としては、實になんでもない、ごくありふれた、日常生活の一片を描き出した、一節であつたには違ひなかつたが、然しそのままで、『明暗』一篇のキイノートの役目を勤めてゐるものである事が、誰にでもすぐ感じられるのではないかと思はれる。『明暗』の主人公の津田は、精神上にも、病氣なのである。さうしてその病氣は、「今迄のやうに穴の掃除ばかりしてゐては駄目」なのである。「一思ひに」「根本的の手術」をするより仕方がないのである。それが「結核性」であるかないかは、不幸にして『明暗』が完成されなかつたのだから、確實な所は知る由もない。然し少くともそれが「結核性」でない限りは、「一思ひに」「根本的の手術」をしてしまひさへすれば、必ず「本式に癒る」筈だつたのである。

『明暗』は百八十回、五百七十二頁で、未完結のまま、作者の死によつて、中斷された。そのうちの百五十三回、四百五十二頁、卽ち殘された全體の凡そ五分の四は、津田が、この醫者の診察を受けてから、入院する事に決心し、うちで入院の準備を調へ、入院してから退院するまでの、凡そ九日間の描寫の爲に費される。勿論その九日間の描寫は、全部、津田が自分の肉體上の病氣の爲めに受けた、「根本的の手術」とその後の經過との上に、向けられてゐる譯ではなかつた。それも無論書かれてゐない筈もなかつたが、然しその九日間の描寫の大部分は、寧ろ、その津田の精神上の病氣が、如何なる深所にその病根を持ち、如何なる徵候に於いてそれが現はれ、如何に進展し、如何に「根本的の手術」を必要とする狀態にあるかを、委曲を悉して描き出す事の上に、向けられてゐるのである。その意味では、『明暗』に於ける津田の病院生活は、津田の精神上の病氣が、深刻精到に點檢される場所――換言すれば、津田の病氣の解剖臺のやうなものであつた。

然し、もし作者の意圖が、單に津田の病狀を描くのみならず、『明暗』第一回の津田と醫者との會話によつて豫言されてゐるやうに、その病氣の上に「根本的の手術」を加へて、それが「本式に癒る」か癒らないかを實驗して見る事の上にあつたのだとすれば、津田が退院後の、三十五回、百二十二頁の空間は、是までに書き込んで來た作者の描寫の密度から言つて、到底その入口にも十分は這入る事の出來ないほどの、甚だ窮屈な空間でなければならなかつた。勿論作者が『明暗』の讀者を、筋だけで釣らうとしてゐたのでなかつた事は、言ふまでもない事である。作者の主なる目的は、此所に登場するあらゆる人間の心の中に、それぞれの流儀に於ける、醜惡なエゴイズムを發見し、それをはつきり讀者の前に提示する事によつて、讀者の深切な倫理的反省を迫がさうとする點にあつたのだとも言へる位、作者は箇箇の人間の心の、深い暗黑の中に、精刻に斬り込んで行つてゐるのである。その意味では『明暗』は、一本筋の小說ではなく、反對に、幅のある小說であつた。然し既に作者が『明暗』を、新聞の續き物として書いてゐる以上、さうして新聞の續き物は、一回一回としての山を持つのみではなく、全體としての山を持つてゐなければならないと、作者ははつきり意識してゐた以上、殊に作者から言へば、是ほど人間の醜惡なエゴイズム

を剔抉し、それを發展させ、さうしてそれをそのまま、何等かの意味で救濟の途を講ずる事なしに、放り出すといふやうな事は、倫理的に到底忍び難い事であつた筈である以上、作者が其所に一つの筋を設け、その筋の構成によつて、主人公の上に脊負はされた課題を解決し、その課題の解決によつて『明暗』全體の上に、はつきりした締め括りをつけようとするのは、作者として、當然の要求であつたと思はれる。事實またこの作者は、『明暗』の方方で、津田の精神上の病氣の上に、「根本的の手術」が加へられる必要があるといふ事、並にその「根本的手術」が何等かの方法で今にも津田の上に加へられる筈になつてゐるといふ事を豫告しつつ、幅のある『明暗』の世界を、徐徐に、その一點に集中して行つてゐるのである。津田の過去に於ける清子との戀の、いろんな人によるほのめかしや、その爲めその都度に募つて行く津田の不安や、最後に津田がその清子を訪ねて溫泉場に出向く所など、その好適例であると言つて可いであらう。さうして津田の病氣の「根本的な手術」は、正に此所から――この溫泉場行きをもつて――始められようとするのである。『明暗』第一回の敍述に即して言へば、津田は此所で初めて、自分の病氣の爲めに、「入院」しようとする事になるのである。

然も『明暗』は、津田の、その溫泉場行きをもつて、ぷすりと中斷されてしまつた。津田は、溫泉場に行つて、たつた一晩をしか過してゐない。是では筋を發展させようにも何も、その餘地がない。もし是までの作者の描寫の密度を基準とすれば、作者が自分の意圖した所のものを、氣兼なしに、心置きなく書きこなす爲には、作者は恐らく、今迄の『明暗』と同じ位の、もしくは二倍の空間が必要としたのではなかつたのかと思はれる。その位の餘地がなければ、津田の病氣の「根本的な手術」は、到底書きこなせる筈がないからである。

津田の精神上の病氣に氣が付き、まづその「根本的の手術」を津田に忠告した者は、吉川夫人であつた。夫人は、病院に見舞に來て、津田に言ふ。――

「是は私でないと面と向つて誰も貴方に云へない事だと思ふから云ひますがね。――お秀さんに智惠を附けられて來たと思つては困りますよ。また後でお秀さんに迷惑を掛ける

やうだと、私が濟まない事になるんだから、可ござんすか。そりやお秀さんも其事でわざわざ來たには違ひないのよ。然し主意は少し違ふんです。お秀さんは重に京都の方を心配してゐるの。無論京都は貴方から云へば御父さんだから、決して疎略には出來ますまい。ことに良人(うち)でもあゝしてお父さんに貴方の世話を賴まれてゐて見ると、默つて放つて置く譯には行かないでせう。けれどもね、詰り其方は枝で、根は別にあるんだから、私は根から先へ療治した方が遙かに有效だと思ふんです。でないと今度のやうな行き違ひが又屹度出て來ますよ。たゞ出て來る丈なら可ござんすけれども、そのたんびにお秀さんが遣つて來るやうだと、私も口を利くのに骨が折れる丈ですからね」(三八九頁)

――吉川夫人は、嘗て自分の監督の下に、津田と清子とを相近づかしめた。津田と清子とは、相近づきつつ、相戀した。さうして二人の戀は、既に結婚しようとするまでに、發展した。然るにその清子は、どうしたのか、津田の言葉を借りれば、「突然なんてものは疾くの昔に通り越して」「あつと云つて後を向いたら、もう結婚してゐ」て、津田を棄ててしまつた。それが津田には、どう考へて見ても、呑み込めなかつた。然し、呑み込めないまに、有耶無耶の裡に、津田は、今のお延と結婚した。「吉川夫人から言へば、津田の、清子にまだ十分の未練を持つてゐながら、その片を附けようともせずに、有耶無耶の裡に、更にお延と結婚したといふ事、もつと露骨に言へば、お延のやうな「もつと奥さんらしい奥さんに」(四一四頁)育て上げられなければならない女と結婚したといふ事が、津田の「根から先へ療治した方が遙かに有效だ」と言はれる、病根だつたのである。

吉川夫人に從へば、津田はお延を、「それ程大事にしていらつしやらない癖に、表では如何にも大事にしてゐるやうに、他(ひと)から思はれよう思はれようと掛かつてゐる」(三九二)の である。それだから津田は、自分の妹のお秀を、昔のやうに、自分の妹らしく取り扱はず、自分の父や母を、昔のやうに、自分の父や母らしく取り扱はず、何か腫物にでも觸るやうに、お延計りに冊づいてゐるから、それでお延はつけ上がり、益津田とお秀や父母やとの間を、疎隔するやうになるのである。從つて吉川夫人から言へば、津田が清子に直接にぶつかつて、何故に自分を棄てて外の男に嫁いだかの理由を明白にし、「男らしく未練の片を附けて來る」(四一〇頁)一方、それを機會に吉川夫人がお延を「もつと奥さんらしい奥さ

んに」教育しさへすれば、その病根は截り捨てられ、その結果津田は、父母の方とも、妹の方とも、更にお延の方とも、面倒がなく、圓滑に、平和に、生活が出來るやうになるに違ひなかつたのである。

その忠告に聽いて津田は、湯河原か何か、ともかく吉川夫人が調べ上げて來た、流産後の靜養の爲に、清子が行つてゐた溫泉場に、出かけて行く。

「然し、吉川夫人が解釋してゐるやうに、津田の病根は果して、清子に對する津田の未練にあつたかどうか。もしくはお延が「奥さんらし」くない點にあつたかどうか。從つて津田の病氣の「根本的の手術」は、津田が清子に會つて、「男らしく未練の片を附けて來る」事と、吉川夫人がお延を「もつと奥さんらしい奥さんに」育て上げる事とだけで、成就され得るものであつたかどうか。——是は可也問題であつた。

もつとも是は、吉川夫人の意見のみではなかつた。現に津田の妹のお秀も亦、是とほぼ同じ意見を持つてゐるのである」。お秀は病院で津田に面と向かつて、「嫂さんと一所になる前の兄さんは、もつと正直でした。少なくともつと淡泊でした。私は證據のない事を云ふと思はれるのが厭だから、有體に申します。だから兄さんも淡泊に私の質問に答へて下さい。兄さんは嫂さんを御貰ひになる前、今度のやうな嘘を御父さんに吐いた覺えがありますか」（二八六頁）と言つてゐる。また「いゝえ、證據よ、慥かな證據よ。兄さんはそれ丈嫂さんを恐れていらつしやるんです」（二八七頁）とも言つてゐる。更にまた「默りません、云ふ丈の事は云ひます。兄さんは嫂さんに自由にされてゐます。御父さんや、御母さんや、私などよりも嫂さんを大事にしてゐます」——「それ丈なら可いんです。然し兄さんのはそれ丈ぢやないんです。嫂さんを大事にしてゐながら、まだ外にも大事にしてゐる人があるんです」——「それだから兄さんは嫂さんを怖がるのです。しかも其怖がるのは——」（二九〇—二九一頁）とも言つてゐる。「怖がるのは——」でお秀の言葉が斷れたのは、恰もその時、襖がすうと開いて、その當のお延が突如として、病室に這入つて來たからである。

吉川夫人の解釋は、或はお秀のこの解釋から影響されてゐるのではないかとも考へられ

る。現に吉川夫人が津田の所へ來る前に、お秀は吉川夫人を訪問してゐるのである。然し吉川夫人は、話を截り出す前に、「お秀さんに智惠を附けられて來たと思つては困」ると、わざわざ斷つてゐる。お秀といへども、いくら興奮しても、さうさう立ち入つて、身内の恥を他人の前にさらけ出すほど、思慮分別のない女でもない筈である。結局この點に關しては、二人の意見が、たまたま一致したと見るのが、一番穩當であるであらう。

然し問題は、偶然二人の意見が一致したといふ事で、解決される問題ではなかつた。一人の解釋が、他の一人の解釋によつて支持されたとしても、正しくない解釋は、依然として正しくない解釋である筈だからである。殊に二人ともにそれぞれの意味で、エゴイズムの塊りを持つて、生きてゐる人間であつたとすれば、正しい事も言ひ得る代りには、また十分間違つた事も言ひ得るのは、言ふまでもない事である。その内容を丁寧に檢討して見るのでなければ、遽にその解釋に同ずる譯には行かない。

吉川夫人が津田に「男らしく未練の片を附けて來」いと言つた時、津田は「二つ返事で斷行を誓」はうとはしなかつた。吉川夫人の申出に對する津田の態度は、煮え切らなかつた。それを見てとつた吉川夫人は、「貴方は内心行きたがつてる癖に、もぢもぢしていらつしやるのね。それが私に云はせると、男らしくない貴方の一番惡い所なんですよ」(四一一頁)と言つた。それから二人の間に、意味の深い會話が始まつた。――

「左右(さう)かも知れませんけれども、少し考へて見ないと……」

「其考へる癖が貴方の人格に祟つて來るんです」

津田は「へえ?」と云つて驚いた。夫人は澄したものであつた。

「女は考へやしませんよ。そんな時は」

「ぢや考へる私は男らしい譯ぢやありませんか」

此答を聞いた時、夫人の態度が急に嶮しくなつた。

「そんな生意氣な口應へをするもんぢやありません。言葉丈で他(ひと)を遣り込めれば何處が何うしたといふんです、馬鹿らしい。貴方は學校へ行つたり學問をしたりした方の癖に、丸で自分が見えないんだからお氣の毒よ。だから畢竟清子さんに逃げられちまつたんで

す」

津田は又「えつ！」と云つた。夫人は構はなかつた。

「貴方に分らなければ、私が云つて聽かせて上げます。貴方が何故行きたがらないか、私にはちやんと分つてゐるんです。貴方は臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」

「左右ぢやありません。私は……」

「御待ちなさい。――貴方は勇氣はあるといふ氣なんでせう。然し出るのは見識に拘るといふんでせう。私から云へば、さう見識ばるのが取りも直さず貴方の臆病な所なんですよ、好ござんすか。何故と云つて御覽なさい。そんな見識はたゞの見榮ぢやありませんか。好く言つた所で、上つ面の體裁ぢやありませんか。世間に對する手前と氣兼ねを引いたら後に何が殘るんです。花嫁さんが誰も何とも云はないのに、自分で極りを悪くして、三度の御飯を控へるのと同じ事よ」

津田は呆氣に取られた。夫人の小言はまだ續いた。

「つまり色氣が多過ぎるから、そんな入らざる所に我を立てて見たくなるんでせう。さうしてそれが貴方の己惚れに生れ變つて變な所へ出て來るんです」

津田は仕方なしに默つてゐた。夫人は容赦なく一歩進んで其己惚れを説明した。

「貴方は何時迄も品よく默つてゐようといふんです。ぢつと動かずに濟まさうとなさるんです。それでゐて内心ではあの事が始終苦になるんです。そこをもう少し押して御覽なさいな。おれが斯うしてゐるうちには、今に清子の方から何か説明して來るだらうと思つて――」

「そんな事思つてるもんですか、なんぼ私だつて」

「いえ、思つてゐるのと同じだといふのです。實際何處にも變りがなければ、さう云はれたつて仕様がないぢやありませんか」

津田にはもう反抗する勇氣がなかつた。機敏な夫人は其所へ附け込んだ。

「一體貴方は圖迂々々しい性質ぢやありませんか。さうして圖迂々々しいのも世渡りの上ぢや一徳だ位に考へてゐるんです」

「まさか」

「いえ、左右です。其所がまだ私に解らないと思つたら、大間違ひです。好いぢやありませんか、圖迂々々しいで、私は圖迂々々しいのが好きなんだから。だから此所で持ち前の圖迂々々しい所を男らしく充分發揮なさいな。そのために私が折角骨を折つて拵へて來たんだから」（四一一―四一三頁）

――吉川夫人の津田の人格に對する批評は、辛辣を極めたものであつた。それに對して津田が、一言の抗辯らしいものも持ち出さず、言はれるままに默つてそれを聞いて居り、また言はれるままに默つて清子の所へ行く氣になつたのだとすれば、津田はその批評を一一甘受したものと解釋して可い筈であつた。若しまた津田が、內心ではそれらの批評を承服しないにも拘らず、相手が自分の父の舊友の妻君であり、もしくは自分の上役の妻君であり、その機嫌に逆らふ事は、自分の禮儀にも自分の利益にも反するといふ理由で、この際默つて相手の言ひなりになつてゐたのだとすれば、津田は倫理感情の鈍痲した、無神經な、もしくは卑屈な人間でなければならなかつた。どつちにしても、この時の津田は、卑しむべき人間だつたのである。然し吉川夫人は、津田の人格をそれほど辛辣に非難してゐるにも拘らず、さうして津田がその非難を默つて聽いてゐるのみならず、自分の言ひなりになつて清子の所へ出かけて行かうとさへもするに拘らず、それを輕蔑すべき事だとも指彈すべき事だとも感じないのである。反對に吉川夫人は、それを津田の愛すべき點だと考へ、それだから津田は清子に會つて「男らしく未練の片を附けて來」さへすれば、あとは自分がお延を「奧さんらしい奧さん」に仕立て上げる事で、十分病根を截り棄てる事が出來ると、堅く信じて疑はなかつたのである。

お秀は嘗て津田夫婦を評して、「あなた方御二人は御自分達の事より外は何も考へていらつしやらない方」「自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で餘所を向いて取り合はずにゐられる方」（三一一頁）「決して他の親切を受ける事の出來ない」方（三一二頁）だと言つた。さうしてお秀は更にそれを說明して、「自分丈の事しか考へられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失つていらつしやるといふのが、私の

意味なのです。つまり他の好意に感謝する事の出來ない人間に切り下げられてゐるといふ事なのです。あなた方はそれで澤山だと思つていらつしやるかも知れません。何處にも不足はないと考へておいでなのかも分かりません。然し私から見ると、それはあなた方自身にとつて飛んでもない不幸になるのです。人間らしく嬉しがる能力を天から奪はれたと同樣に見えるのです。兄さん、あなたは私の出した此御金は欲しいと仰しやるのでせう。然し私の此御金を出す親切は不用だと仰しやるのでせう。私から見ればそれが丸で逆です。人間として丸で逆なのです。だから大變な不幸なのです。さうして兄さんは其不幸に氣が附いていらつしやらないのです。……」（三一二頁－三一三頁）と言つた。お秀には無論お秀の我があつた。津田には、妹に對する、兄の我儘があつた。その上には津田には、自分の妻の手前、妹の好意に素直に感謝する事の出來ない、見榮もあつた。その他さまざまの要素がよつてたかつて、津田とお秀との交渉を、妙に敵對的なものにしてしまつたには違ひなかつたが、從つてお秀の言葉には、愛ではなく、寧ろ憎みの色合が濃厚に出てゐるには違ひなかつたが、然しお秀の津田に對するこの批評が、津田の急所を射拔いてゐる事は、爭はれなかつた。

津田は、自分の衷なる誠によつて、動く事のない人間なのである。津田は凡て、見榮と打算とで動いた。從つて其所に「人間として」「他の親切に應ずる資格」がなく、「他の好意に感謝する事の出來ない人間」が出來上がるのは、寧ろ當然の事であつた。作者は津田を說明して、「彼はとう〳〵自分の家とは反對の方角に走る電車に飛び乘つた。吉川の不在勝ちな事をよく知り拔いてゐる彼は、宅迄行つた所で必ず會へるとも思つてゐなかつた。たまさか居たにした所で、都合が惡ければ會はずに歸される丈だといふ事も承知してゐた。然し彼としては時々吉川の門を潛る必要があつた。それは禮儀の爲でもあつた。義理の爲でもあつた。又利害の爲でもあつた。最後には單なる虛榮心の爲でもあつた。」（二四頁）と言つてゐる。否、さういふ作者の說明を借りるまでもなく、例へば津田の、自分の舊友の小林に對する態度を見ても、津田が人間として、どんな人間であつたかは、誰にでも一目瞭然たるものがあるであらう。津田は、小林が嫌ひなのである。また小林を輕蔑し切つてゐるのである。にも拘はらず津田は、小林を敵にすると、小林が自分の體面に關するや

うな讐打をするかも知れないといふ事を、ひどく恐れてゐるのである。それだから津田は、厭厭小林とつき合ひ、厭厭小林に夕飯を奢り、厭厭小林に金を出してやるのである。此所には「男らしい」友誼も敵意もない。あるのは、見榮と打算とだけである。

この事は勢ひ津田を、裏表のある人間にする。同時にこの事は勢ひ津田を、「彼は腹の中で、嘘吐きな自分を肯ふ男であつた。同時に他人の嘘をも根本的に認定する男であつた。それでゐて少しも厭世的にならない男であつた。寧ろ其反對に生活する事の出來るためには、嘘が必要になるのだ位に考へる男であつた。彼は、今迄斯ういふ漠然とした人生觀の下に生きて來ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はただ行つたのである。」（三三〇頁）と作者が敍述してゐるやうな、他人をも自分をも、根本の意味では信じる事のない、その故にまた、他人をも自分をも、根本の意味では愛する事のない、さうしてそれを少しも寂しい事と思はない、寧ろ他人をも自分をも、人間としてではなく、物として取扱ふ事が、反つて賢明なやり方であるとさへ考へてゐるらしい、憫れむべき人間にする。同時にその事は勢ひ津田を、「向うの短所ばかりに氣を奪られ」「其裏側へ暗に自分の長所を點綴して喜」ぶ、從つて「自分の短所には決して思ひ及ばなかつたと同一の結果に」（三二九頁）しか歸著しない、無反省な、思ひ上がつた、我儘勝手の、そのくせ内心は少しも腰の据つた所のない、輕薄な人間にする。――一口に言へば、津田は、誠のない、誠を知らない、又それを少しも不幸な事と思はない、人間だつたのである。

吉川夫人は津田を評して「男らしくない」と言つた。「學校へ行つたり學問をしたりした」癖に「丸で自分が見えないんだから」「だから畢竟清子さんに逃げられちまつたんだ」と言つた。「臆病」だと言つた。「見識ばるのが取りも直さず」「臆病な所なん」だと言つた。「そんな見識はただの見榮」もしくは「上つ面の體裁」で、「世間に對する手前と氣兼ねを引いたら後に何が殘る」かと言つた。「色氣が多過ぎるから、そんな入らざる所に我を立てゝ見たくなるん」だと言つた。それが「貴方の己惚れに生れ變つて變な所へ出て來るん」だと言つた。「貴方は何時迄も品よく默つてゐ」て、そのくせ「内心ではあの事」を「始終苦に」してゐるんだと言つた。さうして「おれが斯うしてゐるうちには、今に清

子の方から何か説明して來るだらう」位の、蟲の可い事を考へてゐるのだと言つた。――是は一一正にその通りである。その表現に問題はあつても、吉川夫人が指摘してゐる津田の人格の弱點は、吉川夫人の指摘した通り、誰からも認められ得る、津田の人格の弱點だつたに違ひなかつた。さうして其所にこそ、津田の精神上の病氣の、「根本的の手術」を必要とするものはあつたのである。

然し吉川夫人は、津田の病氣の「根本的の手術」を必要とするものが、恰もその點にあるのだといふ事には、少しも氣がつかなかつたのである。さうして病根は、津田が清子に會つて、「男らしく未練の片を附けて來」さへすれば、ひとりでに除かれるものだと考へてゐた。もしくは是を機會に、お延を、自分の好みに合つた「奥さんらしい奥さん」に仕立て上げさへすれば、病根は最も容易に除かれるものだと信じてゐた。更に忖度すれば、吉川夫人は、寧ろ病根はお延にあると考へ、お延を「教育」する爲めだけに、津田を清子の所へやらうとした形跡さへあるのである。

然し是は明らかに、吉川夫人の誤算であつた。津田の病根は、津田の内にあつて、お延にあるのではなかつた。從つて津田が清子に會つたとしても、吉川夫人がお延を「教育」したとしても、津田が自分で、内なる病根に氣づいて、それを截り棄てようとしない限り、津田の病根が截り棄てられる事がないのは、明白であつた。その事に氣がつかないのは、吉川夫人の「放漫」であつた。もしくは吉川夫人のエゴイズムであつた。

吉川夫人から言へば、津田は愛すべき男だつたのである。お延は蟲が好かない女だつたのである。それだから吉川夫人は、津田の弱點は大目に見、お延の弱點は誇大し、自ら起つて、お延を「教育」しようとするのである。――その點に於いては、お秀も同然であつた。お秀は、津田とお延とを自分の前に置いて、あなた方は「人間として」「他の親切に應ずる資格」のない、「他の好意に感謝する事の出來ない人間」であると、痛切に相手の急所をえぐつて置きながら、事實は兄をさういふ人間にしたのは、お延のせゐであるとしか考へてゐないのである。此所には、物の姿を正しく認識する事の出來ない我執と、物の輕重を正しく辨別する事の出來ない偏見とがあつて、鋭い吉川夫人をも、眞面目なお秀をも、單なる小姑のやうな、依怙贔屓の多い人間にしてしまつてゐるのである。

さういふ吉川夫人の書いた筋書によつて、津田の病根が根絶されるだらうとは、恐らく何人も想像する事が出來ないに違ひない。然も、さういふ吉川夫人の書いた筋書によつては、吉川夫人が解釋した、津田の病根さへ、根絶する事が出來るか出來ないか、全然疑問であつたとすれば、津田の溫泉場行きには、元來どういふ意味があり得るのであるか。又それがどうして津田の精神上の病氣の、「根本的の手術」の、入口であり得るのであるか。

溫泉場へ出かけて行くに當つて、津田には「三つの途があつた。さうして三つより外に途はなかつた。第一は何時迄も煮え切らない代りに、今の自由を失はない事、第二は馬鹿になつても構はないで進んで行く事、第三卽ち彼の目指す所は、馬鹿にならないで自分の滿足の行くやうな解決を得る事。」（五一九頁）であつた。――津田の現在の狀態が、果して「自由」といひ得るものであるかどうかは、疑問である。然し津田は、ともかくそれを「自由」と呼び、且つその「自由」を愛してゐる。また津田の「馬鹿」と呼ぶものが、果して「馬鹿」であるかどうかも、亦疑問である。然し津田はそれを「馬鹿」と呼び、且つ

その「馬鹿」を輕蔑してゐる。それだから津田は、溫泉場に行つて、清子に會つて、自分の「自由」を失はず、「馬鹿」にならないで、さうして「自分の滿足の行くやうな解決を得る事」を希望してゐるのである。是は、津田の是までの生き方から言へば、いかにも津田らしい希望であつたには違ひなかつたが、然し津田が、是までの津田で清子にぶつかる限り、それが何等かの意味で、津田の爲めの「根本的の手術」になり得るだらうとは、到底期待され得ない事であつた。

勿論津田は溫泉場の宿屋に著く手前の、暗い夜の馬車の上で、もしくは宿屋に著いて、風呂場の湯槽に浸つてゐて、さまざま、平生の津田らしからざる心持を經驗してはゐる。殊に津田は、夜更けの廊下で、姿見の前で、清子と顏を合せたあと、もしくは清子にさうしてめぐ會りふまでの間、「殆ど夢中歩行者（ソムナンビュリスト）のやうな」「常軌を逸した心理作用の支配を受けて」（五三一頁）行動してはゐる。然し愈清子と會つて話をする日の津田は、既に平生の津田に復つてゐるのである。もつともその、清子と對座した津田は、「正に居常お延に對する時の用意を取り忘れてゐた」（五六〇頁）津田であり、その意味で、技巧なしに自然に振

舞ひ得る津田であつたには違ひなかつた。然し相手の清子は、津田が昔清子を不滿足に感じた通りの、「綏漫」で、「單純」で、「淡泊」で、津田が「何もかももう忘れてゐるんだ、此人は」（五六六頁）と思はざるを得なかつたほど、それほど津田からは、離れてしまつた女でしかなかつた。事實清子はもう、「宅から電報が來れば、今日にでも歸らなくつちやならないわ」（五七二頁）と、平氣で津田に言ひ得るほど、津田とは、あかの他人になつてゐるのである。かういふ女を相手として、津田が動ける筈がない。また假令津田は動いたとしても、清子は決して動かなかつたに違ひない。

津田の病根は、この方面から「根本的の手術」を受ける見込みは、到底あり得ないのである。

津田が溫泉へ出かけて行く前、津田は、朝鮮に赴任するといふ小林と會食する。前にも言つたやうに、津田と小林とはお互に輕蔑し合つてゐるのである。それがこの會食の際の會話で、可也露骨に現はれる。その中で小林が言ふ。——

「だから先刻から僕が云ふんだ。君には餘裕があり過ぎる。其餘裕が君をして餘りに贅澤ならしめ過ぎる。其結果は何うかといふと、好きなものを手に入れるや否や、すぐ其次のものが欲しくなる。好きなものに逃げられた時は、地團太を踏んで口惜しがる」

「何時そんな樣を僕がした」

「したともさ。それから現にしつゝあるともさ。それが君の餘裕に祟られてゐる所以だね。僕の最も痛快に感ずる所だね。貧賤が富貴に向つて復讐をやつてる。因果應報の理だね」

……

「君は自分の好みでお延さんを貰つたらう。だけれども今の君は決してお延さんに滿足してゐるんぢやなからう」

「だつて世の中に完全なもののない以上、それも已むを得ないぢやないか」

「といふ理由を附けて、もつと上等なのを探し廻る氣だらう」

「人聞きの惡い事を云ふな、失敬な。君は實際自分でいふ通りの無賴漢だね。觀察の下

卑て皮肉な所から云つても、言動の無遠慮で、粗野な所から言つても」

「さうしてそれが君の輕蔑に値する所以なんだ」

「勿論さ」

「そらね。さう來るから畢竟口先きぢや駄目なんだ。矢つ張り實戰でなくつちや君は悟れないよ。僕が豫言するから見てゐろ。今に戰ひが始まるから、其時漸く僕の敵でないといふ意味が分るから」

「構はない。擦れつ枯しに負けるのは僕の名譽だから」

「强情だな。僕と戰ふんぢやないぜ」

「ぢや誰と戰ふんだ」

「君は今既に腹の中で戰ひつゝあるんだ。それがもう少しすると實際の行爲になつて外へ出る丈なんだ。餘裕が君を煽動して無益の負戰をさせるんだ」（四七五—四七六頁）

——小林の人間には、妙な僻みがあつた。その僻みが津田を、小林から反撥した。その上津田は小林から、ある意味で自分の弱點を握られてゐた。それが津田をして小林を怖れ

しめ、且つ津田を小林から離れられないものにした。それが小林に氣づかずにゐられない筈がない。僻みのある小林は津田に對して、必要以上に、露惡的に、いやがらせを言ふ態度に出ざるを得なかつた。

然し小林の津田に對する批評には、正鵠を射たものがある事は、爭はれなかつた。津田に餘裕があり過ぎ、その餘裕が津田を贅澤ならしめ過ぎるといふのなどが、それである。小林は「餘裕」といふ言葉を使つてゐるが、然しその言葉には、「貧賤が富貴に向つて復讐」する意味がある。さうして小林がその言葉によつて意味しようとしたものは、吉川夫人が、或は「臆病」と言ひ、或は「見識ばる」と言ひ、或は「上つ面の體裁を氣にする見榮坊だ」と言ひ、その他「色氣が多過ぎて入らざる所に我を立てて見たくなる」のだとか、「それが變な己惚れに生れ變る」のだとか、さまざまな言葉を使つて批評したものの根柢になるもの——眞面目で、謙遜で、足るを知るといふやうな心とは、凡そ反對なものが籠められてゐるやうなのである。ただ吉川夫人は、津田をさう批評して置きながら、津田を飛び越して、お延の「教育」へと急がうとした。然るに小林は、津田をさう批評する事によつて、

津田を輕蔑し、もしくは津田を憎惡した。

小林は、それだから、「そらね、さう來るから畢竟口先ぢや駄目なんだ。矢つ張り實戰でなくつちゃ君は悟れないよ。僕が豫言するから見てゐろ。今に戰ひが始まるから、其時漸く僕の敵でないといふ意味が分るから」といひ、「君は今既に腹の中で戰ひつゝあるんだ。それがもう少しすると實際の行爲になつて外へ出る丈なんだ。餘裕が君を煽動して無益の負戰をさせるんだ」といひ、更に最後には「よろしい、何方が勝つかまあ見てゐろ。小林に啓發されるよりも、事實其物に戒飭される方が、遙かに覿面で切實で可いだらう」(四九九頁)といふやうな、呪詛に似た言葉をもつて、津田と袂を分つのである。

然も『明暗』の構成の上から言つて、此所の小林の言葉は、殊にその「實戰」といひ、「無益の負戰」といひ、「事實其物に戒飭される」といふ言葉は、可也重要な言葉であつたやうに思はれる。吉川夫人の「根の療治」は、直接には、少しも津田の病根に觸れるものではなかつたが、小林のこの言葉は、憎惡を籠めて言ひ放たれた言葉ではあつても、直接

に、又適切に、津田の病根に觸れた言葉だつたからである。然もこれらの言葉は、『明暗』の世界に於いて、近き將來に於いて、津田の病氣の「根本的の手術」が、行はれるに違ひない事を、讀者に豫感させるものを持つてゐるからである。

勿論是は、小林の「僕が豫言するから見てゐろ。今に戰ひが始まるから」といふ言葉から誘き出される豫感ではなかつた。小林の豫言的能力を信じる信じないに論なく、既にそれまでの内に、何事かが津田の上に起らなければならない狀勢に、『明暗』の世界が動いて來てゐるからである。吉川夫人の「根の療治」で一度刺戟されて間もなく消失した貌になつてゐた豫感が、津田と小林とが會ふ筈になつてゐた日の、津田とお延との會話(後出)によつて再び呼び醒され、更に津田と小林との會話によつて、一層明らさまに呼び活けられて來るのである。

「然し、津田が溫泉場に清子を訪ねる事が、津田の病氣の「根本的の手術」に、直接には恐くなんの關はりもあり得ないとすれば、その小林の言葉によつて張られた、「根本的の手

術」の伏線は、何所にどう落ちつくのであるか。――それは當然お延の上に、特に吉川夫人によつて企てられてゐるお延の「教育」の上に、落ちつく筈だつたのである。

「津田が入院してゐる留守中に、お延の所へ小林が、津田の古外套をもらひに行つて、お延にさんざ厭な思ひをさせた事がある。」小林はその外套を著て見た上で、そのまま、またお延の前に胡座をかいた。――

「奥さん、人間はいくら變な著物を著て人から笑はれても、生きてゐる方が可いものなんですよ」

「さうですか」

お延は急に口元を締めた。

「奥さんのやうな窮つた事のない方にや、まだ其意味が解らないでせうがね」

「さうですか。私はまた生きてて人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好いと思ひます」

小林は何も答へなかつた。然し突然云つた。

「難有う。御蔭で此冬も生きてゐられます」

彼は立ち上がつた。お延も立ち上がつた。然し二人が前後して座敷から縁側へ出ようとする時、小林は忽ち振り返つた。

「奥さん、あなたさういふ考へなら、よく氣を附けて他に笑はれないやうにしないと不可ませんよ」（二四五頁―二四六頁）

――それから小林は、津田の過去に、何かがあるやうなないやうな、然しお延がそれを追求しようとすればするほど、實はなんにもなかつたのだと言つて、冗談にしてしまふやうな、不得要領の事を言つて歸つて行つた。

「津田は、津田と小林との會話にもあるやうに、お延との結婚生活に於いて、お延に決して滿足してゐなかつた。同樣にお延も亦、津田との結婚生活に於いて、津田に決して滿足してゐなかつた。然しお延の不滿足は、自分が一所懸命に津田を愛してゐるのに、津田は何か隔てを置いて、眞率に自分を愛してくれないといふ點にあつた。然もお延は、清子の

やうに、津田を頼りないと思つても、津田を棄てて外に嫁ぐといふやうな自由は、もう持つてゐなかつた。その上お延にはお延の、見榮もあれば、誇もあつた。叔父・叔母の反對にも拘はらず、お延は、あの人となら理想的な結婚生活が送り得られると、信じ、且つ言ひ張り、無理に、强情を張るやうにして、津田の所へ來てゐるのである。今更お延は、何所へも、さういふ意味での自分の寂しさを、訴へてやれた義理ではなかつた。お延は、齒を喰ひしばつて、一人で今の寂しさに堪え通さなければならなかつた。然もお延は、自分が相手を愛してゐる以上、自分はどうしても自分の愛の力で、その相手に自分を愛させるやうにしなければならないと考へてゐるのである。また女としてそれが出來ないのは、女の恥辱であると、考へてゐるのである。「私はまた生きてて人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好いと思ひます」といふお延の言葉は、その勝氣な、思ひきつて大膽不敵な事をもしかねまじき、お延の意氣を表白する。自分の津田に注ぐ愛情が、津田によつて裏切られ、自分が他から笑はれてゐると氣がついた時、お延は必ず死ぬ——もしくは死に得る女だつたのである。

そのお延の耳の側で、清子の話を仄めかす警鐘が、先づ小林によつて、鳴らされた。お秀が津田の病室で口走つた事も、恐らくお延の耳には、這入つてゐるに違ひない。それらの材料によつて、津田の精神上の病氣といふ事には思ひ到る事の出來ないお延が、津田の自分に示す隔ては、津田が自分以外に別に戀人を持つてゐるせゐに違ひないと想像するのは、極めて自然の事である。然しお延には、見榮もあれば誇もあつた。その上お延には、思慮もあれば分別もあつた。從つて、不確實な嫌疑だけで、それを津田の前に言ひ出し、身をかはす事の上手な津田から、綺麗にはぐらかされてしまふほど、お延は馬鹿ではなかつた。お延は、小林によつて仄めかされ、お秀によつて更に確實にされた事實が、更に具體的な、眼で見、手で觸る事の出來るやうな、はつきりした姿をとつて來るまでは、膏汗をたらすやうな思ひをしてまでも、じつと待ち續けてゐようと、決心するのである。お延は津田に、一言もその事に就ては、口を利かなかつた。

津田が小林と會食する爲に出かける時、津田とお延とが話をする。——

「御前は見掛けに寄らない勇氣のある女だね」

「是でも自分ぢやあると思つてるのよ。けれどもまだ出した例がないから、實際何の位あるか自分にも分らないわ」

「いや御前に分らなくつても、おれにはちやんと分つてるから、それで澤山だよ。女の癖にさう無暗に勇氣なんか出された日にや、亭主が困る丈だからね」

「ちつとも困りやしないわ。御亭主のために出す勇氣なら、男だつて困る筈がないぢやないの」

「そりや難有い場合もたまには出て來るだらうがね」と云つた津田には固より本氣に受け答へをする積りもなかつた。「今日迄それ程感服に値する勇氣を拜見した覺もないやうだね」

「そりや其通りよ。だつて些とも外へ出さずにゐるんですもの。是でも内側へ入つて御覽なさい。なんぼあたしだつて貴方の考へていらつしやる程太平ぢやないんだから」

「可いから、今に見ていらつしやい」

「何を」と訊き返した津田は少し驚かされた。

「何でも可いから、今に見ていらつしやい」

「見てゐるが、一體何だよ。」

「そりや實際に問題が起つて來なくつちや云へないわ」

「云へないのはつまり御前にも解らないといふ意味なんぢやないか」

「えゝさうよ」

「何だ下らない。それぢや丸で雲を摑むやうな豫言だ」

「所が其豫言が今に屹度中るから見ていらつしやいといふのよ」

津田は鼻の先でふんと云つた。それと反對にお延の態度は段々眞劍に近づいて來た。

「本當よ。何だか知らないけれども、あたし近頃始終さう思つてるの、何時か一度此御肚の中に有つてる勇氣を、外へ出さなくつちやならない日が來るに違ひないつて」

「何時か一度？　だから御前のは妄想と同じ事なんだよ」

「いゝえ生涯のうちで何時か一度ぢやないのよ。近いうちなの。もう少ししたらの何時か一度なの」

「益惡くなる丈だ。近き將來に於て變勇なんか亭主の前で發揮された日にや敵はない」

「いゝえ、貴方のためによ。だから先刻から云つてるぢやないの。夫のために出す勇氣だつて」

眞面目なお延の顏を見てゐると、津田も次第々々に釣り込まれる丈であつた。彼の性格にはお延ほどの詩がなかつた。其代り多少氣味の惡い事實が遠くから彼を威壓してゐた。お延の詩、彼の所謂妄想は、段々活躍し始めた。今迄死んでゐるとばかり思つて、弄くり廻してゐた鳥の翅が急に動き出すやうに見えた時、彼は變な氣持がして、すぐ會話を切り上げてしまつた。（四五三―四五五頁）

――直覺力の鋭い、またそれをある意味では得意ともしてゐるお延は、小林から、耳の中に滴し込まれた毒液を、さうして更にお秀によつて廣げられた、それからの傷を、じつと堪らえながら、何かこの爲めに、自分の津田に對する愛が如何に深いものであるかを、津田にはつきり思ひ知らせる日が、きつと來るに違ひない、また屹度來させずには措かないと思つてゐるのである。いかに鋭いお延の直覺力といへども、それが、何日どういふ形で現はれるかは、はつきりとは分からなかつた。然し、何日かは一度、近いうちに、それが來さうな氣はしてゐるのである。また來させずには措かないといふ、念力のやうなものも、籠つてゐるのである。津田に、一言もその事に就いては口を利かなかつた、お延の苦悶は、かういふ形になつて、津田の前に現はれ始める。

「丁度其所へ出て來る筈になつてゐたのが、吉川夫人の、所謂お延の「教育」だつたのである。吉川夫人はお延の事を、「あの方は少し己惚れ過ぎてる所があるのよ。それから內側と外側がまだ一致しないのね。上部が大變丁寧で、御腹の中は確りし過ぎる位確りしてゐるんだから。それに利巧だから外へは出さないけれども、あれで中々慢氣が多いのよ」（四一五頁）と言つてゐる。それをみんな取り去つてしまふのが、吉川夫人の、所謂お延の「教育」であつた。勿論その何所が津田の結婚生活の障碍となつて、津田を不幸にしてゐるかなどと、吉川夫人は考へない。ただ吉川夫人にはお延の、吉川夫人にはさう見える所

が、氣に入らないのである。それだから吉川夫人は、この際、それをみんな取り去つてしまはうといふのである。その爲め吉川夫人は、津田を清子の所へやらうとする。さうして津田が清子の所へ行くといふ事が、お延にとつて、「是程好い療治はない」（四一四頁）といふのが、吉川夫人の見解だつたのである。

津田が心配して、その「療治」の手段や方法を訊いて置かうとしたが、吉川夫人は、「心配する事があるもんですか。細工はりう〳〵仕上げを御覽じつて云ふぢやありませんか」（四一五頁）と答へただけで、あとの事はなんにも言はなかつた。津田は「大體の上で夫人の實意を信じて掛かつ」（四一五頁）て、そのままで、清子の所へ出かけて行つた。然し我我讀者から言へば、――吉川夫人とお延との心の關係を知り、吉川夫人の人間を知つてゐる、我我讀者から言へば、是ほど不安心な「實意」もなかつたし、また是ほど不安心な「療治」もなかつた。我我から言へばこの「療治」は、正に、無反省な人間が、相手の世界には少しのアインフュールンクをも持つ事なしに、いきなり頭からおつかぶせにかかる、荒「療治」だつたに違ひなかつたからである。かういふ夫人の「實意」を「大體の上で」信じてかかつた津田は、平素の用心深さに似ず、「放漫」至極であつたと言つて可い。

「療治」を加へる人間が、吉川夫人であり、「療治」を受ける人間がお延であり、殊にその「療治」そのものが、お延に、津田が清子の所に行つてゐるといふ事を確實に證明する事によつて、もしくはそれを條件として、加へられる「療治」であつたとすれば、その結果がどういふものになるべきであつたかは、何人にも想像するに難くない筈である。お延は、「何時か一度此御肚の中に有つてゐる勇氣を、外へ出さなくつちやならない日が來るに違ひない」と言つてゐる。またお延は、「生きてて人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好い」と言つてゐる。さういふ「療治」の結果、何か端睨すべからざるものが、――當の吉川夫人をも、もしくは津田をも、あつと言つて瞠目せしめるものが、お延によつて示されるに違ひない事は、言ふまでもない事である。

勿論その吉川夫人の「療治」がどういふ方法で施こされ、それを又お延がどう受けとるかの、具體的な所は、『明暗』が未完結に終つてゐる以上、今日の我我には、窺ひ知るべか

らざる境地であつた。然し『明暗』の構成を考へ、作者が筋の進行の辻辻で、私かに張つて行つた伏線を辿つて行くと、『明暗』の筋は、どうしても、さういふ發展の經過をとらなければならない筈のやうに、私には思はれる。さうして『明暗』の最後は、小林が豫言したやうに、津田が、「覿面」に「切實」に、「事實其物に戒飭される」事によつて結ばれるのである。「事實其物」とは、言ふまでもなく、吉川夫人から「療治」を受けたお延が、津田の爲に、一生に一度の、肚の中に貯へてゐた勇氣を、ありつたけ出して見せる、行爲をさす筈であつた。換言すれば、津田の精神上の病氣は、このお延の行爲によつて、初めて「根本的の手術」を受ける事になるのである。

その意味で津田の溫泉場行きは、直接には、津田の病氣の「根本的の手術」ではあり得なかつたが、然しこの溫泉場行きが、その眞正の意味での「根本的の手術」を引き出すのに、缺くべからざる一つの重要な條件であつたとすれば、間接には、その「根本的手術」の一部を構成するものと見る事も、決して不合理の事ではなかつたのである。ただ「根本的の手術」の一部を構成するとは言つても、既にそれが、間接なものであつた以上、その溫泉場行きの描寫の、眞正な意味での「根本的な手術」の描寫に對して占め得る位地が、ほんのそのイントロダクションのやうなものでしかあり得ない事は、言ふまでもない。――私が曩に、津田の溫泉場行きは、津田の病氣の、「根本的の手術」のほんの入口をしか書いてないものであり、作者の、是までに示した描寫の密度から言へば、『明暗』は、今まで書かれたものと同じか、もしくは倍の長さを持つのでなければ、作者は、自分の意圖した所のものを、氣兼なしに、思ふさま、書きこなす事が出來なかつたに違ひないと言つたのは、正にこの點をさすのである。

ドストイェフスキの向ふを張つて深刻精到な心理解剖を試みようとした作者は、命さへ續いたら、恐らくそれを遂行したのに違ひないと思はれる。作者は、『明暗』の世界に頭を浸ける事が、不愉快だ不愉快だとは言つてゐたが、然し創作する事その事には可也愉快を覺えてゐたらしく、どつしりと腰を落ちつけて、發病の前日までは、毎日の午前を『明暗』の執筆にあてて、一日もそれを怠る事がなかつたのである。作者が是を創作する事に如何なる歡びを感じてゐたかに就いては、特に大正五年八月五日發、和辻哲郎宛の作者の書翰

（第十九卷四九九頁）が、是を明瞭に物語つてゐる。（『文學』――一〇・三・五）

漱石先生

今日は漱石先生の祥月命日であります。是非私に先生の話をしろといふので、出て參りましたが、題は『漱石先生の思ひ出』となつてゐる。然し實は私は此所で、よく思ひ出話につきものになつてゐる、先生の逸話のやうなものを、思ひ出し思ひ出しお話しようとは思つてゐないのです。それにはまた別に、然るべき人もゐる筈です。私は、先生の人となりの内で、先生の著しい特徴のやうなものを、一つ取り出して來て、それに就いてお話しようと思ふのであります。先生の先生らしい所を委曲を悉して述べると可いのでありますが、三十分くらゐの餘裕では、そんないろんな事を、委曲を悉してなぞ、到底述べてはゐられないのです。

先生は、生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂を持つてゐた人でありました。それだけに先生は、生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しいものを愛し、反對に、お世辭をつかつたり、體裁をつくろつたり、ごまかしたり、嘘をついたり――あらゆる意味で、純粹でないもの、喰はせもの、まやかしもの、贋ものを憎んでゐました。よく先生は、あの男と向き合つて坐つてゐると、あの男の腹の中が透いて見える――透明な感じがして好い心持だとか、あの男と向き合つて坐つてゐても、あの男の腹の中が透いて見えない――透明な感じがしないから厭だとか言つてゐましたが、先生には、行住坐臥、この生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しいものが、問題になつてゐたのでした。先生は、一口にいふと、この生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しいものの爲に、その反對の、純粹でないもの、喰はせもの、まやかしもの、贋ものなどを相手に、一生の間、戰ひ通した人であつたと言つて可いのであります。

その事をお話するのに、先生の小供の時分の事で、大變都合の好い例がある。まづそれを二つばかりお話して、それから先へ進む事にしたいと思ひます。

先生は、東京の牛込で生れ、生れ落ちるとすぐ里子に出され、間もなく其所からは取り戻されたが、然し三つの年には又、淺草へ養子にやられました。ところがその養家先で、養父と養母との間に、妙などたごたが持ち上がつたりした爲に、先生はまた實家へとりもどされた。是は先生の八つの年の事であります。この話は、先生がまだ養家先にゐるうちの事ですから、多分、先生の六つか七つか位の事ではないかと思はれます。

先生の養母が、ある日、客と話をしてゐるうちに、あるよその女の人の噂が出たのださうです。その時養母は、傍でとても聞いてゐられないやうな言ひ方で、その人の惡口を言つたと言ひます。所が偶然にも、客の歸つたあとで、その噂をされた當人が、養母をたづねて來たのださうです。すると養母は、つい今し方とは打つて變つて、その人に、實にそらぞらしいお世辭をつかふのみならず、仕舞には、たつた今誰さんとあなたの事を大變褒めてゐた所だつたなどと、餘計な嘘までつき始めたのださうです。そばに坐つてゐて、前からの話を知つてゐた先生は、それをきくや否や、不愉快で不愉快でたまらなくなつて、到頭その客の前で、養母に向かつて、あんな嘘をついてらあと、養母の面皮を剝ぐやうな

事を、言つたのださうであります。先生はあとで養母から大變に叱られ、お前みたいな子と一緒にゐると、顔から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない、と言はれたといひますが、その時先生は、養母の顔から早く火が出りや可い位に思つたといふ事が、先生の『道草』の中に書かれてゐます。

もう一つの話は、先生が牛込の實家に歸つて來てから後の話ですから、少くとも先生の八つ以後の話である筈です。當時先生は、實家のお父さんお母さんの事を、おぢいさん・おばあさんと呼んで居り、事實また先生は、當時、それが自分の、ほんとのおぢいさん・おばあさんだと計り、思ひ込んでゐたのださうであります。是は恐らく養家先の父母になじませる爲に、さうしたものに違ひないのでありますが、然し先生のお母さんは、先生の生れる時に、こんな年になつて子供を生むのは恥かしいと言はれたと言ひますから、假令先生を養子に出さなかつたとしても、實家のお父さんやお母さんは、さうした名前で、先生に、自分達を呼ばせたかつたのではないかとも、想像されます。それはともかく先生は、實家に歸つて來ながら、それを實家とも知らず、自分の生みの親のそばに來てゐながら、それを自分の生みの親とも知らず、おぢいさん・おばあさんでその日その日を暮してゐたのであります。

然し當時の先生は、淺草から牛込へ移つて來て、なぜか非常に嬉しかつたのださうです。さうしてその嬉しさが、誰の目にも著く位、著しく外へ現はれたのださうです。多分それがいぢらしかつた爲だらうと思ひますが、ある晩先生がひとりで座敷に寢てゐると、女中が枕元へそつとやつて來て、先生をよび起し、あなたがおぢいさん・おばあさんと思つてゐらつしやる方は、ほんとはあなたのお父さんとお母さんだ、さつき、大方そのせゐであんなに此方のうちが好きなんだらう、妙なものだなと、二人で話してゐらつしやる所を聞いたから、教へてあげます、誰にも言つちやいけませんよと、そつとその「ほんとの事」を教へてくれたと言ひます。先生には是が、大變に嬉しかつたのださうです。然しそれは、事實を教へてもらつたから嬉しかつたといふのではなく、その下女が單に自分に親切だつたのが嬉しかつたのだと、先生は『硝子戸の中』に書いてゐます。

生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂を持つてゐた先生は、お世辭をつかつたり、

體裁をつくろつたり、ごまかしたり、嘘をついたりする事を憎んで、四十年もその上も昔の經驗でも、かういふ風に、手にとるやうに鮮やかに覺えてゐるとともに、また、生一本な、雜り氣のない、純粹な、美しい、他の親切に對する感激をも、それが四十年もその上もの昔の出來事であつても、かういふ風に手にとるやうに鮮やかに覺えてゐたのであります。

嘘も方便だといふ諺みたいなものも出來上がつてゐるほど、多くの人は、この世の中に生きて行く上に、嘘も亦必要であると、考へてゐるのであります。從つて多くの人は、自分も嘘をつくものであるし、人も嘘をつくものであると、思つてゐる。人を見たら泥棒と思へなどと、多くの人は、無闇に人を信用すると、とんだ目に遭ふ、人は疑つてかかるべきものだと、教へこまれて育つて來、また教へこんで育てて行かうとする傾向を持つてゐるのであります。さういふ世の中に住んでゐて、先生のやうに、純粹なものを愛し、純粹でないものを憎む點で、少しも妥協しようとしない人間は、多くの場合、世の中が厭になり、人間が厭になり、――一口に言へば、厭世的にならざるを得ない。殊に先生は、田舍

者からは、活き馬の眼を抜くとさへ信じられてゐた江戸に生れて、いろんな點で腐敗し、墮落しきつた、御一新前後の江戸の家庭の空氣の中に育つたのです。先生が、それに對抗して、その魂を護りおほせる事は、生やさしい仕事ではなかつたに違ひない。先生は、早くも物心のつく二十二三の、高等學校時代から、可也厭世的な人生觀を持つやうになつてゐました。是は丁度その時分に、正岡子規に宛てた先生の手紙をお讀みになると、かなりな程度まで、具體的に窺ひ知る事の出來る筈の事であります。

然し先生は、さういふ風に、段段厭世的になつて行かざるを得なかつたとは言つても、根本に於いて、人間を愛し、人間を信じる心持は、決して失ふ事がなかつたのであります。是は先生が厭世の極、自殺しなかつたのでも分かると、いふ事も出來るかも知れないし、また少しも皮肉な冷酷な世の中の見方をしなかつたのでも分かると、いふ事も出來さうでありますが、然し、それよりも何よりも、先生が、どういふ場合にも、自分の生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂を、傷つける事なしに、護り通す事が出來たといふ事、並びに先生の人生に於いて、假令たまではあつても、先生の魂の上に、同じやうに、生一

本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂が、影を落して、先生の息苦しい世界に、歡びと寛ろぎと慰めとを與へて、先生の、先生自身の魂を護り通す仕事の嶮しさを、柔らげた爲であると思はれる。それは例へば、西洋の文藝などを讀んで、その中に自分の魂が求めてゐるものを發見し、それに共鳴して歡び樂しむといふのでも可いのではありますが、さうでなくても、例へば先生にほんとのお父さんお母さんを敎へてくれた女中のやうな、現實の事實の一つでも、先生の眼の前に、可也に廣い、人間を愛し人間を信じる事の可能性の展望を、擴げて見せる事が出來たのであります。勿論さういふ事は、沙漠の中のオアシスかなぞのやうに、極めてポツリポツリとしか、先生の人生の行手に、横はつてゐなかつたのかも知れません。然しそれだけでも先生はなほ、それによつて、寒寒とした自分の生活を暖め、元氣を回復し、更に自分の旅程を續ける事が出來たのであります。

然し、一方から言ふと、自分の中に美しいものが充ち充ちて居り、それに外から響を合せるものがたまにしかなく、然も自分の周圍は、自分の中の美しいものの爲めに、一層荒涼たる沙漠にしか見えなかつたとすれば、人は、少しでもこの荒涼たる沙漠を住み心地の可いものにする爲に、それに鍬を入れ、草木を植ゑ、出來るだけ多くのオアシスを、自分の手で創造したくなる筈ではないかと思はれます。さうでもしなければ、自分はその荒涼の爲に、息の根もとめられさうな感じを受けるに違ひないからであります。その上、人が、根本の意味で人間を愛し、人間を信じてゐるとすれば、さういふ人間に働らきかけ、さういふ人間をして、生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂を尊敬させ、尊敬する事によつて所有させ、かくしてさういふ人間を高みに引き上げようと努力する事は、假令その實現の日は遠かつたとしても、既にその事の可能が信じられる限り、その人にとつて、それが自分の天職ででもあるやうな、必然として感じられて來る筈ででもあります。

先生は西洋から歸つて來て、自分の中に鬱屈したものを、『猫』によつて吐き出してしまふ事が出來た時、先生は、何か非常に明るい、初めて生き甲斐があるやうな心持になりました。さうしてその後、矢繼早に、自分の頭の中の世界に表現を與へつつ、到頭敎師としての自分のそれまでの生活を棄てて、作家としての道を踏み出しました。先生は、荒涼たる沙漠の中に、自ら鍬を打ち込んで、オアシスを創造しなければゐられなかつたのであり

ます。さうしてこのオアシスの創造は、第一には、自分自身の爲でありました。さうして第二には、他人の爲でありました。先生は、自分の中の、生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂を護りつつ、かねてこの點に於いて、他人に活らきかけ、他人を反省せしめて、生一本の、雜り氣のない、純粹な、美しい魂の世界に、引き入れようとするのであります。

是は先生の最後の大作『明暗』に就いて考へて見ても、明白であります。

『明暗』には、あらゆる人間の弱點が書かれてゐます。あすこに出て來る人間は、凡て私だらけの人間である。假令奥底の方には、良いものを持つてゐる者でも、一方で持つて生れた私の爲に、その良いものを出しきれないで、不純な、ごまかしの、不親切な人間としてしか動いてゐない。殊にあの中で主人公の役目を勤めてゐる津田といふ男などは、自分の妹から「御自分達の事より外に何も考へていらつしやらない方」だとか、「自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で餘所を向いて取り合はずにゐられる方」だとか、「あなた方は決して他の親切を受ける事の出來ない人だといふ意味に、多分御自分ぢや氣が附いていらつしやらないでせう」とか言はれてゐるだけあつて、相手の短所ばかりを見て、それで自分の方がえらい氣になつてゐる、從つて自分の短所には決して氣がつかないで、獨りで思ひ上がつてゐる人間として、然も自分で平氣で嘘をつき、他も必ず嘘をつくものと思ひ込んでゐて、それで少しも厭世的になる事のない、――生一本の、雜り氣のない、純粹の、美しい魂とは凡そ反對の、打算に明るい、いつでも利害を忘れる事のない、よごれた、不信な、愛のない、人間として描き出されてゐるのであります。津田には、至情の動く所、己を空しうして、對象の中に跳り込むといふ、美しいものの閃めきがない。それだけに津田には、捨て身な所がない。いつでも身をかはしかはしして、何か大事なものを避けて計りゐる。從つて津田は、一時、目前の事はごまかして通る事は出來ても、最後のどたん場へ行つて、どうにも身のかはしやうがなくなつた時には、牛の角のやうなもので、づぶりと横腹を突きさされるにきまつてゐる。然も津田には、そのづぶりと横腹を突きさされる時の、漠然たる不安が襲ひかかつて、絶えず何かを恐れ、絶えず何かに追つかけられるやうな日が、一日一日と濃厚になつて來るのであります。

勿論『明暗』は、中途半端で斷れてゐるものであります。從つて『明暗』がこの先きどうなるかは、我我の想像を絶した事ででもありますし、またそんな事を想像するのは、餘計な事だと言へさうででもありますが、然し『明暗』の今まで書かれてゐる部分だけから考へて見ても、津田が、是までの自分の缺點なり自分の弱點なりを、眞面目に反省し、何等かの方法でそれらのものを乘り切る覺悟を立てるのでなければ、決して眞人間にはなれない、眞人間になれなければ、津田は愈輕蔑すべき人間である、――その津田の、人間としての、生きるか死ぬかの、際どい境目を書かうとしたものが、『明暗』であるといふ事だけは、疑へないのであります。

私は是まで屢、眞面目な『明暗』の讀者から、『明暗』は讀んで、隨分不愉快な作品である、あれはどうも苦しくて、到底長く讀んでゐるに堪えないものである、といふ批評を聞かされました。是は私といへども同感であります。私のみではない、先生自身も亦同樣であつたと見えて、『明暗』を書いてゐる間、先生は、朝の内を『明暗』の執筆にあて、午後から夜へかけては、不愉快な心持を一掃する爲めに、畫をかいたり、詩を作つたりしてゐると、言つてゐられました。然し先生が、それほどの不愉快を忍んでも尙、『明暗』を書かずにはゐられなかつた所以のものを考へて見れば、先生の意志は明白であると言つて可いのであります。先生はかうして、一寸見た所では大層體裁の可い人間の、奥深い所に喰ひ込んでゐて、その人間を動かしてゐるところの、不純なもの、ごまかすもの、嘘をつくもの、利害を打算するもの、我儘勝手に振舞ふもの――虚僞だの虚榮だの私だのを、丹念に掘り出して、人人の前に曝しものにする事が、人人にとつて必要な事であると、信じたのであります。人人はそれによつて、今まで丸で氣がつかずにゐた、自分の腹の底に喰ひ込んでゐるさういふ穢ないものを、はつきり反省するに違ひない。元來穢ないものを、穢ないものとして、はつきり名ざすといふ事は、人人にその穢なさを穢なさとして、認識させる事であります。然も人人は、穢ないものを穢ないものとして認識する事によつて、その穢なさを反省する。反省は超越への促しである。かうして先生は、人人を、信と愛と誠とが支配する、生一本の、雜りけのない、純粹な、美しい世界の中へ、連れて行かうとするのであります。穢ないものを穢ないものとして書いて、それが誰にも反對する事の出來ない確

實さと鋭敏さと精到さと深刻さとを持ち得る爲めには、勿論その穢ないものを攫み出す頭を必要とするのではありますが、然しそれとともに、如何なる微細なよごれでも、それをはつきりよごれとして取り上げる事の出來る、生一本の、雜りけのない、純粹な、美しい魂を必要とする事は、言ふまでもない事であると思ひます。

生先は、生前よく、氣むづかしやだの、變人だの、ある時は、氣違ひとさへも言はれました。然しかういふ魂を持ち、かういふ道をあるいて來た人間が、果して氣むづかしやであるか、變人であるか、乃至は氣違ひであるかは、問はずして明らかなのではないかと思ひます。勿論先生は、度度繰り返して來たやうに、生一本の、雜りけのない、純粹な、美しい魂の所有者でありました。同時に先生は、それを護り通す事に、火のやうな情熱を持つてゐた人でありました。從つて、その純粹を傷つけ、その美しさを害ふやうなものに出會つて、先生が猛然としてそれに對抗するのは、當然の事でありました。その場合の先生は、無論相手から見れば、氣むづかしやででも、變人ででも、氣違ひででも、乃至は惡魔ででもあり得たに違ひないのであります。然しこつちが生一本の、雜りけのない、純粹の、美しい魂を持つて先生に對する限り、先生は、氣むづかしやでも、變人でも、況んや氣違ひでもないのみならず、先生はそれを尊重し、愛撫し、その爲めにあらゆる親切を盡さうとする、實に暖かな、思ひやりのある、且つ感激的な人でありました。生前、先生を愛し、純粹に先生に對する愛情のみから、先生の許に集まつた弟子どもは、それぞれに、さういふ經驗を泌泌重ねて來た者計りである筈であります。弟子どもはみんな、先生を氣むづかしやだの、勿論氣違などとは、少しも思つてゐない。あんな暖かな、あんな親切な、又あんな他の長所ばかりを見てくれて、他の短所を取り扱ふのに思ひ遣りのある、そのくせ自分の愛や親切や意見を、他に決して押しつけようとしない、良い先生はないと思つてゐるのであります。（於仙臺中央放送局――九・一二・九）

漱石先生の畫

漱石先生の畫を見る度に、きつと私は、正岡さんの畫を思ひ出す。正岡さんの俳句と先生の俳句とが、著しい對照をなしてゐると同じやうに、正岡さんの畫と先生の畫とは著しい對照をなしてゐるのである。

『仰臥漫錄』に出てゐる正岡さんの畫を見て一番に感じる事は、正岡さんがいかにも頭の良い人だといふ事である。正岡さんは、自分の頭の何所の隅にも、模糊たる物の影が宿る事を許さなかつた。また正岡さんの眼と手とは、十分鮮明に十分精確に、物の形を攫む事を知つてゐた。然しそれだけにどうも出來あがつたものに味がない――味が外に出切つて、奥行が知れて、剩へ全體の感じがなんとなく冷たいといふ感じがする。

是に比べると、先生の畫は、可也頭の惡い畫である。といふと語弊があるが、ともかく先生の畫の底には、大抵の場合、明晰である事を妨げる、模糊たる何ものかが横たはつてゐる。もつと適切に言ふと、先生の畫は、先生の頭の良い事を感じさせる前に、先生の心の暖かい事を感じさせる畫であつた。然もその暖かさは、外に、畫の表に描き現はされるといふよりも、寧ろ内に、畫の奥に隱されてゐるといふ種類の暖かさであつた。先生の畫は、條理整然とした理知的な感情で活きかけてくるよりも先に、渾沌縹渺とした氣分的な感情で活き掛けて來る。

先生は熱い、さうして豐な、感情の持主であつた。同時に先生はそれと雁行する鋭い、さうして強い、理知の持主であつた。さうして先生の衷(うち)では、この二つのものが、色色の場合に色色の形をとつて、互に戰ひ合つた。この戰ひの記錄が、先生の小説である。先生の書にも亦、ある時期までは、何かさういふものを感じさせる所がある。然し畫は、先生をこの戰ひから解放した。畫をかく時の先生は、その理知の抑制を受ける事甚だ僅で、然も極めて自由に又極めて純粹に、その感情に身を委せる事が出來たやうに思はれる。先生

は常て、自分は愉快だから畫を描くのではない、反對に、不愉快だから描くのだ、と言つた事があるが、畫は（書も亦晩年に至つて）先生にとつて眞正な、さうして嚴肅な意味での、「遊び」であつた。鮮明に精確に物の形を攫まうとするといふやうな、理知の活きの勝つた心の運用は、或は先生の能はざる所であつたのかも知れなかつたが然し、この「遊び」の純潔を曇らせるものとして、寧ろ先生の、欲せざる所であつたといふ氣がする。

書のある部分を見ても、亦畫のある部分を見ても分るやうに、先生は一面、非常に器用な所を持つてゐた人であつた。然し器用は、その人の持つてゐるものを、凡て表に列べて見せるだけに、含蓄の趣を乏しくする。稚拙は是に反して、内に表現を迫るものが磅礴してゐる限り、その藝術に著しく奥行を與へる。畫に於いて先生は、どうかすると顏を覗けたがる器用を押へて、完全にその稚拙を放たうとした。さうしてその稚拙を自然に醇化して行かうとした。華やかな色彩を喜ぶ事から始まつて、その上に燻しが掛けられ、淡彩に移り、最後に水墨となつて、冴冴した高い氣分を表現してゐるその發展の跡を、年代を追うて眺めて見るならば、恐らく何人にも、この邊の消息を明かにする事が出來るだらうと

思ふ。畢竟先生は最も高い意味で、稚拙な畫を描いた人だつたのである。勿論先生の畫は、玄人から見たら、こんな拙い畫はないと言ふに違ひない。然し先生の畫には、どんな玄人にも　凡そ玄人と名のつく者の畫には見出す事の出來ない、高い氣品があつた。是を最も簡單に證明する方法は、先生の畫と外の玄人の畫とを、床の間に、相次いで掛けて見る事である。先生の畫をかけると、どんな床の間でも、床の間そのものが、俄然として品位を帶びて來るのである。

（『時事新報』――大正九・一〇・一〇）

カーライル博物館

ロンドンでカーライルが住んでゐた家といふのを見に行つたら、婆さんが出て來て、お前はプロフェッソ・ナツメを知つてゐるかと訊いた。プロフェッソ・ナツメは此家に四度來た。四度目に署名して行つたものが此家に保存されてゐる。見せてやらうかとも言つた。――先生は『カーライル博物館』の中に「余は倫敦滯在中四たび此家に入り四たび此名簿に余が名を記錄した覺えがある」と書いてゐる。四度來て四度目に署名して行つたは少し可笑しいとは思つたが、兎に角それは名簿を見れば分かる事である、何も今この婆さんに抗議を申し込むには當らないと思ひ返して、どうかそれを見せてくれと賴んだ。すると婆さんは、プロフェッソ・ナツメの著書は、或日本人から贈られて持つてゐる。それも見たければ

見せてあげる。あの著書の中でプロフェッソ・ナツメは、私の事をお婆さん、お婆さんと書いてゐるが、あれは非道い。二十何年も前に私がお婆さんである譯がないぢやありませんかと言つた。

婆さんの年は、よくは分からない。然しどうやら五十恰好の年配である。假に五十として、先生がロンドンに著いたのは千九百年の十月の事であつた。二十四年前のこの女は二十六だつた筈である。いくらこの女が不器量でも、又いくら先生に西洋人の歳が分からなかつたにしても、二十臺の女を捕まへて、「五十恰好の肥つた婆さん」抔と書く筈がない。是は愈あやしいと思ひ始める。それでも婆さんが來いと云ふから、後に喰ついて地下室の臺所に這入つて行く。

壁際の棚の上に、先生の選集『色鳥』が置いてある。反對の壁際のテーブルの前には、案内の婆さんの姉らしい、婆さんが一人坐つてゐた。

兎も角その署名のあるといふ名簿を見せてくれないかと言ふと、名簿は上の客間にあると言ふ。私は又改めて、臺所から上へ上がつて行つた。

名簿は、大型の分厚な簿記帳のやうな帳面で、都合四冊かあつた。先生は千九百年から千九百二年までロンドンにゐた。だから、その三年の間を探がせば可い。然し第一卷の第一頁から丁寧に署名を讀んで見ても、先生の名前はなかなか出て來なかつた。仕舞には少少面倒になつたので、丁度其所へ上がつて來た案内の婆さんに、プロフェッソ・ナツメの署名は一体どの名簿にあるのかと訊いて見た。案内の婆さんは、暫らく考へてゐたが、是も忘れて了つたと見えて、地下室へ降りて行く階子段の方へ首を出して、ねえ、あのプロフェッソ・ナツメの署名は名簿の何卷の何頁だつたかねえ、と臺所の婆さんに聲を掛けた。下から何か返事をしたと思つたら、急いで復つて來て、分かりましたよ、此所ですよ、と名簿の或頁を開けてくれた。

見ると、其所には、先づ千九百一年八月三日と年月日があつて、ケー・イケダと書いてある。さうしてすぐその下にケー・ナツメと續けてある。――千九百一年の八月三日と云へば、先生が倫敦についた翌年である。翌年とはいへ、まだ倫敦に落ついて九ケ月かそこいらにしかならない。もし先生がこの博物館を見物する目的だけで倫敦に來たのなら、一

月のうちにでも先生は、一度や二度は此所に來かねないに違ひなかつた。然し先生は何もこんなものを見物しに倫敦まで來た譯ではなかつた。九ケ月やそこいらで、四度も此所へ來る道理がないといふ氣がする。少くとも是は私には、先生が初めて此所に來た時の署名で、婆さんのいふやうに、四度來て四度目の署名ぢやないに違ひないと思はれた。

先生の日記をあけて見ると、千九百一年八月三日の部には「朝 Battersea ヨリ South Kensington ニ至リ池田氏ヲ訪フ。同氏宅ニテ晝飯ヲ食フ。午後 Cheyne Boad 24 ニ至リ Caryle ノ故宅ヲ見ル。頗ル粗末ナリ。」と書いてある。此所には初めてだとも二度目だとも明記してはない。然し、日記のそれ以前の部分には、さういふ事を想像させる如何なる辭句も見出されない。第一この文章そのものの中に、如何にも初めて行つて見て意外であるのに驚いたらしい、第一印象的の記述がある所から見ても、この八月三日は、先生が初めてカーライルの家を見に行つた日に違ひないと想定するに十分な理由がある。案内の婆さんは、好い加減な出鱈目を言つてゐるのに違ひない。

然も婆さんの出鱈目はそれのみには止まらなかつた。婆さんは、先生自身が署名したのだと、署名する所を傍に立つて見てゐたやうな事を言つてゐるが、然しこの署名は、どう考へて見ても、先生自身の筆蹟ではないのである。

外國字の筆蹟を鑑定する事は困難である。然しこの署名が先生の筆蹟でない事は、多少でも先生の外國字の筆蹟に親しんだ事のある者なら、誰にでもすぐ辨別が出來る程度に、顯著なものであると言つて可かつた。然もケー・ナツメといふ署名もケー・イケダといふ署名も同じ人の筆蹟である所から推測すると、是は恐らく池田菊苗さんの筆蹟であるのに違ひなかつた。勿論池田さんの名前が先で先生の名前が後であるといふ事實は、自然、先生自身が池田さんの名前も自分の名前も一緒に書いたのではないかと想像させるのに十分ではあるが、然し私には、いくら先生が違つた字を書き得るにしても、是程不斷と違ふ字を書いたらうとは、到底考へる事が出來ないのである。もつとも、池田さん自身が、自分の名前と先生の名前とを一緒に書く場合には、先生の名前を先に、自分の名前は後で書くに違ひない。然しそれも、池田さん自身が自分の署名をする時には、あとで先生も自分で署名するものと思つて、何氣なく先に自分の名前を書いて了つた、所が先生の方は、例へ

ばカーライルの事で頭が一杯になつてゐるか何かで、署名をするのが面倒臭く、君序に僕の名前も書いて置いてくれ給へと言ひ、池田さんも、ああさうかと、無雑作にそのあとに先生の名前を代署したのだ、と想像すれば、この名前の順序は不思議な事でもなんでもなくなる筈であつた。さうしてさういふ事は、よくある事なのである。

然し、さう解釋するとして、困るのは、『カーライル博物館』の中の「此時は實に余の名の記入初である」といふ文句の始末であつた。この八月三日が、先生がカーライルの家に行つた初めての日であつた、その時の署名は池田さんの書いたものである、とすれば、先生が「可成丁寧に書く積りであつたが例に因つて甚だ見苦しい字が出來上がつた。」といふその名前の「記入初」は、元來いつの事で、どの名簿に載つてゐるかといふ問題である。——然し、いくら探して見ても、この八月三日以前には、千九百年の十月以降、どの頁にも、どの頁にも、先生の名前は出て來ない。八月三日以後にはないのかと、婆さんに訊いて見ると、後にも先にも是つきりだといふ返事である。先生が四度來て四度署名して行つたと書いてゐる事も、最初に自分で署名して拙い字が出來上がつたと書いてゐる事も、結局先生の思ひ違ひだつたのではないかと思はれる。さう言へば、先生の思ひ違ひと思はれるものが、外にも一つあつた。それは、先生がその「記入初」の折に名簿の前の方を繰つて見ると、「日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でこゝへ來たのは余が始めてだなと下らぬ事が嬉しく感ぜられた。」と書いてゐるにも拘らず、名簿を繰つて見ると、この八月三日以前に、然も先生が倫敦に著く前に、既に日本人で此所に來て署名してゐる者があるといふ事であつた。勿論、此所で私が先生の名前を探し出さうとして名簿を繰る態度と、先生が漫然と誰か來てゐるかなと思つて名簿を繰る態度とでは、既にその態度が全然違ふ筈である。從つて是は、先生の思ひ違ひではなくて、先生の見落しだつたのかも知れない。日本人で此所へ來たのは自分が初めてだなどといふやうな、下らない事に、嘘を吐いて喜んでゐるやうな先生ではなかつた。先生は恐らくこの日本人の名前を見落す事によつて、本當に自分が最初の訪問者だと思つてゐたに違ひない。

それはそれで可いとして、四度來て四度署名させられた、初めて署名させられた時には頗る拙い字が出來上がつた、といふ先生の言葉は一體どう解釋すべきだらうか。思ひ違ひ